

# 『Fiction(フィクション)』

戒名を授かった猫

Da～Ya「ダ～ヤ」の Episode(逸話)

(紀元前2世紀頃、日本の地にあったかも知れないお話し?)

「ダ～ヤ」と「もうひとつの徐福(ジョセフ)伝説」

&

「ダ～ヤ」と「もうひとつの竹取物語(カヤ姫)伝説」

作: 日根乃主 もっタリ

(初版: 改訂20)

2017年5月20日

## ●「まえがき」

「猫に九生有り」・・・「猫にはたくさんの命があって、9 回生れ変わることが出来る」の迷信は海外から来ているのだとか・・・1560 年前後、ボードウィン作『猫に用心』の一節「魔女はその猫の体を九度使うことを許される」(A cat has nine lives.)というものから来ているのだと・・・

このフィクション物語を思い浮べたのは「銅鐸が淡路島で発見された」という記事からでした。

図 1: 謎の青銅器「銅鐸」淡路島で発見 (<http://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/700/217239.html>)



●2015 年 6 月、青銅鏡を作る為の鋳型が九州の「須玖(すぐ)タカウタ遺跡」で見つかった。何でも、国内初出土「多鈕(たちゅう)鏡」の鋳型なのだそうです。(紀元前2世紀頃の物とされ) 今までの学説を200年程遡らせたとか・・・

●また、淡路島においても土砂採掘場から銅鐸が新たに7個が発見とか・・・  
(これもまた、紀元前2世紀頃の物？だとか・・・)

●更に、紀元前2世紀頃といえば「徐福」伝説のお話し・・・

「徐福」とは、中国の秦の始皇帝の命で「不老不死の妙薬」を求めて、約三千人？の船団と共に、中国の東の海に姿を消した人物のお話しで、日本の各地にその伝説が残っている・・・

<http://www.asukanet.gr.jp/tobira/jofuku/jofuku.htm>

縄文式土器の時代から、弥生式土器の時代へと移り変わる時期とも重なるのだ？とか・・・

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BC%A5%E7%94%9F%E6%99%82%E4%BB%A3>

青銅器(銅鐸や銅鏡)を作る技術も、この時期から特異的に起こっている・・・

いったいこの紀元前2世紀頃に、何が有ったのだろうか・・・？

●淡路島に点在する古代ヘブライ人の渡来伝説(古代イスラエルの失われた十支族の話)・・・  
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A8%E3%82%BB%E3%83%95%E6%97%8F>

この物語は史実に基づいたストーリーではなく、史実の断片を拾ってきて、著者の偏見で、「こうだったのかも知れない」と、無理やり繋ぎ合わせたフィクション物語なのです。

(この作品に営利目的の意図はなく、インターネット上の公開資料を拝借しております)

本編に掲載のリンク・アドレスを辿ることで、関連の公開情報が得られるようにしています。

併せて、参照していただければ、ストーリーに一層イメージが膨らむものと思います。

紀元前2世紀頃の中国、王政(秦始皇帝)は、鉄をより強靱にする技術を手に入れ…そして、鉄器の改良と強大な武力を背景に、覇権争いに勝ち上がり、次々周辺諸国を亡ぼしていった…やがて、春秋戦国時代の覇者となります。

そんなある日、始皇帝(王政)は亡ぼした斉の国で保護されていた賢者:徐福を呼びつけ、始皇帝「我が秦の国が永遠に強大であり続け、この世に平和を実現するには？」と問う。  
徐福「この世の戦さを鎮め、あなたが理想とする平和を実現するには、あなたご自身が永遠に指揮を執り続けることじゃ」と答えた。

それで、自身が永遠に指揮を取り続けるには、始皇帝が自ら不老不死と成ることを悟り、徐福に遥か東の海を渡った先に幻の理想郷にあると聞く、不老不死の妙薬を手に入れるように命じたのであった…

しかし、ここで秦始皇帝ほどの人物が、なぜ徐福の提言を信じたのだろうか？という疑問…

中国の古文書では徐福は斉の国の地方役人であったという情報程度しかないのですよ。

●秦始皇帝が亡ぼした国の一地方役人などの意見を聞くのだろうか？…「いや、断じて無い！」

●徐福は大柄な方士(呪術師・易学者・占い師・妖術者)であったと、記されているとか…

●方士:徐福が、他の方士とは異なり、始皇帝が有益と認める何かが備わっていた…

…それは、徐福は、実際に見てきた体験を持っていたか？或いはその関係者であったのでは？つまり、徐福はかつてシルクロードを通して交易を行っていた者の関係者ではなかったのかと…(或いは、失われた古代イスラエル十氏族の末裔ではなかったのかと…)

だとすれば、秦始皇帝には徐福からの情報…「エジプトやギリシャ・ローマ・オスマントルコの高度な文明」「マケドニアのアレキサンダー大王」の逸話などは魅力的で価値があったはず…

●或いは徐福が秦始皇帝に鉄を強靱にする技術や、歯車の技術や、世界情勢を伝えていた…

…とすれば…そんな、方士:徐福の情報を信じていたとしても、不思議はないと思うのですよ。

それで、書出しを、更に100年程遡ることにし、物語の始まりをEpisode I としました。

続いて、物語の主題である「もうひとつの徐福伝説」をEpisode II としました。

…加えて…日本に古来から口述伝承されていた物語が既にあって「竹取物語」は平安時代にその内容を時の権力者の手によって加筆・文書化されていったものだと思えるのですよ。

21世紀の現代から、遥か約1100年前の平安時代に「竹取物語」は文書化されたとのこと…しかし、その物語のモデル話が、更に約1100年程、遡った紀元前2世紀頃のお話としたら…こんなに、興味深いことはないと思うのですよ。

それで、「竹取物語のモデル？」としての(カヤ姫)伝説話をEpisode IIIとして書き加えました。

参考資料(P-72)●②秦の始皇帝陵と万里の長城

(P-73)●③月氏の国・楼蘭

(P-73)●④「タミル語」と「日本語」に共通する発音の特徴

(P-75)●⑤ぶっちゃけ大乘仏教のイメージ

※(P-84)●⑩「竹取物語」

## 目次

### (Episode I):「ダ～ヤ」と「シルクロードの民」

※『ダ～ヤ』と「シルクロードの民:徐福(ジョセフ)と楼蘭国カヤ姫」

- 1-1:ダ～ヤの霊
- 1-2:ダ～ヤと楼蘭国ラン妃
- 1-3:幼いジョセフ(徐福)と王政(後の秦始皇帝)
- 1-4:ダ～ヤと幼い楼蘭国カヤ姫
- 1-5:若きジョセフ(徐福)の旅

### (Episode II):「ダ～ヤ」と「もうひとつの徐福(ジョセフ)伝説」

- 2-1:ダ～ヤと鍛冶職人の弟子:チコ
- 2-2:戦国武将蒙恬の野望とその息子蒙良
- 2-3:ダ～ヤと徐福
- 2-4:新天地への旅立ち
- 2-5:新天地での生活が始まる

### (Episode III):「ダ～ヤ」と「もうひとつの竹取物語(カヤ姫)伝説」

- 3-1:ダ～ヤとジジ
- 3-2:有力部族5人の貴公子からの求愛にそれぞれ難問を出す
  - ①ハタベの皇子(「竹取物語」に登場する「石作の皇子」)のお話し
  - ②ソガベの皇子(「竹取物語」に登場する「車持の皇子」)のお話し
  - ③アベの主人(「竹取物語」に登場する「右大臣阿倍御主人」)のお話し
  - ④ウノベの主人(「竹取物語」に登場する「大納言大伴御行」)のお話し
  - ⑤モノノベの主人(「竹取物語」に登場する「中納言石上麻呂足」)のお話し
- 3-3:和の国を束ねる帝(みかど)からの求愛
- 3-4:ダ～ヤたちの『紀元前版Mission Impossible(ミッション・インポッシブル)』

### (4):その後

### (5):ダ～ヤから読者の皆さんへ、メッセージ

- 参考資料(P-68) ●①「古代イスラエルの歴史」と「失われた古代イスラエルの十支族」  
(P-76) ●⑤「エジプト第19王朝のラムセス2世、ヒッタイトとの戦争逸話」  
(P-77) ●⑥「英雄アキレウス、トロイア戦争の逸話」  
(P-78) ●⑦「ペルシヤ帝国建国から衰退の逸話」  
(P-79) ●⑧「アレキサンダー大王とペルシヤ帝国崩壊の状況」  
(P-84) ●⑨「竹取物語」

## (Episode I) :「ダ～ヤ」と「シルクロードの民」

※日本の縄文時代から弥生時代への移行はマケドニア:アレキサンダー大王による東方遠征で、更に東方へと逃避航したシルクロードの民が起源だった？

BC330年頃・・・そこには、シルクロードをつたって、砂漠を東へ西へと旅する民(タミル)の姿が浮かび上がってきます・・・

エジプト王朝 BC1230 年頃、モーゼに導かれた古代イスラエルの民が安住の地を求めて放浪の民となって永い永い年月が過ぎた・・・

失われた古代イスラエルの十支族の人々は定住を求めず、領土を持たず(旧約聖書にも載らず)にシルクロード交易の場を彼らは開拓していったのでした。

### 1-1:ダ～ヤの霊

タクラマカン砂漠の西のはずれの岩場の陰、野生の母猫が5匹の子猫を産みました。(弱肉強食の世界)自然界の掟は大変厳しいものがあります。獣の匂いを嗅ぎつけて、キツネやアナグマがやってきて、子猫を啜って連れ去って行きます。母猫は必死に子猫を守ろうとしますが、所詮、大きい獣には敵いません。母猫は生れたばかりの一匹(ダ～ヤ)を啜って、安全な木の上に運びます。

もう一匹を助けに向かったのですが、巣にはすでに大きい獣たちが侵入して来ていた。

母猫は必死に抵抗したけれども、ダ～ヤのもとには戻ることはなかったのです。

真夏の夕暮れ、突然、雷鳴がとどろいた。稲妻はダ～ヤが隠れていた木を直撃した。

木は一瞬にして、燃え上がり、残ったのは真っ黒な炭と化したのでした。

ダ～ヤの肉体は焼失し、霊は昇天してしまった・・・何んてこった・・・

・・・ダ～ヤの霊の目覚め・・・

ここは・・・いったい何処なの？・・・広～い空間の中に・・・実体の存在しない・・・霊が、ポツンと無重力の宇宙空間を漂う水滴(実際的には質量を持たないエネルギーのかたまり?)のように浮かんでいる。

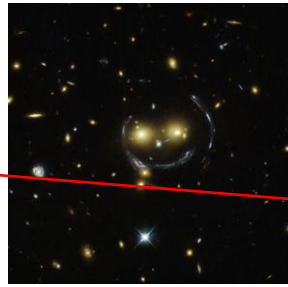
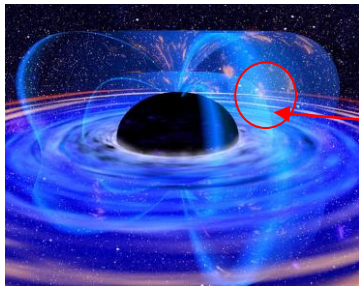
※「無重力の宇宙空間を漂う」って言っても、139億年前のビッグ・バンから始まった宇宙が光に近い速度で拡大し・・・しかも、減速もしないで加速拡大し続けている・・・不思議ですね。

・・・近年、地球から120億光年の距離に銀河系の総質量の千倍を超える超巨大ブラックホールが見つかったとのニュースがありました。その超巨大ブラックホールが放つ輝きは今から120億年前の光なのですって。ビッグ・バンによる宇宙創成から僅か20億年程で、これほどまで巨大なブラックホールは理論上は有り得ないことなのだとか・・・

(もしかして宇宙創成に関連した巨大なブラックホールなのか？・・・)

宇宙創成から2～3世代目の太陽系が生まれて約47億年・・・地球が生まれて44億7千万年だとか・・・そして、約20億年後には太陽系も崩壊するのだとか・・・まことに諸行無常ですね・・・

図 2: 宇宙のイメージ



重力レンズによる光の屈折

・・・重力によって、光も曲がるのですね  
だとしたら、私たちが見ている宇宙とは・・・  
(この青く「もや〜」っと曲がった光の空間の中にあって)  
真の宇宙の一部分しか見えていないのでは？

宇宙は私たちの現在の知識では理解を超えた存在であり、霊の世界は更に理解できない・・・  
私たちが知っている物質というものは宇宙全体の数%に過ぎないので・・・  
残り大半の物質はダーク・マターやダーク・エネルギーと称する未知の物質ということだそうです。  
(最近の研究ではダーク・エネルギーとは真空が持つエネルギーではないか？とされています)  
もし、霊というものが実在するとしたら、それは質量を持たないダーク・エネルギーなのかも・・・

霊が質量を持たないダーク・エネルギーならば、アインシュタイン博士の一般相対性理論からは、  
ダーク・エネルギー状態の霊(意識)は・・・光より速く移動が可能？・・・なのかも？  
つまり、霊は時空を超えて移動できるのかも？・・・っと、勝手に理解を進めてしまった。

どこからか・・・霊に伝わって来る波、心に言葉が聞こえるのです。  
「ダ〜ヤよ、目覚めたかね？」

ダ〜ヤ「聞こえます、どなたでしょうか？」

・・・「わたしは、普賢菩薩じゃ。そして、ここはダーク・エネルギーの世界なのじゃ。」

ダ〜ヤ「普賢菩薩様？」

普賢菩薩「そうじゃ、ダ〜ヤは、この普賢のもとで修行をしておる霊なのじゃ」

普賢菩薩「そなたは、地球と呼ばれる星で生まれたばかりの猫の霊で修行をする予定じゃった」

「しかし、その修行の機会もなく、偶然の落雷によって、昇天してしまったのじゃ」

「これから、どうしたものか、阿弥陀如来様に、これからの進め方を尋ねに行こう」

ダ〜ヤ「阿弥陀如来様？どなたですか・・・普賢菩薩様との関係は？」

普賢菩薩「そうじゃな・・・ダ〜ヤは修行に出ると、過去の記憶も無くなってしまうのであったなあ」

「まあ、無理もないか・・・これで、何回もの繰り返しの説明になるのだが・・・

私、普賢は釈迦如来様に仕えておる傍侍である。ダ〜ヤは私の下で修行を  
しておるのじゃ、分かるかのお」

「ダ〜ヤが修行から戻るとき、この世担当の釈迦如来様の配下から、あの世担当の  
阿弥陀如来様に移るのだが、ダ〜ヤの場合は、この世での修行の機会がなかった  
ので、評価不能の状態なのじゃ」

ダ～ヤ「何のことやら、さっぱりです。つまり、釈迦如来様を筆頭に階層が有って、ダ～ヤはその一番下っ端？ということですね」

普賢菩薩「いやいや、この世界での筆頭は大日如来様じゃ、いわば、会社組織で CEO じゃな。CEO の組織下に釈迦如来様や阿弥陀如来様…如来とは、いわば、会社重役かな？まあ、また修行から戻ってきたら、又、最初から説明をし直さなければならないので、深くは、考えなくてもいいですよ」

ダ～ヤ「そんなものなんですね…」

普賢菩薩とダ～ヤは阿弥陀如来様の前え進み出た。

普賢菩薩は阿弥陀如来様に進言するのです。

普賢菩薩「ダ～ヤの修行は雷というアクシデントによって、修行の機会もなく、終わってしまいました、こうした場合の救済措置は如何いたしましょうか」と。

阿弥陀如来「そうでしたか…、ダ～ヤよ、『賢苗院陀弥安仔』は私が名付けました。

ダ～ヤは人に仕え、人から愛されることで、接した全ての心が癒されたならば、今回の修行から、次の段階に進むことになるのです」と。

「ダ～ヤよ、そなたは修行の機会が無かったのですから、次に進むためには、再度、修行に出るか？あるいは留まるか？の選択は、自身が申し出なさい」と。

ダ～ヤ「わたしは、母から生まれて、その日の内に雷に打たれて昇天したと、聞かされました。つまり、人に仕える機会が無かった訳でして、再度の修行を与えてくださいませ」と。

阿弥陀如来「それでは、釈迦如来に伝えて、再度の修行の機会を与えよう」

「普賢菩薩よ、再び、ダ～ヤを修行に出してください」

普賢菩薩「承知いたしました、再度、ダ～ヤを、修行に出します」と。

普賢菩薩はダ～ヤに M(Mind) to M(Mind)？の伝承をします。

普賢菩薩「えへん！ ダ～ヤよ、めんどうだから、私のことをフゲンと呼べ」

フゲン「そなたが、モーゼに寄り添って、エジプトの地から人々を導いて安住の地を目指して、試練の旅に出たときの事は覚えておるか？」

ダ～ヤ「全く記憶にありません…」

フゲン「それでは、そなたの修行の話をしよう」

「そなたは猫の肉体(色)を通して、人との絆を感じ(受)、想い、愛し愛される(行)で、相互の心を認識し、成長することが修行で求められているのじゃ。

…人の霊とは未知のものに恐怖と疑念を持ち、物欲に捕らわれるのでそなたの修行にと、阿弥陀如来様が送り出されているのじゃ」と。

ダ～ヤ「…」



フゲン「玄奘三蔵が天竺から伝えたと言われる『般若心経』の話を憶えておるか？」

ダ～ヤ「さっぱりです」

フゲン「前回の修行は玄奘三蔵法師の修行と帯同しておったのじゃが・・・」

「そうであったのお・・・ダ～ヤの記憶は飛んでしまっておるのじゃった・・・」

フゲン「觀自在菩薩 行深般若波羅蜜多時、照見五蘊皆空、度一切苦厄。舍利子。

色不異空、空不異色、色即是空、空即是色。受・想・行・識亦復如是。舍利子。

是諸法空相、不生不滅、不垢不淨、不増不減。

是故空中、無色、無受・想・行・識、無眼耳鼻舌身意、

無色・声・香・味・触・法。無眼界、乃至、無意識界。

無無明・亦無無明尽、乃至、無老死・亦無老死尽。

無苦・集・滅・道。無智亦無得。以無所得故、

菩提薩垂、依般若波羅蜜多故、心無罣礙、無罣礙故、

無有恐怖、遠離一切顛倒夢想、究竟涅槃。

三世諸仏、依般若波羅蜜多故、得阿耨多羅三藐三菩提。

故知、般若波羅蜜多、是大神呪、是大明呪、

是無上呪、是無等等呪、能除一切苦、真實不虛。故説、般若波羅蜜多呪。

即説呪曰、羯諦羯諦、波羅羯諦、波羅僧羯諦、菩提薩婆訶。般若心経」

ダ～ヤ「ところで、玄奘三蔵様・・・って、どなたですか？」

フゲン「そうであった・・・ダ～ヤが昇天した時代より、何百年も後の時代の人物であったのお。

今のダ～ヤが知らないのは無理がないのお」

ダ～ヤ「この世界には時間軸というものが無いのですね・・・」

フゲン「時間は意味が無いのじゃ、大事なことは霊のよりどころについて説いているのじゃ」

「つまり、色即是空、空即是色、不生不滅、不垢不淨、不増不減。なのじゃ」

色と同様に受・想・行・識もまた全てが意味の無い空虚なものであると説いているのじゃ

ダ～ヤ「・・・」

フゲン「ここは、ダーク・エネルギーの世界、人の霊を物(色)への欲から解放することなのじゃ」

「霊は万物に宿るものであり、人だけに許される物ではないのじゃ」

「汝が為すべきこととは物欲に捕らわれる人々の霊を解放し、導くことなのじゃ」

ダ～ヤ「・・・」

フゲン「ここでは、霊はダーク・エネルギーであり、エネルギー保存則に従って、不滅であり、

肉体を授かれば、再び、地上界に修行に出るのじゃが、誰でもが修行に出るのではなく、

(あの世?)担当の阿弥陀如来様の指示によって出るのじゃ」

ダ～ヤ「では、如来様の指示が無ければ、どうなるの？」

フゲン「それは、修行を待っている間は、ダーク・エネルギーのままで宇宙を漂うのじゃよ」

ダ～ヤ「・・・そしたら・・・フゲン様とズ～っと、お話しが聞けるの？」

フゲン「私は、いつも汝をみておるのじゃが、ダ～ヤ自身が修行を重ね、霊の恵を得なければ、

汝との話は、次に進めないのじゃよ、ズ～っと、同じ話に留まるのじゃよ」

ダ～ヤ「・・・」

フゲン「汝の霊は、いつも好奇心を以て、成長することが大切なのじゃよ」



ダ～ヤ「ところで、私はこの広い宇宙のどのあたりにいるのでしょうか？」

フゲン「宇宙の外側（別次元）じゃよ、ダ～ヤの霊がこの修行を終え、次に移る時に説明しよう」

ダ～ヤ「そ～っか・・・それで、私はどの時代に戻るのですか？」

フゲン「引き続きということなので、時代をかえずに、続けて進めよう」

フゲン「それと、今回は特別に記憶と人のことばを理解する能力を付け加えて置こうかのお」

つと言う訳で、ダ～ヤの霊は再び地上界へ送り出されたのでした。

場所は、タクラマカン砂漠の西のはずれ、カブールに近いオアシスの穀物倉庫の片隅で子猫が生まれた。母猫はここで、穀物倉庫を荒らす鼠の対策を請け負っておった。

若い母猫は子育ての経験がなく、産み落としたものの、どうしたら良いのか・・・思案をしていたが、始末に困って、育児放棄をしてしまい、どこかへ、行ってしまった・・・

ダ～ヤは助けを求めて鳴いてはみたものの「ゲェ～、ギャ～」かわいい声にならない。

産み落とされたままでの昇天では、さまにならないので、必死に這いずり回ったのでした。

どれ程の時間が経ったことか・・・、ダ～ヤの身体をやさしく掴む、人の手のひらに包まれた。

少女の名はマヤ（※後のジョセフ「徐福」の祖母となる人物）。

マヤは、子猫の身体をやさしく拭い、自分のテントに連れて帰って、かいがいしく育てたのでした。

マヤの両親はキャラバン隊のポーター（荷物運び人）をしていて、マヤも旅が多く、

テントでの移動生活、両親が交易の留守の間は、家（テント）を守っているのです。

（両親は放浪の民。古代イスラエルの失われた十支族のひとつヨセフ族の末裔であった）

ダ～ヤとマヤ・・・子猫と少女・・・過酷な生活だけど、幸せな日々が10年ほど続きました。

ダ～ヤは乏しい家の食料を、食い荒らしに来る鼠やイナゴから守り、少女マヤの心を癒しました。

やがて、少女は成長し、訪れたキャラバン隊の隊長ジョシアに見染められ、恋をし、この地を離れてしまったのでした。

年老いたダ～ヤはこの地を離れることはなく、やがて、誰にも見守られることなく、昇天した。

・・・ダーク・エネルギーの世界・・・

阿弥陀如来「ダ～ヤよ、修行は如何でしたか？ 次の段階へ進みますか？」

ダ～ヤ「阿弥陀如来様、少女マヤの心を癒せたのでしょうか？ また、少女は答えてくれたのか？

まだ、修行が足りないように思うのです、嫁いで行った少女のことも気になりますし、

どうか、もう一度、修行の続きをして、人から愛されたことを実感したく思います」

阿弥陀如来「・・・。ダ～ヤよ、それでは、続けてマヤの元で修行に出なさい」と。

タミル人ジョシアの息子ヨセフ(ジョセフ「徐福」の父)は母マヤに抱かれラクダの背に乗って…家族と共に、砂漠を旅している…

ジョシアはタクラマカン砂漠を何度も行き来し、エジプト・ペルシャから中国へ金、銀、宝石、青銅器、鉄器を運び、中国からペルシャ・エジプトへは絹織り物、陶器を運ぶ…。キャラバン隊はカブール～パミール～楼蘭～陽関～西安～洛陽を交易ルートとしていた…

ジョシアは今回の旅で、キャラバンの生活を終える予定であった…

ジョシア「今まではペルシャ帝国と匈奴と中国(秦)とが互いにけん制していたので…

キャラバン隊の通るルートは安定していた。ところが、ギリシャのアレキサンダー大王がペルシャ軍を破ったことで情勢が不安定になり、交易ルートでの略奪や紛争が絶えなくなっているのです、洛陽まで行って、私たちはそこを安住の地としようじゃないか。」

ジョシアのキャラバン隊は楼蘭に到着して、休息をしている。

キャラバン隊の中で連れて来ていた猫の夫婦に子猫が生まれた。

マヤ「どうでしょう、明日には出発の予定なのに…子猫には過酷だわねえ…どなたか…引き取ってもらえる方に預けよう」と。

それで、たまたまキャラバン隊を見送りに来ていた楼蘭国ラン妃にダ～ヤは預けられたのです。

マヤとヨセフたちをまだ安全な洛陽へと向かわせ、ジョシアは一人カブールに残して来た自分の財産を引き取りに楼蘭からカブールへと戻って行ったのです。

## 1-2: ダ～ヤと楼蘭国のラン妃

ダ～ヤを預かったラン妃はたいそう美しく、ブッダの教えを敬い、慈悲深く、素敵な王妃でした。王妃は砂漠の中へ一人(ダ～ヤと愛駱駝が同伴)で乗出し遭難者を救うのがご趣味のようで、従者たちはラン妃自身が遭難しないかといつもやきもきさせておりました。

図3：楼蘭と大月氏…楼蘭国ラン妃(筆者のイメージです。)



ある日のこと、砂漠に迷い込み、行き倒れている少年を連れて戻りました。ラン妃はその若者を手厚く保護し、十分な休息を取らせました。若者は中国での儒教とインドでの仏教の教えについて、ラン妃との語らいに大いに共感し、ラン妃の実践する姿に感銘を受けたのでした。中国国内における春秋戦国時代の乱世への心のよりどころを求めて、自身の進み方について、砂漠の中で得た悟りを持って、故郷に帰る決断をしました。ラン妃は少年の旅の成就に必要な食料や駱駝を与えて、帰国への援助をしたのでした。(※この若者が後の逸話に登場するチコの親方であったのです)

一方、カブールに戻ったジョシアは全ての財産をまとめて、新たなキャラバン隊を組み、最後のシルクロードの旅に出ます。ところが、パミールを過ぎたタクラマカン砂漠で、匈奴の略奪に遭遇し、ジョシアの財産は奪われてしまいました。

ジョシアはひとり砂漠をさまよい…なんとか、楼蘭の地までは辿り着きましたが、疲れ果てて、ラン妃とダ～ヤに看取られて亡くなります。

ラン妃とダ～ヤは丁重に旅人を弔い、託された遺品(指輪と交易日記)を大事に預かりました。

洛陽の地に居たマヤと幼いヨセフはジョシアのキャラバン隊の仲間からの悲報を受けて、悲しみの日々を送ります。

それから、10年が過ぎ、若者に成長したヨセフは、父ジョシアの氏族仲間たちに誘われて、キャラバン隊に参加します。

ヨセフは母マヤの友人から中国の絹織物や陶器などを仕入れて、キャラバン隊を組み、楼蘭国を目指して、出発します。

楼蘭から先は、戦がまだ続いており、危険でしたので、楼蘭の地で交易をして、中国に戻るルートを担当しておりました。

楼蘭の地で、交易商人を待つ間は、若者には魅力いっぱいの誘惑があります。

ヨセフは街角でラン妃と出会い、ラン妃の慈悲深い姿にあこがれの念と母マヤを思い浮かべラン妃を慕うようになります。

ラン妃もまた、かつてタクラマカン砂漠で無念の死を遂げたジョシアの面影をヨセフに重ねた。

ヨセフはラン妃を母親のように慕い、ラン妃もわが子同様にヨセフを慕い、ヨセフがジョシアの息子であることを知ると、彼の遺品(指輪と交易日記)をヨセフに託したのでした。

やがて、ヨセフは楼蘭国ラン妃にお付きの娘ミヤと恋に落ち、娘は子を身ごもります。

ヨセフの夢は父ジョシアのようにシリアのダマスカスからエジプトのカイロ・トルコのビュザンティオン(現イスタンブール)まで足を伸ばし、更に大きな交易をすることでした。

ヨセフは妻ミヤと生れてくる息子(ジョセフ「徐福」)の待つ楼蘭の地を拠点として、父ジョシアの遺品(指輪と交易日記)を基に友人が住むバビロン、東は母マヤの住む洛陽へと交易の旅を繰り返します。

ラン妃にお仕えするダ～ヤとミヤとは、いわば先輩後輩の間柄で、先輩であるダ～ヤにとっは、ラン妃の出産のときにもそうでしたが・・・

また、かわいい後輩:ミヤの初産に立合うという、幸運に・・・ダ～ヤ自身は癒されたのでした。

ダ～ヤは楼蘭の地で15年間、ラン妃の下で成長しましたが、ダ～ヤが人から癒されているかの疑問に答えを見出せずにおりました。やがて、年老いたダ～ヤは一生を終えました。

・・・ダーク・エネルギーの世界・・・

阿弥陀如来「ダ～ヤよ、修行は如何でしたか？ 次の段階へ進みますか？」

ダ～ヤ「阿弥陀如来様、私はラン妃に仕え、ラン妃のお役に立ったのか？かわいい後輩の少女ミヤの心に癒されましたが、果たして、ミヤの心を癒せたのでしょうか？・・・

修行がまだ足りないように思うのです、どうか、もう一度、修行の続きをして、人から役に立ったことを実感したく思います」

阿弥陀如来「わかりました。ダ～ヤよ、それでは、普賢菩薩の指示に従って、修行に出るが良い。

ただ・・・普賢菩薩は少しばかり別の次元におるので、待つように・・・」と。

### 1-3: 幼いジョセフ(徐福)と王政(後の秦始皇帝)

ジョセフは父ヨセフとユダヤ語で会話し、楼蘭の地では母ミヤと楼蘭の言葉とタミルの言葉、中国:洛陽では祖母マヤと中国の言葉を使い分ける程に成長した。

父ヨセフに連れられて、シルクロードを何度も行き来する旅に出ました。

行き先の各地は興味あるものばかりで、知識見聞を広めるにはまたとない機会でした。

しかし、北方騎馬民族の匈奴による略奪や中国国内での春秋戦国時代の世でもあり、商人にとっては、大変な危険を伴う仕事でもあったのです。

そんな中、黄河上流の秦の国境で若き武将の王政(ワン・セイ)と出会います。

王政「そなたはシルクロード商人か？ここから先、洛陽まではわが領土である。安全じゃ

私は、匈奴からこの関所を守っておる、武将の王政(ワン・セイ)と申す」

ヨセフ「ありがとうございます、キャラバン隊を率いております、ヨセフと申します」

王政「連れておるのはそなたの息子か？」

ヨセフ「さようでございます。名をジョセフ(徐福)と申します」

王政「利発そうな子じゃ、ヨセフよ、将来が楽しみじゃのお」

「そなた達は、どこからこのような素晴らしい宝石や金銀、鉄器を仕入れてくるのか？」

王政「そなたが見た、西の地の世界における覇権争いはどのような状況なのか？」

ヨセフ「シルクロードに伝わる、各地における覇権争いの状況をお話ししましょう」

…(シルクロードを行き来するキャラバン隊に伝わる逸話の数々を語るのでした)

参考資料(P-68)●①「古代イスラエルの歴史」と「失われた古代イスラエルの十支族」

(P-76)●⑥「エジプト第19王朝のラムセス2世、ヒッタイトとの戦争逸話」

(P-77)●⑦「英雄アキレウス、トロイア戦争の逸話」

(P-78)●⑧「ペルシヤ帝国建国から衰退の逸話」

(P-79)●⑨「アレキサンダー大王とペルシヤ帝国崩壊の状況」

その語らいは昼夜を徹して三日三晩に及んだのでした。

王政「…アレキサンダー大王に逢いたかったものだ… 英雄が逝くと、国も亡びる…国が永遠に栄えるためには、優れた指導者が続かなければならない」

ヨセフ「どの時代にも、英雄は現れる…しかし、栄枯盛衰・諸行無常なのですよ。

いつかは、新しい勢力によって交代して行くものなのですよ」と。

王政「優れた指導者が続けば…繁栄は永久に続く…ということなのであろう」

ヨセフ「どんな英雄にも、いつかは死が訪れるのです」

ヨセフの傍らで、幼いジョセフ(徐福)は父ヨセフが王政に語る話を聞き入っていた。

#### 1-4: ダ～ヤと幼い楼蘭国カヤ姫

フゲン「待たせたな…と云うか、ダーク・エネルギーの世界には時間の概念も無いのじゃが…」

ダ～ヤ「阿弥陀如来様から待つように…とのことで、お待ちしておりました」

フゲン「さて、どうしたものか…次に行くべき修行の場は、少しばかり様子が異なるかも知れぬ」

ダ～ヤ「フゲン様、お願いがございます、いままでの修行では、人との心の会話には入れずに、

只々、寄り添うことが、唯一のつながりでした。人との会話をお許しくださいます」

フゲン「そうでしたか…、ただ、人との言葉の会話は困難じゃが、人の心との会話をすることは

可能じゃ、テレパシーの能力を与えよう…上手に使いなさい」

ダ～ヤ「ありがとうございます」

フゲン「今度は戦場の真っ只中じゃ、心して行かれよ」

…っという訳で、いきなり赤子と一緒に毛布に包まれ、生れたばかりの子猫の心に入った。

抱き袋に赤子と子猫たちを詰め込み、隠れるように極寒の闇夜を小走り行く、女たちの一行…

ダ～ヤ「私の母猫はどこ？…この赤子の母親はどこ？…」っと思えることより、

この激しい揺れを何とかしようと必死でもがいているのでした。ダ～ヤは赤子に寄り添って包まれ、穏やかに眠りについて…という状態ではありません。

ダ～ヤは耳を澄ませて？っというか、必死で、乳母や侍従の娘たちの心を読み取ります。

…「姫のお命を守らなければ…」「私たちの命に代えても…」「楼蘭は陥落した…」…

ダ～ヤには乳母や侍従の娘たちの眼に涙が溢れ出るのを感じるのです。

ダ～ヤ「どうやら、この赤子はカヤ姫というらしい…」

乳母の心の叫びからは、匈奴の侵略によって、楼蘭は陥落し、王と王妃は既に亡くなられた…

…カヤ姫はお仕えした楼蘭国ラン妃のお孫さまに当たるようだ。

どうやら、カヤ姫が子猫と一緒に包められているのは、乳母の機転で寒さ除けのためらしい。

カヤ姫は私の毛がくすぐったいのだろうか？…可愛く『くちゅん』…と、くしゃみをなされる。

乳母は気になるようで包みの中を覗き込む「…」

ダ～ヤ「…」(ダ～ヤは乳母と眼と眼が合った)

乳母「姫は子猫のお前達が頼りなのです。どうかお守りを…」

ダ～ヤはどう答えれば良いのか…しっかりと乳母の眼を見つめていた。

乳母は、ときどき、毛布をそおっと開けては、大事に、子猫を赤子にあてがっては、

すぐに包み直して、ふたたび闇夜の草原を急ぐのでありました。

このあたりは、草原地帯なので、昼間は動くとすぐに追手に見つかってしまいます。

だから、夜の間には移動し、昼間は茂みや岩穴の中に身を隠します。

あとから、追いついてきた、楼蘭国の侍従たちも合流して百名程にはなりましたでしょうか・・・  
東へ・・・東へ・・・と落ち延び、なんとか秦の国境まで辿り着くことが出来ました。

秦の国の入口で警護をしていた王政(ワン・セイ)・・・後に秦の始皇帝となる人物でした。

王政「止まれ！ここは秦の国の関所だ。旅人は通行許可の証を出せ」と。

乳母「我々は、匈奴の侵略によって楼蘭の国を追い出された難民でございます。

韓の国の洛陽を目指しておりますが、通行手形を奪われてしまって、持っておりません」

王政「それでは、お前たちはこの関所を通すことはできない。

隣の国である韓の都(洛陽)までは、黄河の河岸に沿って国境の外を回って行くように」と。

王政「しかし、秦の国は、匈奴の侵略に対して、反撃する為の兵力を今、必要としているのだ。

お前たちの中で、一緒に匈奴と戦ってくれる者がいれば関所の通過を認めようではないか。

お前たちが運んでいる財宝を軍資金として、協力してくれ。それと、お前たちが手にしている  
楼蘭国の軽量で精巧な鉄器・鎧・兜の作り方を教えてくれ」と。

それで、しかたなく、従者の男たちは、王政に従って、秦の兵士として働くことになりました。

・・・『くちゅん』・・・

王政「ちょっと待て、その女が抱えている袋の中身は何だ。見せてみよ」

乳母「生まれたばかりの子猫でございます」とダ～ヤをつまみ上げた。

「数匹おりまして、温かいものですから、抱きかかえておりました」と

(ダ～ヤは思わず、隣にいた子猫の尻尾を咥えて、じゅじゅつなぎの状態となった)

ダ～ヤは咥えていた尻尾を外して・・・『くちゅん』？・・・と。

王政「情報では楼蘭国の王族の娘が逃げたおるとの噂だ。美しい娘なら我が物にしたいものだ」

「見回したところ、高貴な娘は見当たらないようだ。よし、行け！」と。

カヤ姫たちはダーヤの機転によって無事に関所を通過できたのでした。

乳母はそっと、そして優しくダ～ヤの眼を見つめ「そなたの機転で姫は救われた」と。

ダ～ヤは「グルグル」と喉を鳴らし、目を細めて返事をし・・・乳母はほほ笑んで「ありがとう」と。

カヤ姫たちは安全に周の都(西安)を通過して、韓の洛陽へ辿り着くことが出来たのでした。

韓の国は隣国魯の孔子・孟子(儒教)の影響と、シルクロードを通じて仏教の教えも広まり、  
周王朝末期の戦国時代においても平和的な国でありました。

乳母はその地でカヤ姫に持っている全ての知識を伝えるのでした。

ダ～ヤもカヤ姫の傍らで言葉や知識を吸収し、テレパシーによる会話を修得するようになった。

カヤ姫とダ～ヤたちは一時的な平和の時を得ますが、やがて、秦によって戦に巻き込まれます。

匈奴の侵入を食い止めた勢いで、次々に周辺の国々を侵略し、秦の国力を増強して行きます。  
ついには、韓の国は亡ぼされることになります。

カヤ姫たちは、安住の地を求めて、更に、東の斉の国へと逃れますが・・・

やがて、その斉の国も秦始皇帝(王政)によって城は炎上し、亡ぼされてしまいます。

乳母「ダ～ヤよ、姫のことを託します。私はもうこの老体・・・、姫の足手纏いとなるので・・・

姫の身代わりとなって、私は城に立て籠もります」

ダ～ヤとカヤ姫たちは、城から落ち延びましたが、行き先も知れず、どうしようと迷います。



## 1-5: 若きジョセフ(徐福)の旅

カヤ姫たちの運命から10年ばかり、時間を戻すことにします。

徐福(ジョセフ)は年老いたヨセフとミヤの両親を安全な洛陽に残し、見聞を広める旅に出ます。

父ヨセフから祖父の遺品(指輪と日記)を託されて、洛陽→楼蘭→カブールへ・・・

祖父の友人を頼ってカブールから更に南はタミルの地へ、北はカスピ海へ、西のエジプトへと・・・

徐福は、西はエジプトのアレキサンドリアの地に辿り着き、そこで、修行と勉学に励みます。

それから、各地の情勢を見聞し、あわせて、その地に伝わる言葉や技術を習得し、天文学・航海学・医学薬学・物理学・数学・科学の学問や技術などを修めます。

(近年 2006 年のギリシャ・アンティキテラ島の沖合で「2000 年以前の天文コンピュータが発見」とのニュースがありました)

この天文コンピュータとは・・・複雑な歯車を組み合わせて月の満ち欠けと日食・月食を予測するものであったことが判明しました。

つまり、徐福が学んだ時代には既に、数学的な天文計算と精密な歯車の組合せ技術によって、機械式のアナログコンピュータが作られ、日食・月食 etc の動きを正確に予測されていたのです。

図4: 天球箱(「ギリシャ・アンティキテラの機械」を現代の科学者が復元したものです)



数学者ピタゴラスや天文学者アリストテレスの「天球仮説」学説を具体的に表すのもであった。

※徐福は、あのアレキサンダー大王の先生:アリストテレスの教材からも原理を学んだのです。

徐福はギリシャ・エジプト・ペルシャの高度文明に、深い感動を受け、更に勉学に励みました。

そして、旅立ちから8年の月日が流れ、方士(妖術師・占星術師・薬剤師・科学者)の称号を持つ賢者へと成長します。

エジプトの地から洛陽に戻る途中で秦の国を訪れると、秦の国では王政が権力を掌握していた。徐福は旅の途中の報告と通過の許可を求めて、王政に謁見に向かったのです。

王政「徐福よ、そちの父ヨセフのことを憶えておるぞ、ヨセフはどうしておるのじゃ？」

徐福「父ヨセフはもう50歳を過ぎ、今は洛陽の地で暮らしております」

王政「そうであったか、やがて、洛陽を我がものにするために兵力を増強しておく」

「徐福よ、予の助言者として、この中国の統一を手伝わぬか？どうじゃ？」

徐福「私が、見聞した国々では、富を求めた権力争いの結末は、やがては、新しい勢力に、  
取って代わって行く、の繰り返しでした。決して、恒久的な安定は得られませんでした」

王政「予は、周囲からの脅威を防ぐために、兵力を増強してきたのだ、侵略が望みではない、  
ただ、相手が挑んでくるなら圧倒的な戦力で反撃して亡ぼすまでよ」

徐福「王政様の考え方で、力に頼る平和には安定がありません、(欲望、嫉妬や裏切りなど)に  
よって、いつか、反抗する勢力に取って代わられることとなるでしょう」

王政「ならば、予にどうしろと言うのだ」

徐福「王政様ご自身が戦のない、平和な世の中を築きあげることなのです」

王政「それは、予も望むところだが、中国は広大だし、私には時間が足りない」

徐福「ならば、王政様に不老不死が備われば、望みが叶うかも知れませぬ」

王政「そのようなことが徐福なら出来ると云うのか？」

徐福「西のエジプトの地では靈魂の再来を願って、死者に術を施し、よみがえりの呪文で、  
再び、生まれかわって、遺志を継ぐ者が現れることができるとか・・・

或いは、東の海の彼方に浮かぶ蓬萊の島に不老不死の秘薬があるとの説が有ります」

王政「予は、生まれかわっても、同じ遺志を継ぐ者と成るのか？否か？は保証がないな。

それよりは、不老不死の秘薬があれば、予が続けて世の中を平和にすることが出来る。

徐福よ、その不老不死の秘薬を求めて、探しに行ってくれないか？

必要な物資については、予が何でも用意をしようじゃないか？どうじゃ？」

徐福は戦の虚しさを説こうとしたが、王政には聞く耳も無く、丁重に断ることとしたのでした。

徐福は父ヨセフが暮らす洛陽に戻ったが、既に父ヨセフと母ミヤは他界しておりました。

秦の侵攻の危険が迫って来ており、身の危険を感じ、隣国の斉へ移住をして、

そして、斉の国の地方役人の職に就いたのでした。

斉の国では、主に、兵士への医術と戦への祈禱・占いの仕事を請け負っておりました。

やがて、王政は諸国に従え、秦の始皇帝の称号を得るまでになります。

韓に続いて、斉の国をも亡ぼし、王政は徐福を呼び出します。

秦始皇帝「徐福よ、久しぶりだな。予は中国の全土をほぼ手中に入れたぞ。

予のために、不老不死の秘薬を手に入れることを命令する。

必要な船や兵士を付けようじゃないか、きっと探してまいれ」と。

仕方なく、徐福は東の海の彼方にあると伝えられる蓬萊の島を目指して旅立ちます。

黄河の河口を出て、東の朝鮮半島へ、そこから南下し、朝鮮半島沿いに東へ・・・

対馬暖流に乗って、大海原を南東に進みます・・・

季節的に中国大陸から南東へ季節風が吹くのは例年秋になりますが、この頃は、台風の手頃でもあるのです。徐福たちの一行もやはり、台風に遭遇し、難破してしまいます。

「嵐が来るぞ～！」

徐福たちを乗せた船は木の葉のように海を漂い、ついには、岩礁に衝突し、大破してしまつた。

徐福たちは海へ投げ出され、浮遊物に捕まつたものの、大波に翻弄されて、漂流したのでした。

投げ出されて、2日目の朝に、どこか知らない砂浜に打ち上げられた。

それから3日ほどは、意識も無く眠り続けたであろうか・・・

気がつくと、砂丘に囲まれたどこかの一軒家の床に横たわっている自分に驚いた。

ここの主人と妻であろうか？「何やら、訳のわからないことをしゃべっている」

徐福はタミル語、楼蘭語、匈奴語、秦の言葉・・・いろいろと試してはみたが、いっこうに通じない。

ただ、両手で水をすくう格好をすると、妻らしき人は水を持ってきてくれた。

ここは絶海の孤島なのか？シルクロードの文化は未だ及んでいない地なのだろうか？

それから、冬の3ヶ月ほどの間は、指さしをしながら、この地の言葉を覚えることとなった。

やがて主人に連れられて、ここの村の領主に会うことが出来たのでした。

徐福は片言ながら、領主と会話をし、海を隔てた遥か西の地より来たことを理解してもらった。

領主に案内され、この地がきれいな山林と清らかな川が流れる素晴らしい地であることを知り、

徐福の育った地とは異なり海の背後には山々が迫り、緑に覆われた実に美しい光景でした。

民の生活を見聞し、素焼の縄文式土器をより高温で作る新しい土器の作り方について伝えた。

領主は感動し、徐福は先進技術を持った文化人として歓迎したのでありました。

徐福は「不老不死の妙薬」は手に入らなくても、平和を望む民をこの地に連れてくれば「理想郷」と成るのではと・・・考えました。

春が来て、南からの風が吹いて、帰郷することを決心します。

徐福の部下数名には必ず戻ることを約束し、移住先の調査を指示し、領主には民の移住を受け

入れていただく約束をし、漁船を貰い受けて、秦へ向けて旅立ちます。

朝鮮半島沿いに、なんとか黄河の河口近くには辿り着いたものの、どう言い訳をして、再度の旅立ちを許されるには・・・？・・・と始皇帝への謁見をためらう日々が続きます。

## (Episode II):「ダ～ヤ」と「もうひとつの徐福(ジョセフ)伝説」

### 2-1:ダ～ヤと鍛冶職人の弟子:チコ

ここは秦に敗れた齊の片田舎、村外れに一軒の鍛冶屋があり、作業場で働く、老人の親方と見習いの若者(チコ)がいました。

(ガラガラ・ガッチャーン)

チコ「親方～、戦場から鉄くずを集めてきやしたぜ。」

親方「おう、鍬や鋤、頼まれている釘の材料にするんで、作業場の隅に隠しておけ。」

「近頃は戦のために農民は土地や馬や農機具を全部取り上げられるので、大変じゃ。」

「隣の村では戦に巻き込まれてしまって、村は焼き払われ、村人の半分は殺され、残りの大半の人達は奴隷として捕らえられてしまったとか・・・、

逃げ延びた連中は船に乗って対岸の朝鮮半島に向けて旅立って行ったようだ。」

チコ「かわいそうだねえ・・・なんとかしてあげてあが・・・俺にはどうしようもねえ・・・ところで、

最近の鉄器は質が悪く、錆付いたり、モロかったり、曲がったり、まったくナマクラだ～」

親方「鉄は鍛錬が足りねえと、こうなるんだ、田起こしに使う鋤や鍬も同じことだ、

人の気質(こころ・がまえ)もまた、いっしょだ～ね、さあ～、仕事だ・仕事だ。」

チコ「へ～い！おいらはいつか国中から買い求めに来るほどの腕の良い鍛冶職人になる。」

親方「そのためには国中が平和にならないとな、このご時勢じゃ～、ここいらも危ね～しな」

親方「チコ、わしゃ～、若い頃に孟子先生から教わったんだ、孔子先生の教えだとかで・・・

- ① 玉不琢、不成器矣
  - ② 人不学、不知道矣
  - ③ 学而不思、則罔也
  - ④ 思而不学、則殆也
  - ⑤ 知而不律、征利己
  - ⑥ 交征利己、而国危
- わかるかのお？」

チコ「ええ～と・・・

- ① 玉(原石)は琢かなければ、器(宝石)とは成らないもの。ってことかなあ？
- ② 人は学ばなければ、道理を知らない。道理を学ばずに何をやっても失敗するってこと？
- ③ 学んだところで思慮深く考えなければ、即ち知識を「ざる」で受けるように智慧がぬける。
- ④ 思いだけで知識を学ばなければ、即ち殆どまぐれで智慧の無い行動は失敗する。
- ⑤ 道理を知ったところで自らを律しなければ、己の利益のみにとらわれてしまうものだ。
- ⑥ それぞれが勝手に、己の利益を取るならば、国全体は危うくなる。ってことかなあ？」

親方「その通りだ、理解出来ているじゃないか」

親方「しかし、チコ、この教えには、まだ続きがあるのじゃ、

- ⑦ 思・学・律、智慶太志
- ⑧ 慧聡真摯、以為惠
- ⑨ 惠不孤、必有隣矣
- ⑩ 一期一会、以為恩
- ⑪ 日々好日、以為悟
- ⑫ 惠・恩・悟、和而不同

- ⑬ 栄枯盛衰、倣世也
- ⑭ 諸行無常、世虚仮
- ⑮ 知恩知足、不飾虚
- ⑯ 七敵八苦、八正道
- ⑰ 交惠・恩・悟、而国和
- ⑱ 以和為貴、宗無忤

わかるかのお？」

チコ「よく解んねえや、親方！」

親方「いいか、チコ。続きはこう云うことなんだ、よ〜く、頭に叩き込んでおくんだぞ・・・

- ⑦ 思慮と、学習と、自己を律することは、智の慶びと太志(大きな志)をもって行うんだ。
- ⑧ 智慧を整え、聡(さと)く真摯に自己を見つめて、(七つの)徳を積むことが大事なんだ。  
(七徳＝仁愛の徳・正義の徳・誠信の徳・節制の徳・清浄の徳・勇気の徳・智慮の徳)
- ⑨ (七)徳を持っていれば、決して孤立することは無い、必ずや賛同する者が傍にいる。
- ⑩ 出会いとは一生に一度と心得て、周りの人の恩恵に感謝「オッ・ッ・モッテ・ナセ」
- ⑪ 今日一日が好い日であった。と云えるように覚悟して過ごす努力が大切なんだ。
- ⑫ 徳を持つこと・恩恵を得ること・覚悟して過ごすことは、調和することが大事で、意味もなく他人に同調するのは愚かな事なんだ。

- ⑬ それでも、繁栄や衰退はいつの時代も世の中の倣いなんだ。
- ⑭ 世の中のどんなものでも、常に永久は有り得ないんだ。(不老不死なんてえのも同じだ)
- ⑮ 恩恵を知り、人生の足るを知っていれば、欲望や煩惱に惑わされ、我を飾ることもない。  
ブッダの教えなんだよ。

- ⑯ 人生における七敵(避けられない禍)＝病氣・飢え・裏切り・嫉妬・欲・老衰・死。  
八苦(避けられない苦しみ)＝生・老・病・死の苦しみ・愛するものと別離する苦、  
・怨み憎い相手と会う苦・求めるものが得られない苦・五蘊の感情を抑えられない苦。  
に対処するには・・・

八正道(対応策)＝正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定の心構えが大事。

【五蘊＝形ある物(肉体)・感じる物(感覚)・妄想(概念)・行動(衝動)・意識(心)】

- ⑰ それぞれが徳を持って、相手を慈しみ・相互の恩恵を悟れば、国全体は平和となる。
- ⑱ 皆がお互いに和を貴く大切にして、さからい事を無くすべきだと云われているんだ。」

親方「この教えを肝に銘じて守ってりゃー、ばかばかしい戦い事は無くなるんだよ。」

チコ「要するに、異国のブッダ様がおっしゃってることや孔子様の論語は、  
全ての行為や全ての物は時の流れに逆らって、留まる事は不可能なんだあね。  
丈夫な剣も甲冑も、時間が経てば、錆びてボロボロと碎けてしまう。  
不老不死のような願望も一時的な幻(虚)のようなものってことなんだあね。  
世の中の因縁と恩恵を知って、自身の人生に足りていることを悟り、  
一時的な欲望(虚)に惑わされちゃあいけねえってことだあね。  
皆んなが一時的な(虚)への欲望を捨てれば、きっと国は平和になるってことなんだあね。」  
親方「そう云うことだ。チコ、理解できるようになったじゃないか、ずいぶん成長したなあ。」

チコ「あれ！ 親方～、向こうから騎馬が駆けつけて来ますぜ」  
親方「あれは～、秦の騎兵だなあ～。何か搜索をしておるようじゃの～」

(蒙恬が小屋の扉を蹴破って、兵士と共に、入り込んできた)

蒙恬「おい！ おまえら、この辺りに見知らぬ娘を見かけねえか？ 探しておる、見かけたら  
必ず、知らせろよ！」  
(作業場の片隅、薄暗い馬の傍らに猫が一匹、座っている、身動きもしない)

蒙恬(作業場を見渡して)「その隠しているものは何だ？」  
チコ「村より修理の依頼を受けました、釘や鉄くずでござ～ます」  
親方「ここは一軒屋、逃げ隠れする場所なんか、ございませぬやね」  
蒙恬「鉄か、お国の為だ、徴収して行くぞ、それから馬は居らぬか？」  
親方「15歳を超えた貧相な老馬なら居りますが・・・」  
蒙恬は馬を覗きこみ、口を開けさせて、馬の年齢と健康状態を診ようとするが・・・

(馬は貧相な格好で、必死に抵抗して口を開けようとしない) 蒙恬はあきらめて

蒙恬「こんな駄馬は要らぬわ、それ行くぞ」(兵士は鉄くずの袋を抱えて行ってしまった)  
(猫はいつの間にか姿を消して居なくなった)

チコ「親方あ～、せっかく作った釘と、集めてきた鉄くずを奴らは取って行きやがったよ。」  
親方「仕方がねえ～な、船大工から注文の釘作りは、また、はじめからやり直しだあ～な。」  
親方「チコ、隣村で戦があったようで、わしゃー、明朝から一週間ほど隣村を巡って、  
民の葬儀の手伝いと、孟子先生のお弟子さんのお話を聞いてくるよ、  
なんでも、異国のブッダ様の教えも聞けるようなので、どうしても行ってくるよ、  
すまねえが、留守番を頼むよ。」

チコ「任しときな一、注文分の釘作りならお手のもんだ一、留守中に友達を呼んでもいい？」

親方「世の中は物騒だからな、呼んでも良いが、作業場は危ねえから散らかすなよ」

チコ「親方～！ガッテンでえ～！」

親方は隣村へ葬儀で行って1週間程は戻ってこないで、三人は留守番で集まっている  
(その夜のこと、チコは友達のクッチとブッキ、夜食をしながら、鍛冶職の談義をしている)

ブッキ「鉄は元来、柔らかな金属だけど、熱して鍛錬をして鉄に炭素成分を増やして行く

さらに熱して行くと温度によって発光する色が変わるんだ、更にこれぐらいの色の時に、  
水に入れ急速に温度を下げると強靱な鋼となるんだ。」

「難しいのは、硬い鋼ほど脆(モロ)くなり、叩けば欠けてしまう、表面が固く、内側が柔らかな方が強靱なんだ」

チコ「あんたは理論家だねえー、でも実際に作るのは俺なんだから・・・」

クッチ「聞いた話じゃあ、鉄に不思議の粉を少しまぜると、錆びない鋼や超硬い鋼になったり、  
鉄と鉄をくっつけたり、反対にはね返したりすることが出来るんだって」

チコ「不思議の粉って、そんなの有り得ねえよ、もしも有るんだったら見てみてえ・・・」

「あっそうだ、明日の朝、フックが船に使う釘を取りに来るって云ってたっけ。

昼間、兵隊が釘を持って行ってしまったから、夜なべして作っておかないと。」

クッチとブッキ「私たちにも見せてよ、いっしょに手伝うからさ」

チコ「じゃあー、いっしょにやろう」

クッチ「あれ、猫ちゃんがいるじゃん、どこから来たんだろう」

チコ「そう言えば、昼間に馬の傍らに居のを見かけたね、きっと戦さで孤児になったんだねえ」

(チコは夜食の煮干をちぎって差し出したら、猫はしばらく考え・・・そっと啜え暗闇に姿を消した)

(その夜、3人は徹夜で釘作りに取り組んだ)

(明るる朝、クッチとブッキは其々の家に戻り、フックが釘を受け取りにやってきた)

フック「よう、釘は出来ているかい、早くしねえと、お客が待っているんだ。」

「なんでも、山東半島から渡って朝鮮半島まで行ける船が欲しいとのことで急いでるんだ」

チコ「実は昨日、秦の兵隊が来てさあ、作った釘を持って行きやがった。

昨晩から残っていた材料で作ったんだけど、こんなもんで、どうだい？」

フック「ありがてえー、が、もっと要るんだ、なんでも、国を追われた民の人たちなんだろう、

捕まったら最後、一隻でも多く欲しいって云うんだ、親方も頼まれれば断れねえんだ」

チコ「しばらくはうちの親方も帰ってこないで、内緒でこしらえておくよ。四日ほどで作るよ」

フック「四日かあ・・・すまねえーなあ、じゃあ四日目の晩に、また受け取りに来るよ」

(その日から三日三晩を徹夜で釘作りに取り組んだ)

三日目の深夜、やっと一段落してチコは夜食をしていると・・・

「わたしはダ～ヤと申します、その釘を少し分けてくださいな」(小さな、か細い声で・・・)

チコ「誰だい、そこに誰がいるのか？」(周りを見わたすが人影はないが、声は確かに聞こえる)

チコ「釘を何に使うんだい？」(天井に向かって問いかけた)

ダ～ヤ「それがあれば、船を作って、海を渡れるのですね」

チコ「船を作るのには釘だけではダメなんだ、大量の板やロープが要るし、舵も帆も要るんだよ、航海をするには船大工に頼んで作ってもらわないと・・・」

ダ～ヤ「それじゃ、船大工にどうすれば、作ってもらえるの？」

チコ「そりゃ、お金が要るし、第一何を運ぶんだい？姿を見せないのでは話にならないよ」

ダ～ヤ「あなた様の足元にいるニャ～」(チコはびっくりして飛び退けた、啞然としている)

ダ～ヤ「えへん、私はあるご主人様にお使いをしておる、猫のダ～ヤと申します」

「私の言葉はテレパシーを使ってあなた様と会話をしているので、他人には聞こえません」

「私はあなた様の心とおしゃべりをしております、あなた様に裏心が無いのは分かります」

「明日の夜にご主人様をお連れしますので、船を作って欲しいのです、お願いします」

チコ「そう云われてもさあ、おいらは単なる鍛冶職人の弟子だしさあ・・・おい、ちょっと・ちょっと」

(ダ～ヤはチコの返事を、最後まで聞かぬ間に暗闇へ消えて行ってしまった・・・)

#### 四日目の夜

チコの作業場にクッチとブッキが集まっている、そこにフックが釘を受け取りにやってきた。

チコ「昨日の夜に不思議なことがあったんだ、猫ちゃんと会話をしたんだよ」

チコはことの成り行きをクッチとブッキとフックに話して聞かせた。

チコ「もうちょっと待っててね、今夜、猫ちゃんのご主人を連れてやって来るって云うんだから！」

三人は「まさかあ～」と、信じ難い表情で聞き入っていた。

ダ～ヤ「皆さん、こんばんは、今はお集まりの皆さんにテレパシーで会話しています」

クッチ、ブッキ、フックはそれぞれ違った方向を向いて返答をしている。

「どこどこ、どこから聞こえてくるの！」

暗闇からダ～ヤが現れた。(猫の後ろに黒いベールに包まれた小柄な影が浮かび上がる)

ダ～ヤ「ご主人様をお連れしました、皆様のお助けが必要なのです、是非お願いします」

「こちらのお方は、楼蘭国のプリンセス:カヤ姫様です。国は亡び、民はバラバラになり、頼る当ても無く、今は船に乗ってこの地を逃れるのみです。捕まれば殺されます」



明かりの中に少女は現れ、ベールを取って、皆んな茫然となって驚いている。  
少女の肌は透き通ったように白く、黒い瞳、黒い髪・・・美しい・・・部屋の中が光に満ちて  
・・・少女は輝いているようだ・・・驚きと溜め息に満ちた。

図5：（楼蘭と大月氏国・・・主人公であるカヤ姫のイメージです。）



ダ～ヤ「お付きの者はもう婦女子ばかりで戦う武器も尽きてしまいました。  
僅か10人程になってしまい、近くの森に隠れています、どうかお助けください」

チコ「何とかしてあげたいが、すぐに追手に見つかってしまいます、無茶ですよ。」  
ブッキ「何か・・・良いアイデアかぁ・・・」(思案し始めると、固まってしまう)

(遠くから騎馬の駆ける音が迫ってくる)  
ダ～ヤ「追手だ、ご主人様、速く、このソファの下へ隠れて」

チコ達はソファの上に固まったままのブッキを転がせ、3人も覗き込んだ姿のままのポーズで固まってしまった。

間髪を入れずに、蒙恬が扉を蹴破って、飛び込んできた。

蒙恬「オイ、おまえら、楼蘭国の娘を追っている、この辺りに潜んでいるとの情報を得た」  
「知っていれば差し出せ、隠していたら皆殺しだぞ」

クッチ「今、ブッキが急な病で固まっております、尋常な病ではないのかも・・・石化病とも云い、  
触れると病気がうつるかもしれません・・・」

蒙恬「なに一、あのギリシャ神話に伝わる、石のように固まり、やがてぼろぼろに砕けると云う  
恐ろしい病か、もし、楼蘭国の逃亡者が病をばら撒いている可能性もある、いったん退却だ、  
病がはっきりするまで、この村には近寄らぬように通達を出せ」

蒙恬が去って、皆は一応安堵したが、今後のことを考えると先が思いやられる。

ダ～ヤ「カヤ姫様、追手は必ず戻って来る、ここは危険です、ひと先ず、隠れ家に戻りましょう。」  
カヤ姫とダ～ヤは、暗闇へと姿を消した。

しばらくして、裏口から傷を負っているのか……ふらふらと誰かが倒れ込んできた。  
張良「助けてください」(そのまま倒れ込んで意識を失ってしまった)

チコ「この人、大変なけがをしているよ」  
クッチ「誰？？？ どうなってるの、けっこうイケ面だよねえー」

フック「とりあえず、応急手当をしておいて、医術に詳しい者を呼んでこよう、  
幸い、近くにふさわしい人が隠れ住んで居ると聞いている。」

フックは張良をベッドに運び、応急手当を済ませると、誰かを呼びに飛び出して行ってしまった。  
チコ「あのバカ、村人に知らせにいったのではないだろうね、知れたら大変なことになる。」

(一時ほどして……フックが戻ってきた)

チコの要らぬ心配であったようだ、フックは見知らぬみすぼらしい姿の大男を連れて戻った。  
フック「紹介するよ、この方は徐福様で、先年、秦の始皇帝の命を受けて渤海に浮かぶ山島を  
探索に行かれたのだが、台風に遭遇し、着の身着のままで戻ってこられたんだ、  
秦始皇帝に失敗を報告すると首をはねられるので隠れ住んでいるんだ。  
徐福様は科学にも、医学にも詳しいのでお連れした。」

※徐福は斉の国に保護されていた方士(妖術師・占星術師・天文学・薬剤師・科学者)の賢者。  
斉が秦に亡ぼされた後、秦始皇帝は徐福を呼び出し「自身の野望を叶えるには？」の問に  
徐福は「野望の無意味さ」を説いたが、結果的に秦始皇帝の命で、不老不死の薬を求め、  
仙人の住むという理想郷を探しに、調査の航海に出たが、嵐にあって遭難し、失意の中、  
戻ってきていたのだった。(Episode I で経緯を紹介しました)

クッチ「よくよく見ると、ちょっと年を行っているけど、こっちも、渋いイケ面だねえ、素敵」

張良の手当てが済んで、みんなで相談事の続きをした。

徐福「あなたのお名前は？」

張良「名乗る程の者ではありません、徐福様。私も秦始皇帝に捕まれば首を刎ねられる者です」

張良「徐福様、あなた様が秦始皇帝の命令で不老不死の妙薬を求めて旅立った話は既に広く伝わっております。あなた自らの失敗をそのままに隠れ住んだとしても、いつかは見つかり、どんな言い訳をしても、秦始皇帝にはすぐに見破られ、必ずや処刑されることになる。何か、方策を考えましょう。」

張良「徐福様、また、どんなつくり話をしても、容易には秦始皇帝は信じまい。  
ただ、秦始皇帝は不老不死の薬を手に入れる願望を持っている、そこが付け目であろう。」

ダ～ヤがどこからか、再び暗闇から現れ、張良と徐福の会話に加わった。  
ダ～ヤ「私にアイデアがあります、徐福様は堂々とした姿で秦始皇帝へ報告に行くのです」

張良と徐福はどこからか聞こえてくる(天の声)に驚き、右往左往のパニック状態になる。

チコがダ～ヤを紹介し、二人はテレパシーを扱う猫には驚くが、会話を受け入れる。

ブッキ「ちょっと聞いてくれ、徐福様もこのまま、何の成果も無く、失敗を秦始皇帝に報告すると殺される、それよりは、全員で渤海の遥か彼方に浮かぶと伝う島へ逃げたらどうか？」

チコ「航海に必要な船を造っているだけでも怪しまれ、出航する前に、きっと捕まっちゃうよ・・・」

## 2-2: 戦国武将蒙恬の野望とその息子蒙良

蒙恬(モウ・テン)は馬を疾走させる。

蒙恬は想う。我が主君の王征(ワン・セイ)様はきっと必ず世界を制する。

蒙恬「俺は王征(ワン・セイ)様の一番の家臣となって、一国一城の主と成ってみせる。

秦始皇帝である王征(ワン・セイ)様の命令のままに・・・どんな相手にも臆することは決して許されぬ。

いくつもの部落を焼き払ってきた・・・いくつもの国を亡ぼしてきた。

(何の悔いもなく・・・何の躊躇もなく・・・謀略によって、仲間の武将をも陥れてきた・・・)

幾人もの武将の首を刎ねてきた、その武功のおかげで、我が所領は増大し、

そして、今や秦始皇帝様の家臣十傑に数えられるほどになった。

これも我が一族繁栄の為なのだ」と。

蒙恬「我が弟：蒙毅（モウ・イ）は最も信頼できる。命じれば、たとえ炎の中にでも突進して行く  
実に勇ましい弟である。」

「しかし、我が息子：蒙良（モウ・リョウ）はどうだ…何を考えているのか、サッパリ判らぬ。」

「蒙良は心が軟弱なのだ、」

「相手を思い遣ることが我が身を滅ぼすことなど、ちっとも考えて居らぬ。」

「今度は息子に掃討作戦の最前戦を任せてみよう…」

「いざとなれば我が本隊が後ろを詰めておる。」

「我が息子の武功をしっかりと視てやろう…」

「それにしても、楼蘭国の逃亡者はどこに隠れているのだろうか？」

蒙恬「村中を焼き払え！ 逃亡者をいぶり出せ！ 邪魔をする者は皆殺しにせよ！」

「我が弟：蒙毅よ、俺は一先ず、始皇帝様に報告を済ませてから居城に戻る。」

蒙恬「息子の蒙良よ。お前はあの村へ、もう一度戻り、逃亡者の出入りがないか？ 今一度、  
探索をしてから戻って来い。」

蒙良「は！」（蒙良は手勢を引き連れて村へ引き返して行った）

蒙恬の居城では、秦始皇帝への報告を済ませた蒙恬が弟：蒙毅と息子：蒙良と談話をしている。

蒙恬「蒙毅よ、始皇帝様から北方匈奴からの侵入略奪が頻繁で対策を構ぜよとの命令だ」

「まったく匈奴の騎馬軍には手を焼く。何か、良い方策は有るか？」

蒙毅「兄じゃよ、我が隊が斉に攻め入る時に、斉を囲む長い城壁の攻略に手こずった」

「韓・斉の城壁を運び、北方匈奴への守りに使ったらどうか」

「亡んだ韓・斉には、高い城壁は不要だから、その国の民を使って壁を移動させよう。」

蒙恬「なるほど、それは名案じゃ。さっそく使者を送って始皇帝様に書を送り、提案しよう。」

（蒙恬は書をしたため、使者を走らせた…）

※筆のことを毛筆と言いますね、実はこの語源は蒙筆から来ているとのことですよ。

この蒙恬が筆を改良して、毛筆の原形を作ったというお話があるそうですよ。

（翌日、伝令の使者が馬を走らせて戻ってきた）

蒙恬「始皇帝様の許可が下りたぞ。我が手勢を匈奴の国境に配備し、防衛に当たらせるから、

蒙毅の手勢で、亡ぼした民を使って、城壁の構築を進めよ。急げ！」

「蒙毅よ、お前が構築の指揮を取れ。」

蒙毅「は！」（蒙毅は勢い良く、飛び出して行った。）

蒙恬「ところで、息子の蒙良ときたら・・・、掃討作戦で、村を焼き払うことを躊躇しおって・・・  
、何んと役に立たない奴だ。」

蒙良「・・・」

蒙恬「蒙良、お前は、城壁構築に必要な民をかき集めるのだ、それを蒙毅の陣営へ届けよ。」  
「それと、徐福が戻ってきておるとの情報が入っている。搜索して捕らえて来い。」

蒙良「は！・・・」

蒙恬「行け！」

（蒙良の手勢が労役の民を集める為に黄河河口近くに陣営を構えている。）

蒙良は深夜の満月に誘われて、土手を散歩していると、河原に誰やらうごめく影を見つける。

蒙良「誰だ！何をしておる、怪しい奴、出て来い！逃げると切り殺すぞ！」  
太刀に手を掛け、走り寄る・・・近寄ると、長い黒髪の小柄な娘のようだ。

小娘は草むらの中を駆けだした・・・蒙良は追い、走り寄り、小娘に覆いかぶさって捕らえる。  
蒙良は被っている小娘の衣を視て驚いた。黒い瞳・・・何んと美しい・・・「農民ではないな。」

蒙良「お前は、この当たりの民ではないな、どこの者だ！怪しいぞ！逃亡者だな！」  
（蒙良は一目でこの娘に心を奪われてしまった。さりとして、逃亡者を逃がすわけにも行かぬ。）

娘(ミュ)を立ち上がらせようとした時、蒙良は口を塞がれ、背後に刃が突き立てられた・・・  
（娘は摘み取った野草を捨てて、暗闇の中をどこかへ走り去って行った）

「待たれよ・・・張良殿、その者を殺しても、得には成らぬ、その者を役に立たせるのです」  
（どこからか、小さな声で・・・しかし、しっかりと聞こえる・・・）

張良「ならば、こやつをどうするダ～ヤ殿」

ダ～ヤ「この方は、秦の武将だが、戦を嫌い、平和を望んでおられる。私には判るのです」

張良「しかし、知らされたら、全員が危険だ、始末するしかない。」

ダ～ヤ「張良殿、この方は、蒙恬の息子：蒙良」

張良「何！両親と妹の仇！」・・・突き立てた刃に力が入る。

ダ～ヤ「あなた様の心は憎しみで満たされておる。待たれよ！」

張良「此奴の親に、私の愛する者を奪われたのだぞ…」

ダ～ヤ「愛する者を奪われた苦しみは、相手の愛する者を奪うことでは、解決できぬ。」

張良「…」

ダ～ヤ「戦での仇は世の倣い、憎しみ合えば、憎しみ合うほど、あなた様の破滅を迎える。」

張良「ならば…此奴をどうしろと？」

ダ～ヤ「憎しみを捨て、心を割って話し合うのです。 きっと二人は理解しあえるはずじゃ」

張良と蒙良はお互いの刃を置き、生い立ちから…心の想いを夜が明けるまで語り合った。

ダ～ヤは傍らで、じっと聞き耳を立てていた。

蒙良「殺し合いはもう嫌だ！ さりとて、親に刃を向ける事も出来ぬ…」

張良「お前の親は、私の親・妹を殺し、我が国を亡ぼした…私が秦を亡ぼしても、殺戮は続く。」

「権力の欲に縁の無い、平和を願う若者をも、戦さの犠牲となっていく…」

「今、私の出来ることは…そんな若い人々を救い、戦さの無い国へ送り出すことなのだ。」

蒙良「私も戦さの無い国へ連れて行って下さい。お願いします。」

張良「蒙良よ、そなたの立場では刃を抜かずとも、親を裏切れば、親はそなたに刃を向ける。」

蒙良「ならば、手の届かぬところまで、逃げ延びるのみ…」

張良「そなたの手勢は如何に…」

蒙良「我が手勢は、気持の通う者ばかり…中には裏切る者も現れるかとは思いますが…」

「選りすぐりの者のみを連れて参ります。」

張良「そこまで…云うのなら…」

ダ～ヤ「蒙良殿の心に偽りは無い。信じよ、張良殿」

蒙良「張良様、私は皆さんのためにどんなお役に立つ事が出来るのでしょうか？」

ダ～ヤ「いつか必ず、その時が来ます、その時まで、気取られぬように、親との対立を避け、

あなた自身の役目を続けてくださいな」

二人と一匹は薄明るい早朝の土手をバラバラの方向へと分かれて行った。

蒙良は自分の生き方が見出せたのだろうか…清々しい気持ちが、心の暗闇が明るくなって行くのを感じながら、陣営へと戻って行った。

その日の夜、鍛冶職人の作業場で相談の為に主だった者が集まっている。

(ダ～ヤ、徐福、張良、チコ、ブッキ、クッチ、フック、カヤ姫と姫にお付きの娘ミュ達)

親方が戻ってきた、「おや、見知らぬ方々だねえー、チコ、どなたかの？」と、見回して驚いた。

親方「をつ～、そなたは楼蘭国の皇女：ラン妃ではないのか？いや、それにしても若すぎる」

ダ～ヤ「あなた様は、青年の頃に楼蘭の砂漠でラン妃様にお命を救われた方ですね…」

親方「誰が話しているのか？分からないが、何故、わしの若い頃を知っているのですか？」

ダ～ヤ「親方様、話せば長くなります…」

ダ～ヤ「カヤ姫はラン妃のお孫様です、幼い頃に匈奴に襲われ、戦火を逃れて韓の国にて保護されておりましたが、秦に亡ぼされ、隣国の齊へ逃れたのですが、その齊の国も秦に亡ぼされてしまい、楼蘭国に戻ることも、今では不可能となり、路頭に迷っております。

捕まれば殺されます、どうか、お助けください」

親方「そうであったか、わしゃー若い頃、敦煌から西へ旅したことがある、そこで砂漠に迷い込み楼蘭国のラン妃に命を助けていただいた。ラン妃の再来かと思間違えるほどそっくりじゃー。

そう、60年以上も以前のことじゃったなあ…今度はこの老人が恩をお返しする番じゃあ」

親方「噂では、追手は逃亡者が武器の鉄を強靱にする不思議の粉と禁制の蚕を持って逃げっており、物資の回収と逃亡者を皆殺しにせよ、との命令が出ておるようじゃ」

チコ「何とかしてあげないと…」

徐福はブッキとダ～ヤと少し離れたところで顔を突き合わせて何やら話をしている

親方「そなたは張良だな。おまえも追手が探しておるぞ。」

「チコ、どうするんだ、捕まったら全員殺されるぞ。」

(チコ達は頭を抱え込んで思案に暮れている)

親方「実は、隣村を巡って、いろんな惨状を見聞きしてきた、また、異国のブッダの教えも聞き、この国が、平和な国へ変わるには、ず～と先の時代を待たなくちゃならねえ、秦の兵士が城壁を移動させるのに、民衆を強制労働させるために村々を焼き払っている。チコ達が平和な新天地を求めて逃れるのなら、わしも手伝おうじゃないか。」

徐福「皆さん、私にひとつのアイデアがある、どなたか立派な衣装を貸してはくれないか？」

ミュ(カヤ姫にお付きの娘)「これは亡き父の形見。どうぞ、これをお使いください」

と徐福に衣装を手渡す。(衣装は高貴な淡い紫紺に輝く絹の美しい織物であった)

ダ～ヤはそれから馬の傍に行って何やら話しをしている。

(姫にお付の娘たちが飾り金具や鞍などの馬具を運んできた)

馬は背筋をシャンと伸ばし、見た目にも若返ったように見え、実に凛々しい姿に変わった

徐福は颯爽と馬に乗り、秦始皇帝の居城へと向かった。

張良もまた、いつの間にか姿が見えなくなってしまった。

親方「チコよ、わしゃ一年老いて長い航海などは無理じゃー、ここに留まって君らを支援するよ。」

「用意する期間をわしの信頼できる友人の秘密の場所に隠れ住ませようじゃないか。」

「それに、チコには…わしの知識は伝えた、後は自分の力で運命を切り開くのじゃよ。」

チコ「親方…おいらは、親方の教えをまだまだ沢山聞かせて欲しいよお…」

親方「若いチコとその友たちよ、お前たちはもう立派に成長した。」

「この戦の地から逃れ、これから自らの足で新たな人生を歩むのじゃ。」

親方「友達の親方たちには、わしから、説得をしておくから、もう戻らずに秘密の場所でチコも、

みんなと一緒に隠れ住むのじゃ。」

## 2-3:ダ～ヤと徐福

明くる朝、徐福が秦始皇帝の居城に向かう途中、蒙良とダ～ヤが加わり、蒙良の手勢を従えて整然とした隊列の姿で向かうこととなった。

(秦始皇帝の居城にて)

秦始皇帝「徐福よ、ずいぶん待っていたぞ、で、首尾はどうであった、持ち帰ったのか？」

徐福「確かに蓬萊の地に辿り着き、仙人の信頼を得て、不老不死の元となる実を入手しました。

そして、仙人より妙薬の作り方を学び、一口試しに食すと、透視が叶うようになりました。

今もその効力は残っております。ただ、妙薬は保存が効かず、その実を持ち帰る途中で、大嵐に遭遇し、残念ながらその実を海中に沈めてしまいました。

ただ、どこに行けば良いか、どのように妙薬を作るのかを会得しましたので、もう一度、向わせてください。そうすれば必ずや、材料を手に入れ、皇帝様に不老不死の妙薬を献上いたします。」

始皇帝は徐福の言葉を疑っている。

始皇帝「徐福よ、今『透視が叶う』と申したな…予はここに手に持っておる書を読んでおる、

そちからはこの書は見えない、もし透視が出来るのなら、この書を読んで見せよ」

徐福は目を閉じ、じっと、その場に立ち尽くしている。



徐福「その書は白紙でございます、陛下」

始皇帝「驚いた、不思議じゃ、真じゃ。」そのあと、何やら独り言をもごもご呟いている。

始皇帝は素早く後ろを振り返り、背後にあやしいものがないか？を確かめる。

始皇帝「では、予は今ここに書をしたためるので、何を書いたか、読んで見せよ。」

徐福は目を閉じ、じっと、その場に立ち尽くしている。

徐福「その文字は意味の無い『へのへのもへ字』でございます、陛下。」

(始皇帝は思わず大笑いをした)

始皇帝「(まだ、いぶかしげに)わかった。今度は三千人規模として、忠実な直々の兵を付けよう。

不老不死の材料を根こそぎ取って来い、妙薬を手にする者は予一人のみで充分じゃ。

刃向かう者は皆殺しにせよ。徐福よ、次の失敗は許さぬぞ、監視の者を付けるぞ」と。

(始皇帝謁見の部屋の天井の梁の上に身動きせずに座るダ～ヤの姿があった)

徐福は始皇帝の命令を利用して、船大工の組織をくみ、数十隻の船の建造に取り掛かります。

また、不老不死の材料を採取する目的で、さまざまな職の平和を愛する若者の男女を集めます。

やがて、数十隻に及ぶ船団が用意され、食糧・飲料水・武器がそれぞれに積み込まれた。

徐福は、それとは別にフックにもう一隻の船を内緒で用意をさせた。

隠れ家と作業場との連絡役はダ～ヤが担った。

ある晩のこと、作業場でチコは船に必要な釘を作っていた、傍らにダ～ヤの箱座り姿。

ダ～ヤ「それが釘って云うものですかね？」

チコ「そうだよ・・・これで板と板とを繋ぐんだ。」

ダ～ヤ「・・・板と板とをくっ付けて行って・・・大きな箱を作る・・・海の上に浮かぶのですか」

チコ「でも、それだけではダメなんだ・・・海に浮かべる為には・・・さらに、必要な事が有るんだ」

「船を安定させるのには、重心を低くしなければならないが、低くすると海水が入り易くなる。

海水が入らないためには板や釘に万全な防水処理が必要となる」

チコ「鉄は海水には弱いんだ、錆付いたり、痩せたりするんだ・・・そうすると、バラバラになる」

ダ～ヤ「鉄を水から錆び難くする粉を知ってるよ」

ダ～ヤ「ご主人様から、少し分けてもらってくる」、そう云うと、暗闇に消えて行った。

ダ～ヤはしばらくして・・・小さな袋をくわえて戻ってきた。

ダ～ヤ「どうぞ・・・この粉を微量粘土に混ぜ、仕上げの前に塗してから、熱して、焼入れる」

チコはダ～ヤの言う通りに、粉を、仕上げの前に塗して、焼入れると、鉄の表面に変化を感じた・・・確かに違う・・・鋼の性質に変化が出ているようだ・・・とチコは思った。

チコ「益々しなやかで、強靱な釘になったねえ・・・」

チコ「これを使って、刃を作ったら・・・どんなに強力な武器となるのだろうか・・・」

チコは鉄を強靱にする不思議の金属粉のことを思い浮かべながら、作業を続けた……

チコ「ダ～ヤ様はどうして、テレパシーが使えるの？ 全ての猫は、皆んなテレパシーを使うの？」  
ダ～ヤ「そんな訳ではない、ごく限られた者だけじゃよ。」

我が霊は普賢菩薩様の下で、阿弥陀如来様にお仕えしておるのじゃ。

我が霊は阿弥陀様から直々に、いただいた戒名『賢苗院陀弥安仔』を持っておるのじゃ。

この戒名によって、肉体は死んでも霊はまた甦るのじゃよ」

チコ「じゃ～あ……ダ～ヤ様は何度も生き返えられるの？」(……この時代にそんな話はない)

ダ～ヤ「それは全くのつくり話なのじゃよ」

チコ「ダ～ヤ様は今、何歳になられるのですか？」

ダ～ヤ「人から見える姿では、肉体は4歳というところです。 霊の歳は自分でも分からない。」

「私の霊は、どなたかにお仕えし、人から愛されることで阿弥陀様に許され、霊を甦らせてもらっておりますのじゃ。 阿弥陀様のもとへ、霊が戻るたびに、修行が足りぬと、一言、苦言をもらっておりますのじゃ。 愛されなくなると霊の修行はそこで留まりますのじゃ」

チコ「ダ～ヤ様の霊の修行は、大変なのですねえ。 鍛冶職人の技を琢くことなど、俺自身のみの問題であり、小さいことのように思えますよ」

ダ～ヤ「いやいや、そうではないのじゃ、そなたの霊も同様に修行の道があるのですよ。

そなたの日々の生活において、技を次の世代につなぐ努力こそが大切なのじゃ。

そして平和を愛し、人と人とのつながりを大事にし、広げて行くことですよ」

チコ「……」

ダ～ヤ「それから、どんな物であっても、チコが作られた目印を入れておかれることじゃ、

そうすれば、チコ殿が作った物ならば、安心できる……と評判になり、目印を目当てにまた多くの客が買い求めに来て、多くの人との輪ができるじゃ」

チコ「なるほど……、おいらは国中から買い求めに来るほどの腕の良い鍛冶職人になるんだ。

そのための目印ってことだね。チコの印かぁ……」

最後の一隻が完成する前夜のこと、張良が駆け込んできた。

張良「蒙恬の追手に散歩中のカヤ姫たちが捕まった、まだ正体は知られてはいないが……

明朝、始皇帝の下へ連行される」

チコ「今夜のうちに救出しなくっちゃー」

張良「俺がなんとかする、君らは船を早急に完成させてくれ、ダ～ヤ殿を借りて行くぞ」

チコ「俺もいっしょに行くよ」

張良「俺の命に代えてでも必ず姫を救い出すから、君たちは今夜のうちに船を完成させ姫たちを船内に隠して欲しいんだ。 頼んだぞ！」

…蒙恬の陣営の牢屋の監視小屋…

闇夜の監視小屋の前、夜霧の中、武将の鎧姿(シルエット)に二人の看守は闇で良くは見えないので、いぶかしげに見ていると…

「貴様ら、何をしておる、救出の軍勢がそこまで来ておる」っと蒙恬の怒鳴り声が聞こえてきた。

看守は直立不動になり、なにがなんだか混乱をしている。

看守「先ほど、部隊長からの命令で牢屋の前を離れるな！とのご命令です」

「貴様らの責任で囚人を奪われたらどうするんだ。俺様が直々に処分する、牢の鍵をよこせ」

鋭い刃の切っ先が『キラリ』と光った…

看守は恐る恐る鍵を差し出した。

「え～い、邪魔だ、貴様らは監視小屋にさがっておれ」

看守は武将の勢いに負けて、すごすごと隣の監視小屋に入ってしまった、ダ～ヤが監視小屋の窓に飛び移って入ってしまった。

張良は監視小屋に外から鍵を掛け、続いて牢屋から姫たちを連れ出すことに成功した。

看守たちはダ～ヤの催眠術にかけられ、眠り込んでしまった、逃がしたという記憶も失って…  
(全てがダ～ヤのテレパシーを使っただけの技であったのだ)

張良は姫たちとダ～ヤをチコの待つ船へ送り届けると、また暗闇に姿を消した。

## 2-4:新天地への旅立ち

徐福は船団出発の挨拶のために始皇帝の下へと出向いた。

徐福は何食わぬ顔で蒙恬に近づき、逃亡者を取り逃がしたことを始皇帝が知ると殺されるかもしれないと暗示し、それより追跡して逃亡者を捕らえてから報告することで褒められると暗示した。蒙恬は報告をためらい、引き返して、捜索を続けることにしたのでした。

始皇帝「徐福よ、どうじゃ、準備は整ったか、予は出発には立ち合えんが信頼する軍師を付ける、必ずや不老不死の妙薬を持ち帰れ、行くのじゃ」

徐福「必ずや、ご期待に答えましょう」

始皇帝は徐福をまだ疑っていたのだ。

軍師には「材料を手に入れたら採取者は不要となるので、帰りは徐福を除いて皆殺しにせよ」と、そして、蒙恬にも伝令を送った。

「蒙恬よ、徐福の身辺を探れ、少しでも疑いがあれば捕らえよ」と。

一方、出航準備を整える船上で・・・

チコ「フック！ 注文の蝶番を作ってきたよ！」

フック「おう！ ありがとうよ！・・・この蝶番は甲板と船室の境に竹の戸板を取りつけるんだ」

「この戸板は船室への波除になるし、いざとなったら盾にもなる、蝶番は上に持ち上げると

簡単に取り外せるんだ・・・この戸板は海に振り落とされた者への浮き板にもなるんだ」

チコ「ヘー、船に取りつける物って、いろんな代用ができるようになっているんだねえ・・・」

フック「限られた場所に取り付けるのだから、まったくムダなく作るのが、船大工の腕前ってことだ」

フック「徐福様！今日の夕刻には船は出来上がるよ」

徐福「よし！」

徐福「姫を乗せたチコ達の船は今夜のうちに沖合いまで行き、島影で我らの船団を待つように」

「我らの船団が通り過ぎたら後ろから紛れ込むんだぞ」

「もしも、バレたら、蒙良に助けを求めるのじゃ・・・と、張良殿からの伝言じゃ」

蒙恬は徐福の身辺を密かに追跡して、出航の間際、企て（船団の数が一隻多い）事に気付く。

出発の夜のこと・・・蒙恬の手勢が港に駆け込んで来た。

手勢の前に親方はよろよろと道を塞いだのだが、脱刀の騎兵によって、一命を落としてしまった。

蒙恬「おい、この船に逃亡者が隠れておる、乗船して疑わしい者を船から引っ張り出せ！」

そこへ、蒙良とその手勢が割り込んできて、蒙恬の手勢が乗船しようとするのを遮った。

蒙良「父上、何をなされる！ここに乘せておる逃亡者は私が捕らえた者じゃ、乗せておるのは

婦女子・老婆ばかり、歩かせては足手まといとなるので、この船で黄河を遡って、

父上の居城へ連行するところだったのです」

（船の甲板からは縄で連なったみすばらしい姿の老婆や小汚い少女が顔を出した）

・・・蒙良はミュのけっさくに化粧した顔に気付くと、思わず吹き出しかけ、目を逸らした・・・

蒙恬「そうであったか、でかしたぞ！息子よ。・・・しかし・・・なぜ、俺に伝令を送って来ぬのだ？」

蒙良「父上、私はご覧のように利き腕を負傷しており、書を託す事が叶いません。

書いたところで、父上は偽書と思われるかも知れず、逃亡者を送るのが一番と考えました」

蒙恬「わかった、では、俺は弟：蒙毅を視巡ってから、城に戻る！待っているぞ！」

(蒙恬は手勢と共に、弟・蒙毅が築いている万里の長城へと馬を駆らせて行った)  
蒙良と姫たち・チコたちを乗せた船は、いったん港を離れ、沖の島影に隠れた・・・  
チコには親方の最後の姿が脳裏から離れず、船倉の隅で泣き崩れている・・・  
傍らには、そっとダ～ヤが寄り添う姿があった。

いよいよ出航だ！ 徐福は始皇帝が用意した軍師と共に軍船の先頭の指揮船に乗った。  
続いて、軍師の手勢を乗せた戦艦20隻が付き、  
その後に、若い男女の技術者・職人を乗せた船が40隻、監視役として軍師の手勢と蒙良の手勢  
が乗船した。更に、蒙良の手勢を乗せた護衛船3隻が後詰めで続いた・・・

蒙恬は、張良の策略で、城に戻る事が叶わなくなることを知る由もなかった。

張良は徐福の出航を影から見送ったあと、わざわざ足跡を残しながら、蒙恬の追手をかわして、  
巡行中の始皇帝を、巧妙に又、必用に付け狙ったのであった。

これは徐福たちへの注意を逸らし、追手を反対方向に導き、時間稼ぎが目的であったが、  
同時に自身の両親と妹の仇を討つためでもあった。

蒙恬の手勢は始皇帝の護衛と張良討伐に手を取られて、城に戻る事が出来なくなった。  
結果的に、蒙良のことなど・・・二の次のこととなってしまい、時間稼ぎは成功した。

※後年(BC215年?)

博浪沙の地で待ち伏せし、始皇帝の一行に、奇襲を駆けるが影武者と知り、失敗に終わるが、  
張良は更に逃走し、やがてはあの秦を亡ぼし漢を建てる劉邦と出会い、劉邦の軍師となる。

話を戻すが、出航に際して、張良はその前夜に各船長を集め、馬韓を出たら全船長は徐福を  
名乗ることと、それぞれが船をバラバラの方向に進むように事前に指示しておいたのだった。

蒙恬の疑念から難を逃れた徐福たちの船団はまとまって、先ず馬韓の地を目指した、  
この地は秦国の影響下にはあるが、秦に迫られた周王朝の残党と交戦中であった。  
船団の先頭に立って徐福を乗せた軍船も損傷を受け、徐福と軍師とは別の船に移った。  
軍師は仕方なく応戦ために兵力の一部を割くこととなった。

その日の夜、軍師が監視役の手勢と打合せをしている間に徐福の計略は動いた。  
徐福は打合せに大量の酒を差し入れたのでした。打合せは宴会へと変貌したのです。  
蒙良は見張りの軍師の手勢を始末し、徐福はまんまとチコ達の待つ船へ乗り移り、闇間に乗じて、  
各船長がバラバラの方向に静かに出航した。徐福は一路南の方角へ舵を切ったのであった。

軍師が事態を知ったのが、翌朝のことであった。急いで徐福追跡を始めたが、容易に徐福たちの  
船団を見つけ出すことが出来なかった。

数日は順風であった海の様子が一転し、灰色の低い雲が急速に迫ってくる、  
「嵐がやって来るぞー」

大きな波と、風・雨に翻弄され、船の帆柱の一本が折れてしまった。

フック「帆柱の修理は任しておきな、こんなことも有ろうかと予備の帆柱を積み込んできている」

徐福「幸い、追手の船団は散り散りバラバラになって、船団を立て直すには時間が掛かるだろう」

フックは段取り良く、半日は掛かる帆柱の修理を1時間程で済ませてしまった。

徐福は夜になり、台風が過ぎ去った星空を見上げながら、進む方向に手をかざした。

「修理を済ませたら、明かりを消せ、帆を揚げよ、目的地に向けて取り舵いっぱいだー」

また数日の間は穏やかな航海が過ぎた。

突然、見張りが叫んだ「後方から船が迫ってきております」

確かに軍師を乗せた追手の戦艦であった。たくさんの艦を出し、急速に迫ってくる。

見張りが叫んだ「後方から火矢を放ってくるぞー」

徐福「何とかしなくては、追手を引き離す何か妙案はないかー」

フック「おらに任せておけ」

フックは船倉から予備の柱と大きな帆を出してきて、帆柱を延長した部分に取り付けた。

帆は二倍程に広がり、追い風に乗り、追手を引き離すことが出来たのだった。

だが、次第に空の雲行きが怪しくなってきた。

見張りが叫んだ「嵐がやってくるぞー」

フックたちは急いで帆を下ろした、間もなく海は大荒れとなり、船は木の葉のように波間を舞った

大嵐は三日三晩続き・・・行動を共にしていた船も散りじりバラバラになった。

・・・が、不幸中の幸い。嵐のおかげで追手の戦艦を撒くことが出来たようであった。

波は高いが・・・天候は回復した・・・全員が甲板に出て、船の修復作業が始められた・・・

チコたちは、船から振り落とされない様に片足にロープを結びつけ、船の側面の修復をした。

カヤ姫も一緒に、船倉から、板や布・・・タールを運び出すのを手伝った。

お付きの娘：ミュと妹：マオが二人で大きな板を持ち出してきて、チコと蒙良の傍らを通ろうとした時のこと・・・大きな波が二人を襲った・・・

4人は足元をすくわれた、チコはマオの片腕を掴むことができ、海へ落とされるのを逃れたが・・・  
ミュは海の中へ・・・

蒙良はとっさに、自分のロープを解き、追って海の中に飛び込んだ・・・

近くに居たフックは竹の戸板を取り外し、蒙良の近くに向かって投げ込んだのであった・・・

蒙良はミュの身体を海中で抱きかかえ・・・海面に浮かび上がった・・・

近くに投げ込まれた戸板に、二人は救われ、難を逃れた・・・甲板から喝さいが湧きあがった。

…船の破損部分は応急修復は出来たが…

今、どのあたりを航行しているのか…地平線には、何ひとつ島影も共の船も見えない。

徐福は日の出の方向、日の入りの方向、毎晩、月の満ち欠け、夜空を眺めては星の位置を書き記している。

チコ「徐福様…その持たれている箱は何ですか？」

徐福「これは遠く西の国ギリシャに伝わる『天球箱』というもので日食や月食を予測したり、星の動きを予測する事が出来るものなのじゃよ…

若い時にアレキサンドリアの地で修行していた頃に先生から原理を学び、真似て自作したものなのじゃ…」

ブッキ「へえ…、日食や月食が予測できるのですねえ…すごい！」

「日食や月食はどうやって起きるのですか？」

徐福「先生の説によれば…私たちの住んでいるこの大地から、月や太陽などの星々には距離の違いによって、太陽と大地との間に月が通過することで日食が起きるのです」

ブッキ「じゃあ…月食は…どうようにして起きるのですか？」

徐福「先生の説によれば…まだよくは解らないのだけれど、この大地の裏側から何か(太陽)の光が当たっていて、大地の影が月に影を映しているのだと云うのですよ、だから、周期的に現象が繰り返されるのです」と。

ブッキ「なるほど！っと云うことは、太陽は私たちの大地の下を潜って、また東の地平線に浮かび上がる。っというのですね」

徐福「そう、但し、ギリシャから遠く離れた、この地では、天球箱の通りには予測できないのじゃ、私は先生からその補正方法を学んだのじゃ」

徐福「さらに、この天球箱と、毎夜の同じ時刻に星々を観測し、記録して置くことで、この船の位置も分かるのじゃ、さらに同じ場所で太陽・月・星々の位置が分かれば、暦も分かるのじゃ」

チコ「ところで、このまま漂流し続けたら、あと数日で、飲み水が尽きてしまうよ」

クッチ「まだ、大丈夫だよ…、出航前に、たくさんの夏ミカンやヤシの実を積み込んできたよ」

「皆さんにひとり1日1個ずつ分けても、10日は何とかなる」

チコ「合わせても、たった10数日分の飲料水ってとこか…」

それから、また、数日が過ぎた…

徐福「星の位置からすると、だいぶ南に進路を外れて進んでいるようだ…」

翌朝の事、帆柱の上に居た見張りが手をかざして叫んだ「島が見えるぞ！」

更に、見張りが叫んだ「狼煙が見えるぞ～」

蒙良「ここは、行ってはダメだ！追手が既に着ておる。進路を島から遠ざけよ！」

蒙良は張良から航海に際しての手順を教わっていたのでした。



先ず、島を見つけたら、兵士を島へ上陸させよ、探索をして、敵・味方を調べ、高台に狼煙台を築く。味方には銅鏡を使って光で知らせ、追手が来たら狼煙台に火を掛け味方に知らせる。

蒙良「この船は、大切な方々をお連れしておるので、味方の加勢に赴くわけには行かないのだ。

味方にはすまないが、回避する。ここは他の島を目指そう」と。

それから、また数日が過ぎた・・・

見張りが叫んだ「島影が見えるぞ！こんどは鏡の光が見えるぞ！」

やがて、船は島に到着した。別の船に乗っていた蒙良の部下が2人、出迎えに出ていた。

「蒙良様、お待ち申しておりました。先行の船隊は更に東へ3日程先に進んだ場所に居ります」

「我らは、ここで、見張りを続けます。水と食料の補給をして、先を急いで下さい。旅の安全を・・・」

船は防人の指示通り、給水と食料を補給して、進路を東に取り、更に進んだ・・・

が・・・途中、背後の島影で狼煙が上がるのを見た。

仲間の防人は無事に逃げ延びたのだろうか・・・

あるいは僅かな手勢で追手を欺き、異なる方向へ導いているのだろうか・・・どうかご無事で・・・

それから幾つかの狼煙台の有る島々を過ぎて、東へと進んだのだった。

更に幾つかの狼煙台の有る島を過ぎて、数隻の共の船が集まっている入江へと到着した。

海岸には既に祠が立ち並び、そよ風に真新しい銅鐸が揺れて、厳かな音色を響かせている。

その日の夕方、港の集会場に数人の船長：徐福が集まって、情報交換と相談をしています。

徐福①「誰か、我らの仲間が捕まったという、情報は入っておらぬか？」

徐福③「捕まった、という情報はないが、先の嵐で沈んでしまった船の情報は入っている」

徐福①「残念なことだ。それから・・・」

徐福①「秦の始皇帝が崩御したとの噂が流れておるそうじゃ。もう逃げる必要もないのでは？」

徐福②「まさか・・・追手のデマじゃないの？」

徐福①「私はこの地に留まろうと思う。ここまでは追手は来るまい。」

徐福②「私はまだ先を目指そうとおもう。この地にもっと良い場所が有るかも知れない。」

徐福③「既に何隻かの船は、ここを離れ、更に奥地に進んでいると聞く。」

徐福④「私は、船の損傷が酷く、船を降り、陸路で奥地に進もうと思う。」

徐福⑤「先日、通り過ぎた島から狼煙が上がったのを見た、この地はまだ危険かもしれない。」

「それぞれの進路は各徐福殿に任せよう、みなさん、ご無事で・・・今夜も上陸せずに船で休もう」

チコ達の一行は更に船で東へ進むこととして、今夜一晩は船を降りずにいることにしたが、

カヤ姫と従者の何人かが、船を下りて、食材の調達のために出かけて行った。

一時ほどして、突然、鐘を打ち鳴らす音が響き渡った。追手の襲撃だ！

蒙良は手勢の兵士と共に船を降り、追手に応戦している。



カヤ姫たちは火矢が飛び交う中を、船へと急ぐが、婦女子の走りでは追手の速さには敵わない。  
蒙良は覚悟を決め…僅かな手勢と共に追手に立ち向かっていった。  
カヤ姫一行は何とか船に辿り着くが…カヤ姫の一行から剣を持ち、蒙良の下に向かう娘：ミュの姿があった…港に留まっていた仲間の船から既に火の手が上がっている。

船は蒙良とミュたちを残し、闇夜に乗じて出航した。  
その後、蒙良とミュの消息は途絶えてしまった…

潮の流れが激しい海峡を通過しているようだ。潮に乗って凄まじい速度で進んだ。  
追手の戦艦は舳先に松明をかざして、追いかけてくる。

逃げる仲間の船とこの船と2隻…相手の戦艦は1隻…海峡を通り過ぎた後は、  
仲間の船は南へ、我々は東へ進路を切った。相手の戦艦は幸い南へ追って行ったようだ。

大小の島々を縫うように通り過ぎ、その島々の狼煙台から鏡の光の合図があった。  
やがて、大きな海岸線に辿り着いた。波の穏やかな場所(阿波)という処らしい。  
既に二隻が到着していた。

先に来た徐福の聞いたところによると、まだこの先、北側と南側に海峡があり、更に奥地に進むことが出来るのだとか…  
ただし、南側の海峡には恐ろしい大鯨が居て、船を沈めるとのことらしい。

チコ達の一行は、北側の海峡を通り、船が座礁しやすい浅瀬を避けて南下し、現在の大阪平野南部の地に船を止めた。  
行く先には山々が連なっている…眼前には肥沃な平野が広がっている。

見わたす限り、集落や砦は見当たらないようだ…  
偵察に向かった仲間達も同様の結果を持って帰って来た。

## 2-5: 新天地での生活が始まる

徐福「ここは、清らかな水が流れる良い処だ、ここを安住の地として住もうではないか。」  
「ここでは、現地の民と仲良く暮らし、民の言葉に合わせ、文字も伝えよう。」  
「ここを、戦の無い平和な国(和国)と名付けよう」

追手の戦艦が一隻訪れてきたが、始皇帝崩御の知らせを受けて、彼らにも帰る宛ても無く、既に戦意も無くなってしまい、仲間として同行を申し出て来たのだった。  
安住の地に着いて2年が過ぎた。もう新たな追手は来ないようだ。

徐福「多くの友、追手との争いで亡くなった者、遭難で亡くなった者、或いは、病に倒れた者・・・  
安住の地に居って、私一人が真の徐福であると、名乗ることは許されない。  
それに、私には、確かめねばならない使命がある。更に理想郷を求めて、陸路を進み。  
不老不死の実が有るのか無いのかをつきとめることなのだ。皆さんお別れです。」

徐福「最後に、現地の民に溶け込み、自らの技術を活かし、現地の言葉で暮らすのです。」  
クッチ「わたしもお供させてください、徐福様と不老不死の実を探します。」  
徐福は遺言を残し、クッチと現地の案内人を連れて、この地を去って行った。

やがて、徐福とクッチの消息は途絶えた・・・

さて、この先、徐福が何処へ行ったかって？ 諸説あるのですが、正直・・・判らないのです。  
複数の徐福が複数の足跡を残し、行き着いた場所も彼の墓も点在しています。

そして、徐福の名前自体も・・・歴史の表舞台から忘れ去られていった・・・  
徐福自身はこの地に根付いた和の国を見て、きっと、幸せだったのだと思います。

現地の人々に受け入れられ、溶け込んだカヤ姫とその仲間たち・・・  
姫がもたらした、穀物の種、果実の種や綿花などの種、蚕はこの地に根付いて行った。  
縄文式土器を作る低温炉の技術から弥生式土器を作るための高温炉を作る職人も居た・・・  
青銅器や鋼鉄を造る職人、新しい農業技術の職人、紙すき職人、織物職人も居た・・・  
彼らがどれだけ縄文式土器時代に影響を与えたのか？ 諸説あって定かではありませんが、  
彼らもたらした技術によって弥生式土器時代への文化が急速に発展して行った・・・  
・・・それぞれが幸せに暮らしたとさ。

ところで、徐福と行動を共にし、日本の各地に辿り着いた一行(逃走の際は徐福を名乗っていた)  
について、それぞれ独自の判断で拠点を築き、勢力を拡大していったのでした。

この地に移住した主な部族として・・・

徐福のキャラバン隊仲間であった民は秦(ハタ)氏と名付け、その部族を「ハタベ」の民と称した。  
楚の国の民の一行は楚→蘇(ソ)我氏と名付け、その部族を「ソガベ」の民と称した。  
趙の国(東阿)の民の一行は阿→阿(ア)氏と名付け、その部族を「アベ」の民と称した。  
魯の国(曲阜)の民の一行は阜(フウ)→宇(ウ)氏と名付け、その部族を「ウノベ」の民と称した。  
蒙良の部下であった一行は蒙(モウ)氏と名付け、その部族を「モノノベ」の民と称した。  
(※次の EpisodeⅢ で登場する部族への仮の名称としました)

徐福がこの地を去って年月が経ち、移住した民たちの間にはそれぞれの思惑が動き始めていた  
のでした・・・

(各部族が次第に強大化して行き、この地における豊かさへの主導権争いに火がつき始めます)

## (EpisodeⅢ):「ダ～ヤ」と「もうひとつの竹取物語(カヤ姫)伝説」

・・・「かぐや姫」と「カヤ姫」・・・

「かぐや」という名前の由来は「光かがやく」からとの説や、「このように云う」→「かく云う」など諸説あります。特に女性への名前に濁音を含めるのはタブーとされていたので、「かくや姫」と発音したのではないかととも言われています。この物語ではお話しの流れから「カヤ姫」の名で続けます。

### 3-1:ダ～ヤとジジ

徐福と共にこの地に来て、徐福とクッチは不老不死の妙薬を求めて、この地から更に奥地へ不老不死の妙薬を求めて、冒険の旅へと旅立って行きました。

・・・それから、5年が経ち・・・

チコ達は、積極的に地元の民に溶け込み、地元の言葉で自らの技術を伝えて行っただけです。しかし、チコ達がもたらした、農耕の技術や陶器を作る技術は使いようによっては優れた武器を作る技術にも成り得たのでした。

田畑を耕す鋤(すき)や鍬(くわ)は剣や槍に姿を変え、陶器を作る為の窯は鉄を溶かす為の溶鉱炉へと変わり、周辺部族の勢力争いに拍車がかかって行きました。

周辺の部族長は競って、チコ達を自分のものにしようと、民の獲得競争が激化してゆきます。

ある夜のこと、突然、チコ達の集落が襲われたのです。

「焼き打ちだ！」

「人さらいだ！ 逃げろんだ！」

チコ達が暮らしていた集落は後形もなく焼き払われてしまったのでした。

若い男女・・・子供たち・・・はどこに・・・

焼き尽くされた集落は、もぬけの殻になってしまった・・・

カヤ姫とダ～ヤも館を襲われ、僅かな従者と共に山中をさまよった・・・何度も襲われ続け・・・逃げるたびに、従者はカヤ姫の身代わりとなって、奪われていったのでした。

ついには、竹藪の中でカヤ姫とダ～ヤだけになってしまった・・・

(場所は現在の奈良の真美が丘あたり。ここから、竹取物語が始まることになるのですねえ。)

ダ～ヤは悩み、考えた。このままでは姫が危ない。  
私の霊は普賢菩薩様の下で、阿弥陀如来様にお仕えする戒名：賢苗院陀弥安仔の猫である。  
…と、そんな偉そうなことを言っている、姫をお護りすることは出来ない。  
ここは「吾輩は猫である」と云うことにして、姫の身分を隠さなければ…  
つまり、他人から見れば、少女に付き沿っているペットの存在であることに徹し…

姫を我が子のように保護してくれる、2人住まいの老夫婦を探し出し、養ってもらおう…

ダ～ヤは竹藪で働く、ジジを見つけ、ジジとその妻ババにはテレパシーを使って、暗示をかけ、カヤ姫を愛らしい赤子のように思わせて、家屋に引き入れさせ、大事に姫を育てさせました。  
ジジにはダ～ヤの暗示によって竹藪に隠しておいた財宝の一部を見つけ出させて、カヤ姫を養うための資金を提供しました。

ダ～ヤの知恵によって、カヤ姫の命の危機はなんとか、守られることになりましたが…  
ジジの思惑によって、カヤ姫に危害が加わるのでは…とダ～ヤの心配は続きます。

竹藪の中から、掘り出されるお宝によって、ジジは地域の有力者となりました。それで、ジジはカヤ姫を、わが娘として世間に公表し、盛大に祝いの宴会を催したのです。  
周辺の町々には、「カヤ姫」のあまりの美しさが評判になって行ってしまった。

世の中の男達は、身分の高い者も、低い者も、なんとか「カヤ姫」を手に入れたいものだ、妻にしたいものだ、と噂を聞きつけては、恋い焦がれ、心乱れるのでありました。

### 3-2: 有力部族5人の貴公子からの求愛にそれぞれ難問を出す

この日も、ダ～ヤはカヤ姫の傍に座り、ジジとの話をカヤ姫に代わってテレパシーを使い、あたかも、カヤ姫がしゃべっているかのように会話をしています。

ジジ「愛する大切な『カヤ姫』よ。あなたはジジとババの本当の子ではありませんが、このように立派になるまで養ってきた愛情は並大抵のことではなかったのですよ。このジジの言葉を聞き入れて下さいますでしょうか。」

(カヤ姫)「どんなことでも、おっしゃることをお聞きしないことがありますでしょうか、ジジ様がこのように育てて下さったことを、本当の親だと思っております。」

ジジ「嬉しいことをおっしゃるものよ『カヤ姫』」

ジジ「私は70歳を過ぎてしまいました。私の命は今日・明日とも知れませぬ、この世の倣いは、男は女と結婚する、女は男と結婚し、そして子宝に恵まれる。そうすることで、一族は繁栄するものなのです。愛する大切な『カヤ姫』よ。 どうして結婚しないままでは居られましょうか」

(カヤ姫)「どうして…、結婚しないままではダメなのでしょう…」

ジジ「そなたは、私どもの本当の子ではないけど、あなた様は女性です。ジジが活着ている間はあなた様の養いも出来ましようが・・・、この館においででの5人の殿方が、毎日のように通い詰めていらっしゃる。どなたかお一人を定めて、結婚して差し上げて下さいませ」

(カヤ姫)「美しくもない容姿なのに、人が深い愛情も知らないで、結婚してから浮気心がついてしまったら、後悔することになるでしょうに・・・と思うだけなのです。どんなに世の中の立派な人であっても、深い愛情を知らないのでは結婚など出来ないと思うのです。」

ジジ「私の心配している通りのことをおっしゃいます、それでは、どのような愛情のある人なら、結婚しようと思ひですか？ この5人の方々は『カヤ姫』への愛情が並大抵でない人々でしょうに。」

(カヤ姫)「どれほどの深い愛情なのか？を見たいとは言ひません、僅かなことなのです。

この人々の愛情は同等のようですので、その中で優劣が分かりますようか・・・。

私が見たいという物をみせてくださる方に、愛情が勝っているとして、お仕え申しましよう  
と、そのいらっしゃるとかいう人々に申し上げて下さい」

ジジ「それは良いことだ、さように伝えます」と承知した。

日が暮れる頃、いつものように5人の貴公子たちが集まっている。

ある者は笛を吹き、ある者は歌をうたい、ある者は楽譜を口ずさみ、ある者は口笛を吹き、ある者は扇を鳴らしなどするところに、ジジが出てきて申します。

ジジ「もったいなくも、むさ苦しい処に、長い年月にわたって、おいでくださいますこと恐縮至極に  
ございます。このジジがカヤ姫を説得致しましたので、お話し致します。」

5人の貴公子は身を乗り出して注目する。

ジジ「『このジジの命は今日・明日とも知れぬから、このように通い詰めてくださる殿方に、

良く考え、どなたか一人を定めてお仕え申せ。』と申しますと、カヤ姫は『もったいなくも、どのお方も優劣がおありにならないので、ご愛情の深さは私の願いを叶えてくださるかかどうかで、分かるでしょう。お仕え申し上げることは、それで決めましよう。』というので、『それは良いことだ』と了承しました、殿方への恨みもないことでしょう」と。

5人の貴公子たちも「それは、良いことだ」と言うので、ジジは5人を「カヤ姫」の間へと通した。

カヤ姫(ダ～ヤがテレパシーでカヤ姫に代わって)はジジに伝えます。

①ハタベの皇子(「竹取物語」に登場する「石作の皇子」)様には・・・

「ハタベの皇子様には仏の御石の鉢という物があります、それを取って来て下さい」

②ソガベの皇子(「竹取物語」に登場する「車持の皇子」)様には・・・

「ソガベの皇子様には東の海に蓬萊という山があるそうです。そこに、銀を根とし、金を茎とし、白い珠を実として立っている木があります。それを一枝、折って来て下さい」

③アベのご主人(「竹取物語」に登場する「右大臣阿倍御主人」)様には・・・

「アベのご主人には天竺の地にある火鼠の皮衣をください」

④ウノベのご主人(「竹取物語」に登場する「大納言大伴御行」)様には・・・

「ウノベのご主人には龍の頸に5色に光る珠があります、それを取って来て下さい」

⑤モノベのご主人(「竹取物語」に登場する「中納言石上麻呂足」)様には・・・

「モノベのご主人には燕の持っている子安貝を取って来て下さい」

ジジ「これは難しいことだ、この国にあるものではない。このような難しいことをどうして申せよう」  
(カヤ姫)「なんの難しいことがありますか」  
ジジ「とにかく、5人の貴公子に申ししてみよう」

ジジは5人の貴公子に対して「こういう次第です、『カヤ姫』が申すように、お見せ下さい」と。  
5人の貴公子たちは、難問を聞いて「なんと無理難題な、解決できそうな問題はお出されないのか」と嫌な表情をして、それぞれ帰って行った。

※①ハタベの皇子(「竹取物語」に登場する「石作の皇子」)のお話し

それでもやっぱり、皇子は何んとか、カヤ姫を妻にしたいという気持ちが強く、  
天竺にあると伝わる物『仏の御石の鉢』を持って来る方法について、思案を巡らせた・・・  
ハタベの皇子は5人の貴公子の中で一番若くイケ面でしたが、たいへん計算高い人物で  
「たとえ百千万里の距離を行っても、物を入手できる保証はない」と考えて・・・  
カヤ姫の屋敷には皇子より「今日、天竺へ石の鉢を取りに出かけます」と伝えておいて・・・

・・・姿を隠し・・・

3年ほど経ってから、大和の国、十市の郡にある山寺のビンズル尊者の仏像の前にある  
(※ビンズル尊者とはお釈迦様の筆頭の弟子で、神通力を持っているとされる羅漢様)  
まっ黒に煤がついた石の鉢を取って来て、錦の袋に入れ、造花の枝を添えて、  
カヤ姫の家に持って来て、見せたのでした。

カヤ姫とダ～ヤが不審に思って、鉢の中を見ると、鉢の中に木簡がある、見ると・・・  
「海や山の道に心を尽くして泣き、鉢を手に入れる為に、血の涙が流れました」とある。

カヤ姫は鉢に皇子の努力の証として、何か光るものがあるか？と見るが、煤がついた石鉢、  
蛍ほどの光さえも無い。

カヤ姫は(これが本物であれば)草の葉に置く、露ほどの光だけでもあるでしょうに、  
「ほの暗いだけのこんな物、どこで何をお求めになったのでしょうか」・・・と言って、  
鉢を突き返した。

皇子はしかたなく鉢を姫の屋敷の門口に捨ててしまって、  
「美しく輝くあなたに出会って、この鉢の光も失せるのかと、鉢を捨ててしまいましたが、  
恥を捨てても、姫のご好意に期待をしております」と、歌を書き送ったが、カヤ姫は  
耳にも聞き入れなかったので、皇子は未練がましく『捨て鉢な』ことを言って帰って行った。

カヤ姫「残念ねえ・・・5人の貴公子の中では、若くイケメンだったのにねえ・・・」

ダ～ヤ「5人の貴公子たちの民はそれぞれ私たちの集落を襲い、人々をさらっていった部族です。

共に徐福様に導かれて、この安住の地に辿り着いて、少しばかり豊かになったらと云って、  
私たちを裏切って、己の富を求め、集落を襲った強欲の者たちですぞ」

カヤ姫「そうだった・・・、このうえは、強欲の者たちの思いのままにならぬように気をつけましょう」

ダ～ヤ「あの強欲な者たちに、ひと泡喰らわしてやりたいものじゃ」

カヤ姫「ダ～ヤ、そんな、はしたない言葉を言うものではありませんよ」

## ※②ソガベの皇子(「竹取物語」に登場する「車持の皇子」)のお話し

この皇子は策略・謀略に長けた人物でしたので、帝には「筑紫の国に湯治に出かける」と言って休暇を申し出て、カヤ姫の家には「珠の枝を取りに行きます」と使いの者に言わせ、旅立たれるので、関係者の人々は、難波の港まで見送りをした。

皇子は「出来る限り、人目を避けて、行ってきます」と言って、近従の者に限定して出発した。旅立たれたと他人には見えるようにして、3日程経ってから、夜中にこっそりと所領に戻った。

前もって、計画を立てていたもので、奪って隠していた鍛冶職人や飾り職人らを呼び寄せ、所領の片隅の、容易に近寄れそうもない作業場に閉じ込め、3年程の間、自らもその作業場に寝泊をして、全財力を注ぎ込み、珠の枝を作らせたのでした。

・・・それは、カヤ姫が言われたのと変わらない精巧な物を、作り出したのでした・・・

更に、策略を巡らせ、密かに、物を船へ運び入れ、「船に乗って帰って来た」と自分の屋敷へ知らせを送り、大変疲れたふりをして、船から降りてきたのでした。

迎えの人々が大勢集まった。皇子は「珠の枝」をうやうやしく「長もち」に入れ、覆いを掛けて、どこから持ってきたのかは定かではありませんが「ウドンゲの花」を持って、戻ってきたのです。(※「ウドンゲの花」は 3000 年に一度、花が咲き、その時に金輪王が現世に現れると伝わる)

人々は大騒ぎをした。

カヤ姫もダ～ヤもびっくり・・・「皇子の申し出に負けてしまいそう」と胸がつぶれる思いでした。

こうしているうちに、皇子が門を叩き「到着しました」と告げる。

「旅の姿のままで、参りました」というので、ジジが出迎える。

皇子「命を捨てる覚悟で『あの珠の枝』を捜し求めて持ってきました。カヤ姫にお見せ下さい」

ジジは皇子を客間に引き入れ、珠の枝を受取る。この珠の枝に歌が添えてありました。

「わが身が死んでしまっても、珠の枝を手折らずには、決して帰って来なかったでしょう」と。

カヤ姫が思案に暮れていると、ジジが走り込んで来て、  
「この皇子様に申し上げなされた蓬莱の珠の枝を、間違えず、持っておいでになっています、  
何を理由にとやかく申せましょう。旅のお姿のままで、ご自宅へも戻らず、おいでになりました。  
早くこの皇子と結婚して、お仕え申しなさい」と。

カヤ姫とダ～ヤは物も言わず、頬杖をついて、ひどく嘆かわしそうに、物思いをしていた。  
ダ～ヤは珠の枝を眺めていて…突然、何かに気が付き、ハッと、飛び出して行ってしまった。

皇子は「今さら、なんだかんだと、言うことはできない」と言って、縁側まで上がり込んできた。  
…ジジは道理だと思う…

ジジ「この国で見られない珠の枝です。今度はどうしてお断り申せよう。皇子様は人柄も良い人でいらっしゃる」と。

カヤ姫「親がおっしゃることを、むやみに嫌だと申すことの、お気の毒さに…」  
ジジは寝室の中を整え、初夜の用意などをする。

ジジ「皇子様、どういう所に、その木はございましたのでしょうか？  
不思議な程、美しく、素晴らしいものでございますなあ」

皇子「『カヤ姫』の課題を聞いて難波から船に乗って、大海原に出て、どちらが良い方角なのかも分からない思いをしたが、願いが成就しないままで世の中に生きて何になろうとかと  
思ったので、ただもう当て所ない風に任せて航海しました」と。

ジジ「ほ、ほー」と相槌を打つ。

皇子「死んだらどうしようもない、生きている限り、こうやって航海して蓬莱という山に出会うかも  
と、船を漕ぎ、漂い回って、我が国を離れて航海しておりましたところ、ある時は波が  
荒れ続け海底に沈みそうになり、ある時は風に押されて知らない国に吹き寄せられ、  
鬼のようなものが出てきて我々を殺そうとした。ある時には来た方角も行く先も分からず、  
海で遭難しそうになった。ある時には食料が尽きて、草の根を食い物とした。  
ある時は言いようもなく気味の悪そうなものが現れて、食いかかろうとした。  
ある時は海の貝を取って命をつないだ」と。

ジジ「ほ、ほ、ほー」と相槌を打つ。

皇子「旅先で助けてくださるような人もいない所に、様々な病気をして行く方向さえ分からない。  
船の行くのに任せて、海に漂って500日の朝八時頃に海のただ中に、かすかに山が見える。  
船の中をギリギリまで前に行って体を船べりに押し付けて見る。海の上に漂っている  
山はたいへん大きい様子であった。その山の有様は、高く、うるわしい。これが私の探し求  
めている山だろうと思って、それでも恐らくの疑念もあり、山の周りを漕ぎ巡り、二・三日の  
間はようすを見た。



天女の服装をした女が山の中から出てきて、銀の椀を持って水を汲み歩いている。  
これを見て私は船から降り『この山の名を何と申す』と尋ねると、女は『これは蓬萊の山である』と答える。これを聞いて嬉しいことは限らない。女は『そうおっしゃるのは誰か？私の名はルリ』と言うので、その女といっしょに、山の中に入ったのです」と。

ジジ「ほ、ほ、ほ、ほー」と相槌を打つ。

皇子「その山は、見ると全く登れそうにない。その山の周囲を見回ると、この世にない花の木々が立っている。金色・銀色・瑠璃色の水が山から流れ出ている。そこには色とりどりの宝石でできた橋が渡してある。そのあたりに照り輝く木々が立っている。その中で、この取って持参致したのは、あまり良くないものでしたが、姫がおっしゃったものに違っていないと、この花を折って参ったのです」と。

ジジ「ほ、ほ、ほ、ほー」と相槌を打つ。

皇子「山は限りなく興味深い。この世に例えられるものでは有りませんでした、この枝を折ってしまったので、改めて姫への恋願いが成就すると、船に乗り、追い風が吹き、四百余日で、帰って参りました。神仏様のお導きでしょうか、昨日、難波に戻りました、潮に濡れた衣さえ全く脱ぎ換えもせずに、こちらへ参上いたしました」と。

ジジは皇子の話に感動して・・・

「私たちのような者には野や山で、そんな辛く苦しい日ばかりの心に想像もつきません」と。

皇子「長い間、辛い思いをしておりました心は 今日、お届け出来たことで落ち着きました」と  
「海水や涙で濡れていた私の袂も、今日は乾いたので、様々な艱難辛苦も忘れるほどです」

こうしているうちに、庭先に男たちが現れた。(その中にチコとダ～ヤの姿も並んでいました)

一人の男が、木簡を持って申します。

「私はソガベの皇子の下で働く、飾り職の匠です。珠の木をお作り申し上げましたこと、自らの農作業を断って、千余日にわたって尽力したことは、並大抵ではありませんでした。

・・・にもかかわらず、その報酬をまだ頂いていません。これに書いてある報酬を私にくださって、弟子たちにも頂戴させましょう」と言って、木簡を捧げている。

※(実はダ～ヤは珠の枝の根元にチコが作った証の印が刻まれている事に気付いたのでした)  
チコ達職人は皇子が持ってきた珠の枝を作り、その枝を納めた「長もち」を担いで来ていた。  
ダ～ヤはチコを探し出し、チコと相談して、匠の頭を利用して、こんな策を取ったのでした。

ジジはこの職人の匠らが申すことは何事かと首をかしげている。

皇子は心ここにあらずといった面持ちで、肝を潰して座っていらっしゃる。

これを、カヤ姫が聞いて「この差し出している木簡を取ってください」と、書かれた内容を見ると・・・  
「皇子の君は、1000日間、身分の低い職人たちと一緒に同じ場所に隠れ住んでいらっしやって、立派な珠の枝を作らせなさって『官職も与えよう』と仰せになりました。  
これを、私どもが考えますに、『御側室にお成りになるカヤ姫が、ご要望されたのであろう』と、お聞きしましたので、このお宅から褒美を頂戴したいと存じます」とある。  
匠たちが口々に「頂かなくてはなりません。」と言うのを聞いて、  
カヤ姫は日が暮れるにつれて、思い沈んでいた気持ちも、笑いほころんで・・・

ジジを呼び寄せて言うことに、  
カヤ姫「本当に蓬莱の木かと思ってしまいました。このようにあきれた嘘であったのですから、早く返して下さい」と言うと、  
ジジ「いかにも、作らせた物と聞いてしまったからには、返すことは誠に簡単だ」と頷いている。  
カヤ姫の心はすっかり晴れて、  
「本当かとお話を聞いて、見ておりましたところ、言葉を飾っているだけの珠の枝でした」と言って、珠の枝を返してしまった。

ジジはあれほど皇子と懇意にしていたのが、さすがに気まずく思われて、居眠りをしてしまった。  
皇子は、立っても落ち着かず、座っても落ち着かない様子で、座っていらっしやる。  
日がすっかり暮れてしまったので、そっと抜け出されてしまったのでした。

カヤ姫は匠を呼んで座らせ「嬉しい人たちだ」と言って、褒美をたくさんお与えになる。  
そして褒美の代わりとして、チコの身柄をカヤ姫の館に譲り受けたのでした。  
匠らはたいそう喜んで「思ったとおりだったな」と言って帰る。

帰り道で、皇子が匠らを捕らえ、血の流れるまで匠らを打ちすえなされた。  
匠らは、褒美を得たかいもなく、皇子がみんな奪い取って、捨てさせてしまわれたので、皆は逃げ失せてしまったのでした。

皇子「一生の恥、これに過ぎるものはないだろう。女を手に入れそこなただけでなく、  
天下の人が見て思うであろうことの恥ずかしいこと」とおっしゃって、  
ただお一人、深い山に隠れてしまわれた。役人やお仕えしている人々が、みんな手分けをして、お探し申したけれども、お亡くなりになられたのか、見つけることが出来なくなってしまった。

チコ「お懐かしい、襲われたあの夜の事を思い出すと、身が縮む思いです。カヤ姫も良くぞご無事でいらっしやいました」  
ダ～ヤ「実は、皇子から出された珠の枝の手元にチコ様の印を見つけ、近くに居らっしやると  
思い、お探しいたしました」  
チコ「ダ～ヤ様にお会いして驚きました。本当にご無事で・・・再会が出来て、よかった」  
チコ「カヤ姫さま、ことの詳細はダ～ヤ殿から聞きました。匠の申し出はダ～ヤ殿の知恵を借りて、仕組んだものです」

カヤ姫「チコ様、嬉しく思います。チコ様にはこの館に住まれ、十分休養をしてください、  
離れ離れになった、お仲間をご苦勞ですが、どうか、探していただきたいのです」と。  
チコ「承知いたしました。お付きの人々に気付かれぬように、尋ね回って探し出しましょう」

ダ～ヤ「多くの人々を奪いとって、この上、カヤ姫までも手中にしようと狙っている強欲の者たちに  
何か策はないでしょうか？」

チコ「先ずは、私たちに協力してくださる勢力を整えましょう」と。

### ※③アベの主人(「竹取物語」に登場する「右大臣阿倍御主人」)のお話し

アベの主人は財産が豊かで、大変繁栄している方でしたので、交易の為に所領の港へ  
来航していた、キムという商人のもとに、仕えている人の中で最も信頼の出来る、ワタリ  
という家来に手紙を託して派遣したのです。

ワタリ「キム殿、火鼠の皮というものを買って来て欲しいのです。」とキムに手紙を渡し、  
金を取らせる。

キムの返書「火鼠の皮は、私の国には無いものである。話しには聞いているが、まだ、見た  
ことがない物である。もし、世の中に存在する物ならば、持って来ましょうが、大変難しい  
交易です。しかしながら、もし、当方の交易先にたまたま渡来していたならば、もしかすると  
長者の家などを尋ねて行って。求めて見ましょう。存在しない物ならば、使いの者に持たせ  
て、金はお返ししましょう。」と書いてあった。

一年が過ぎて、例の交易船が再びやって来て、ワタリから戻って来るとの知らせを受けて、  
主人は所領の港へ足の速い馬を使って走らせ、迎えさせなされた。

ワタリは所領の港から、たった七日で戻って来た。手紙を見ると

「火鼠の皮衣は、やっとのことで探し求めてきたので、差し上げます。今の世にも昔の世にも、  
この皮衣は容易にはない物でした。昔、尊いインドの僧が、交易先の国に持って渡来していた物  
が、西の寺院にあると聞き及んで、その国の朝廷に申して、やっとのことで買い取って来たので、  
お届け致します。代価の金額が少ないと、朝廷の司が使いの者に申しましたので、当方の手持ち  
金を加えて買いました。金をもう五十斤頂戴したい。船が帰航する時に託して送ってください。もし、  
送金なさらないならば、その皮衣を返して下さい」と。

主人「何をおっしゃる。今、金はまだ後僅かであるようだ。嬉しいことに、送ってくださった。」と  
言って、所領の港の方角に向かって、伏し拝みなさる。

この皮衣を入れてある箱を見ると、様々な美しい瑠璃を彩色して作ってある。皮衣を見ると、  
紺青の色で、毛の先には、金色の光がして輝いている。宝物と見え、美しいこと、並べられる  
物がない。火に焼けないことよりも、清麗であることは、この上もない。

主人「なるほど、カヤ姫がお好みになるわけだな。…ああ、ありがたい。」

そのまま、カヤ姫の館に泊ってしまうのだと、ご自身の化粧もたいそう念入りになさって、歌を詠み添えて、持っておいでなった。

その歌は「あなたへの限りない思いの炎にも烧けない皮衣を差し上げる喜びで、涙に濡れた袂も乾いて、今日こそは(その皮衣を)着てみませんか」

主人は、カヤ姫の館の門口に皮衣を持って行って、立っている。

ジジが館から出てきて、受取って、カヤ姫に見せる。

カヤ姫「美しい皮のようなこと。 が…他の物とは違う、本物の皮だかは分からない。」

ジジ「とにかくにも、まず殿を招き入れ申そう。この世に中に見られない皮衣の様なので、これを本物とお思いなさい。人にあまりつらい思いをおかけ申し上げなさいますな。」

ジジは殿を呼び入れ、席にお着け申し上げる。

ババも今度は必ず結婚するだろうと思っている。

ジジもババも、カヤ姫が独身であることが嘆かわしかったので、高貴な人と結婚させようとめぐらすけれど、心から『いや』と姫が言うことなので、強いることもできないため…今回の機会に期待するのは当然でありました。

カヤ姫「この皮衣は、火に焼いてみて、焼けなかったら、本物だと思って、あの方の言うことにも従うでしょう。ジジ様は『この世にない物だから、それを本物と疑わずに思おう』とおっしゃる、でもやはり、これを焼いて試してみましよう。」

ジジ「それは、いかにもおっしゃるとおり」と言って、主人に「このように姫が申します」と伝える。

主人「この皮は私の領地にもなかったのを、やっとのことで探し求めて入手したものだ。

何の疑いがありましょう。そうは申しても、早く焼いてご覧なさいませ。」 と言うので、火の中にお焼かせになると、めらめらと焼けてしまった。

アベの主人はこれをご覧になって、顔は草の葉の色のようになくなっていらっしやる。

カヤ姫「ああ、嬉しい。」と、喜んで、主人がお詠みになった歌をカヤ姫が箱に入れて返す。「跡形なく燃えると知っていたなら、皮衣を疑らないで、火にくべずに見ていたのに」と。それで、アベの主人はお帰りになってしまった。

ダ～ヤ「己の金銀財宝で、どんな幸福も手に入ると信じた、強欲者への報いだ…」

カヤ姫「そんな、はしたない事を言わないで」と

※④ウノベの主人(「竹取物語」に登場する「大納言大伴御行」)のお話し

ウノベの主人は、全ての家来を集めて「龍の頸に五色の光を放つ珠があるそうだ。それを取って献上する者には、願い事を叶えてやろう」と。

家来ども「お命じになられることは、大変ご立派ですが、この珠は簡単には取れないでしょう」と。  
「まして、龍の頸の珠をどのようにして取れと？」と、皆が口々に申している。

主人「高貴な人物の臣下という者は、命を捨てても、主君の命令を叶えようと思うはずである。  
この国にない、天竺の物でもない。この国の海や山から、龍は昇り降りするものである。  
どう思って、お前らは難しいことだと申せるのか」

家来ども「それならば、どうしようもないことでございます。困難なものであっても、  
ご命令に従って、求めに参りましょう。」

主人は笑って「お前らは主君の従者として、名を世間に知られている。主君の命令に  
どうして背くことができよう」

龍の頸の珠を取る為にということで、出発させなさる。この人々の道中の保存食・生鮮食料品の費用に、邸内の絹・錦・金など、あらん限りの物を取り出して付けて派遣する。

主人「この者どもが帰るまで、精進・節制をして、私は待っていよう。この珠を取り得ないでは、  
家に戻って来るな」とおっしゃった。

家来どもが命令を受けて、退出した。

「龍の頸の珠を取り得ないでは、帰って来るな」とおっしゃるので、各人が思い思いの方向へ行ってしまうと、「なんと途方もない、物好きなことをなさる」と、主人の悪口を言い合っている。  
与えられた物は、各人が勝手に分けて取ってしまった。

ある者は自分の家に持ち帰ってふところに貯め込んでいたり、ある者は自分の行きたい所へ行ってしまった。

「親、君主と申しても、このように手掛かりのないことをお命じなさる」と埒(らち)の開かないことを言うので、家来どもは主人を非難し合っている。

主人「カヤ姫を住まわすには、このままでは見苦しい」とおっしゃって、新しく美しい建物をお造りになって、漆を塗り、蒔絵で飾った壁を立てて、屋根の上に糸を染めて様々な色で葺かせて、屋内の調度には、言うすべもない綾織物に絵を描いて、一間ごとに貼っている。

現在の妻たちは、カヤ姫を必ず妻にする準備として離縁し、お一人で生活していらっしゃる。

派遣した人々は、主人が夜も昼も待っていらっしゃるのに、年を越すまで何の音沙汰もない。  
待ち遠しくなって、はなはだ人目を避けて、ただ二人の従者と粗末な身なりをなさって、  
難波あたりにいらっしゃって、主人が所有する船人をつかまえて尋ねられた。

主人「ウノベの主人の家来が、船に乗って、龍を殺して、その頸の珠を取ったと聞いているか」  
聞かれた船人(フック)は笑って「訳の分からないことだな、そんな仕事をする船もない」と答える。

主人「何をとぼけたことを言う船人だ。無知だから、このようなことを言うのだな」

主人「我が弓の力は、龍がいれば、簡単に射殺して、頸の珠は取ってしまうだろう。遅れて来る奴  
らを待つまでもない、船を出せ！」

と自らその(フックの)船に乗り込み、あちこちの海を漕ぎ回っていらっしやると・・・  
瀬戸内の海を過ぎて、たいへん遠くの筑紫の方の海に出てしまわれた。

どうしたのであろうか、疾風が吹いて、あたり一面暗くなって、船を漂流させ続ける。  
どちらの方向とも分からず、船を海中に沈めてしまいそうなくらい吹き荒れて、波は船に打ち当た  
っては巻き込み、雷は落ちかかるように閃光を放つので、主は困惑してしまって、

主人「まだこんな辛い目にあったことはない、どうなってしまうのだ」

フック「長い間、船に乗って動き回っていますが、こんなひどい嵐にあったことはありません。

船が海の底に沈まないとしても、雷が落ちかかるでしょう・・・

もし、幸いに神の助けがあったとしても、南の海の果てに吹かれて行ってしまうでしょう。

どうしようもない主人に仕えて、とんでもない死に方をしそうですよ。」

主人「船に乗ったら、船頭の申すことには、高い岳のように頼りにする。どうしてこんな頼りない  
ことを申すのだ」と・・・船酔いで反吐を吐きながらおっしゃる。

フック「私は神ではないので、何が出来ましょう・・・風が吹き、波も激しく、雷まで頭の上に落ちか  
かるようなのは、主人が龍を殺そうと探し求めているから、こうなるのですよ。

疾風も龍が吹かせているのですよ。早く、神にお祈りしなさいませ」

主人「船頭の祭る神様、お聞きください。つたなく、心がおとなげなく、龍を殺そうと思いました。

今後は、毛の一本すら動かし申すことはしますまい」と、誓いの言葉を言い放って、立ったり  
座ったり、泣く泣く呼びかけなさること千度ほど申し上げなさったあろうか・・・

しだいに雷が鳴りやんで・・・少し稲光がして、風はまだ速く吹いているが・・・

フック「これは、龍のしわざであったのです。この吹く風は良い方向の風です。悪い方向の風では  
ありませんよ、良い方角に向かって吹いています」と。

主人はうわの空で、放心状態のまま、ただただ、神に祈るのみであった。

三、四日、風は順調に吹いて、船を出航した港の方へ吹き返し、近寄せた。

主人は南海の果ての浜辺にでも吹き寄せられたのであろうと思って、ため息をついて船底で  
伏せていらっしやる。

家来どもが船から主人を担ぎ降ろして、やっとのことで南海の果てではないと知って、起き上がられた。その風貌は風邪のたいへん重病人といった有様で、腹が非常にふくれ、両目はこけ落ちて生気が無く、うめきうめき担がれて、家にお帰りになった。

家に帰られたのを、どうして聞きつけたのであろうか、派遣されていた家来どもが次々と参上して家来ども「龍の頸を取ることができなかったのも、主人の御殿へも参上出来なかったのです。

珠が取りにくかったことをご存じでいらっしゃるので、おとがめはないだろうと思って、参りました」と。

主人「お前らは、よくぞ珠を持って来なかった。龍は雷の仲間であったのだ。それを取ろうとして、大勢の人々が殺されようとしたのである。まして、もし龍を捕らえたりしようものなら、また、訳もなく、私は殺されてしまっただろう。よくぞ捕らえずにしてくれたものだ。よかった」

主人「カヤ姫という大盗人の奴が、人を殺そうとしているのだ。カヤ姫の館には、もう通うまい。

家来どもも、近寄るな。」

といって、家に少し残っていた、いくつかの物は龍の珠を取らない者どもにお与えになった。

それから、主人をたしなめた、フックには船と自由の身分をお与えになった。

これを聞いて、離縁なされた元の正室は、腹がよじれるほどお笑いになる。

新しく糸を葺かせて造った屋根は、鳶や烏が巣にする為に、みんなくわえて取って行った。

自由になったフックがカヤ姫の館を訪れて、チコたちと再会したのでした。

チコとフック、それに、ダ～ヤは夜通し再会の喜びと、これからの方策について話し合いました。

チコ「フック殿、よくぞご無事でいてくださった」

フック「皆さまも、大変な目に遭われたんですね。これから先をどのように進めましょう？」

チコ「奪われた民を取り戻し、新天地へ向けて逃れるための用意をしなくてはなりません」

ダ～ヤ「先ずは、身体を休められてから、与えられた船の補修と航海の準備をお願い致します」

フック「承知いたしました、さっそく取りかかります」

チコ「補修の為の釘の用意は、任せてくださいね」

※⑤モノベの主人(「竹取物語」に登場する「中納言石上麻呂足」)のお話し

モノベの主人は屋敷の使用人や家来どもに「燕が巣を作ったら知らせよ」とおっしゃるので、家来ども「何の用になさるのですか？」と問うのです。

主人「燕の持っている子安貝を取ろうとするためである」と答える。

家来ども「燕をたくさん殺して見るときでさえも、腹にないものです。ただし、

子を産むときに、どうやって出すのでしょうか？腹から出てくるのですか？」と問う。

別の家来「人が1人でも見ていると、子安貝は無くなってしまいます」と言う。

また別の家来「大食堂の調理場の建物の屋根に付いている穴ごとに、燕は巣を作っております。

そこに、忠実な家来を連れて行って、足場を高く組み上げて、様子を探らせるようにすると、たくさんの燕が、子を産まないことはないでしょう。そのようにして、取らせに なんては如何でしょう」と言う。

主人(喜んで)「すばらしい、名案だ。全く知らなかった、興味のあることを申した」

忠実な家来どもを20人ほどを派遣して、足場に上がらせて配置なされたのです。

主人はひっきりなしに「子安の貝を取ったか？」と問われる。

燕も、人が大勢上っているのに怖気づいて、巣にも戻って来ない。

家来どもが、こうした事情の返事を申したところ、主人はどうしたら良いのかと思い悩んでいると、調理場で下働きをしていたブッキが申し出たのです。

ブッキ「子安貝を取ろうとお考えならば、はかりごとを巡らせて申し上げましょう」と。

ブッキ「まずい計略でお取らせになっているのです。それでは、お取りになれますまい。

足場に仰々しく20人の人が上がっておりますので、燕は離れて近寄って参りません。」

主人「なるほど、なるほど」と額をつきあわせて対面なさる。

ブッキ「させるべき方法は、この足場を壊して、人はみな後退して、忠実なお一人を粗籠に乗せ、座らせて、綱を用意して、燕が子を産もうとする間に、綱を吊り上げさせて、

さっと子安貝をお取らせになることが良いでしょう」

主人「大変良いことだ」と言って、さっそく足場を壊し、家来はみんな後に退いたのです。

主人「燕はどのような時に、子を産むと判断して、人を引き上げるべきか？」とブッキに問う。

ブッキ「燕が、子を産もうとするときは、尾を差し上げて、7度回って、産み落とすようです、

そこで、7度回る時に引き上げて、その時、子安貝をお取らせなさいませ」と。

主人は大喜びになって、誰にもお知らせにならないで、密かに調理場においでになって、家来どもの中にまじって、昼夜の区別なく陣頭指揮をなさるのです。

ブッキがこのよう申すことに、大変大喜びをなさる。

主人「私に使われている人でもないのに、願いを叶えてくれることが嬉しい」とおっしゃって、主人のお着物を脱いで、褒美としてお与えになって、

ブッキの身分を調理場の下働きから、解放し、自由の身分をお与えになった。



主人「改めて、今夜、この調理場に来なさい」とおっしゃって、帰宅させた。

日が暮れてしまったので、例の大食堂の調理場に主人もおいでになって、ご覧になると、本当に、燕が巣を作っている。ブッキが申すように尾を浮かせて回っているの、粗籠に人を上がらせて、吊り上げさせて、燕の巣に手を差し入れさせて探るが、家来「何もありません」と申すので、主人「下手に探すからないのだ」と腹が立って、主人「誰か適任の者がおらんのか」と言っ、「私自身が上がって探ろう」と自ら籠に乗って、吊り上げられて、巣の様子を窺ってらっしゃると、燕が尾を差し上げてひどく回るのに合わせて、手を差し上げてお探りになると、手に平たい物がさわった時に、主人「私は、何かを握っている。もう下ろしてくれ。ブッキよ取ったぞ」と大喜びで、おっしゃって、人々が集まって、速く下ろそうとして、綱を引き過ぎて、綱が切れてしまっ、調理場の大釜の上に、仰向けに落ちられてしまった。

人々はびっくりして、近寄ってお抱え申し上げた。主人の眼は白眼になって倒れていらっしゃる。人々は、水をすくい、お口に入れ、やっとのことで、生き返りなされたので、大釜の上から手取り足取りして、お下ろし申し上げた。

家来ども「お気分は如何でいらっしゃいますか？」と質問すると、主人は息も絶え絶えになって主人「意識は回復したが、腰が動かない。それでも、子安貝をさっと握り持っているから、嬉しく思っているのだ。ともあれ、灯りを持ってこい。この貝の顔を見よう」と。御顔を持ち上げて、お手を広げなされたところ、燕の古い糞を握っていらっしゃった。子安貝ではないと知り、ご気分も益々悪くなって、御腰も骨折されてしまっていた。

主人は子供じみた事をして計画を断念したことを、人に聞かせまいとなされたけれど、それを、心労の種として、たいそう衰弱してしまわれた。

子安貝を取ることが出来なくなってしまったことよりも、人が聞き、笑うであろうことに、日が経つにつれて気になされたので、普通に病死するよりも、恥ずかしいことと思うのでした。

主人は失意のなかで、息が絶えてしまわれたのでした。

晴れて、自由の身となったブッキは事件の経緯からカヤ姫の消息を知り、館を訪れて、チコやフック、そしてダ～ヤと再会を果たしたのでした。

### 3-3: 和の国を束ねる帝(みかど)からの求愛

さて、カヤ姫は世間に似た者がなく美しいとの噂を、帝がお聞きになって、侍従に問われた。  
帝「新参者の大勢の人の身を滅ぼして、結婚しないでいるカヤ姫は、どのような女であるのか？  
出かけて行って、見て参れ」と。・・・それで侍従はカヤ姫の館を訪れたのでした。

ジジは恐縮して、家に招き入れて会った。

侍従「勅命です、『カヤ姫の容姿が優れていらっしゃる。良く見て参るように』との旨で参りました」  
ジジ「承りました、お待ちくださいませ」

ジジはカヤ姫に申す

ジジ「早く、あのご使者にご対面なさいませ」と

カヤ姫「美しい容姿でもありません。どうしてお目にかかれましょう」と

ジジ「嫌そうにおっしゃいますな。帝のご使者を、どうして祖略にできましょう」

カヤ姫「帝のお召しでも、畏れ多いこととも思いません」と言って、決して会いそうにもない。

ジジはカヤ姫がたいへん気が引けるほど、投げやりな様子で言ったので、思いのままにせきたてることもできない。

ジジはご使者の所に戻って来て、

「残念ながら、この未熟者は、強情者でして、対面しないつもりでございます」と。

侍従「必ず拝見して来いと勅命がありましたのに、拝見しないでは、どうして戻れましょう。

国王の勅命を、どうしてこの国に住んでいる人がお受けになさらないことができませんようか。

訳の分からないことをなさらないでください」と、気が引けるように言ったので。

カヤ姫「国王の勅命には従いません。 ならば、はやくお殺しく下さいませ」と申す。

侍従は、戻って、この事情を帝に報告する。

帝「多くの人を殺してしまったという恐ろしい心の持ち主なのだな」と言われて・・・

諦めたけれど、やはり、この女のはかりごとには負けていられようか、という思いになって、

帝はジジを呼び出し

「そちが持つておるカヤ姫を宮中へ参内させよ。使者を送ったが会えないでしまった。

このような不都合を癖にすることはできない」

ジジ「この小娘は、絶対に宮仕えをしそうにもありませんので、持て余しております。

そうであっても、家に戻って勅命を伝えましょう」

帝「どうして、そちが育て上げたであろう者を思いどおりにならないのだ。この女を献上したら、  
そちに五位の官位を与えようと言うのに」

ジジは喜んで家に帰り、カヤ姫に言い聞かせた。

ジジ「こんなに、帝はおっしゃっているのだ。それでも、やはりお仕えなさらないのか」

カヤ姫「まったく、そのような宮仕えは、決してしません、無理強いしてお仕えをさせるのならば、消え失せてしまいましょう。ジジ様にご官位をもらえるようにしてから、死ぬだけです」

ジジ「そんなことは、してはなりません。官位も我が子を失ってしまうのなら、何になりましょう。

死になさる理由があるのでしょうか？」と

カヤ姫「やはり、私が言っていることは嘘なのかと、宮仕えさせて、死なずにいるかどうかご覧ください。大勢の人の愛情がいかげんでなかったのを、無駄にしてしまったのです。

昨日今日、帝がおっしゃることに従うようでは、人に聞かれて恥ずかしい」と。

ジジ「天下のことは、どうであろうとも、カヤ姫のお命が危ないことこそ、大きな問題です。

やはり、お仕えするつもりがないことを、帝にお伝えしよう」と参内に申し出る。

ジジ「勅命のかたじけなさに、あの娘を参内に上げらせようとして説得しましたが……

『宮仕えに出すと、死ぬつもりだ』と申します。私自身の手で産ませた子でもありません。

昔、山で見つけました。こういうことで性格も、世間の人に似ないのでございます」

帝「そちの家は、山のふもとに近い。私が狩りの行幸をするようにして、たまたま立ち寄ろうか」

ジジ「たいへん名案です。カヤ姫がぼんやりしておりますときに、不意に訪れてご覧くださいませ」

帝は急いで日程を決めて、御狩りにお出かけになって、カヤ姫の家に立ち寄られてご覧になる。

なんと、光が満ちて、清らかで美しい姿で座っている人がいるではないか。

帝はこの人であろうと思って、逃げて奥に入るカヤ姫の袖をお捕まえなされると、カヤ姫は衝立の後ろで顔をふさいでおりますが、最初にご覧になつので、比類なく美しいとお思いになって、

帝「手を緩めるつもりはない」と言って、連れて行こうとすると、

カヤ姫「私の身は、この国に生れておりますれば、お召し使いなさるのも良いでしょうが、

そうではありませんので、非常に連れておいでになり難くございましょう」と言う。

帝「どうしてそんなことがあろうか。やはり連れて行く」と言って、袖を引くと、カヤ姫は着物を残し姿が影になってしまった。

(カヤ姫は帝が握っている着物を脱ぎ、奥へと逃げ去ったのでした)

帝「それでは、連れて行くことはしない。美しいお姿を見ることができただけで帰ろう」

帝は、やはり姫の素晴らしく美しい姿と思うこと、想いが抑えられない。

このように会わせてくれたジジの配慮を称賛なさる。

さて、ジジは帝にお仕えしている多くの役人に盛大な宴会を催す。

帝は、カヤ姫を残して帰ることに、非常に残念に思われ、魂を残した気持ちで帰られた。

それからというもの、帝はいつもお仕えする女たちをご覧になっても、ついカヤ姫と比較してしまうのでした、他の女よりは清らかで美しいと思えた人が、カヤ姫に比べて、人並とも思えず。カヤ姫だけが、心にかかって、ひたすらお一人でお暮らなさる。

理由なく、ご婦人方の所にも、お通いにならない。

帝は毎日のようにカヤ姫へ恋文をお送りになる。カヤ姫も返しの文をお返しになる。

このように、お互いの心が通ううちに3年が経ちました。

### 3-4:ダ～ヤたちの『紀元前版Mission Impossible(ミッション・インポッシブル)』

そんな、ある日のこと、消息を絶っていたクッチがカヤ姫の家に訪れてきたのでした。

チコとブッキとフックはクッチとの再会に涙して喜んだのでした。

クッチ「徐福様と共に、あちこちを巡り歩いたけれども、不老不死の木を求めることは叶わず、

徐福様もカヤ姫達が心配で、私を使いに出されたのです」と。

クッチ「堺の港に戻りましたところ、町は様変わりをしており、皆さんの行方も分からず、ずいぶんとお探し申しました。」

ダ～ヤがことの成り行きをクッチに話す。

クッチ「皆さまも大変なご苦勞がありましたのですね、この地を理想郷とするのは難しいですね」

皆は「私たちの理想郷を探し求めて、更に、徐福様を案内人として旅に出よう」とまとまりました。

そして、カヤ姫の生れ故郷である月氏国のような環境へ戻るための計画をブッキが中心となって進めました。それぞれが準備に入りました。

船の改修工事は、人々に気付かれないように、離れた場所を選び(現在の泉州貝塚近くの河口)付近で進めた。フックは外海を漕ぎだせる船に改造し、チコは多くの青銅の鏡を作ります。

それから、基地に紙すき職人を集めて、軽くて丈夫な熱気球に使う紙を作りました。

また、皆でカヤ姫を都から港まで連れ出す為の馬車を作りました。

ダ～ヤはテレパシーを使って、馬車を引く為の多くの野生馬を集めました。

クッチは徐福様との連絡役に奔走し、徐福様の天球箱によって、決行日を8月15日の満月の夜と決めた、この日に月食が起きると予測された。決行ひと月前には合流する段取りを取りました。



図6:天球箱の目盛(インターネット公開写真より)

●まるで、紀元前版のMission Impossible(ミッション・インポッシブル)である。

…米国TV版のピーター・グレイブス や 映画版のトム・クルーズ が出てきそうな…

春の初めから、カヤ姫は月が出ている夜は、いつもよりも思いにふけっている様子であった。人のいない間にも月を見ては、ひどくお泣きになる。

召使いどもがジジに告げて申します。

召使い「カヤ姫はいつも月をしみじみと眺めていらっしゃいますが、この頃になっては、ただごとではないように見えます。ひどくお嘆きになることがあるのでしょうか。よくよく注意して見てあげてください」と。

ジジが気になって、カヤ姫に言うことには……

ジジ「どのような気持ちができるので、このように物思いに沈んだ様子で月をご覧になるのですか。すがすがしい夜なのに」

カヤ姫「月を見ると、世の中が心細くしみじみといたします。嘆いているのではありません」

ジジがカヤ姫のいる部屋を訪れるとやはり思案しているようなので……

ジジ「私の大切な子よ、何事を考えているのですか。考えていらっしゃることはどんなことですか」

カヤ姫「考えていることもありません。何となく心細く感じられるのです」

ジジ「月をご覧なさいますな。これをご覧になると、物思いをなさる様子がありますよ」

カヤ姫「どうして月を見ないではいられましょうか」と言って、

やはり、月が出ると、家の端に出て座っては、ため息をついて考えている。

夕闇の頃には、まだ、思い悩んでいない様子である。しかし、月の出る頃になってしまうと、

やはり、時々はため息をつき、泣いたりする。

この様子を、召使いどもは「やはり何かお考えになることがあるのだろう」と話すけれど、

ジジ・ババをはじめとして、どういうことなのか分からない。

8月10日頃の夜に、カヤ姫は家の端に出て座り、とてもひどくお泣きになる。

人目も今でははばからず、お泣きになる。これを見て「どうしたことか」と騒ぎ立てて尋ねる。

カヤ姫「前々からも申し上げようと思いましたが、きっとお心を乱しなさるだろうと思って、

今まで過ごしてきたのでございます。しかし、もはや、そうばかりしていただけないと思って、打ち明けてしまうのです。私の身は、この国の人ではありません。月氏の都の者です。それを前世の因縁があったことによって、この国へ参りました。

今は帰るべき時になってしまいましたので、この月の15日に、あの本国から、迎えに人々がやってくることでしょう。どうしてもお別れしなければならないので、お嘆きなさるのが悲しくて、そのことをこの春から思い嘆いているのでございます」

ジジ「これは、何んということをおっしゃるのですか。竹の中からお見つけ申したが、最初は

小さな赤子でいらっしゃったが、今や私の背丈と並ぶほどにお育て申した我が子を、誰がお迎え申せましょう。絶対に許さない」と言って「私こそ死ねばよい」と泣きわめく。

カヤ姫「月氏の都の人として、父母がいます。少しの間といって、あの国からやって参りましたがこのように、この国では多くの年月を過ごしてしまったのです。あの国の父母のことも覚えていません。ここでは、こんなに長い間楽しませていただいて、感謝しております。戻ったら、嬉しい気持ちもしません。ただ悲しいだけです。けれど、自分の思いどおりにならず、お別れすることになるでしょう」と言って、一緒にひどく泣く。

召使いも長年親しくして、別れてしまうことを悲しみ、カヤ姫の性格が上品で可愛らしかったことを見慣れていて、いなくなったときの恋しいことが耐え難く、水も飲めず、皆と同じ気持ちで嘆かわしく思うのであった。

このことを、帝がお聞きになって、ジジに使者を派遣なさる。

使者「『たいへん気の毒に思い悩んでいるというのは、本当なのか』と帝が心配なさっている」  
ジジ「この15日に月の都から、カヤ姫を迎えにやって来るそうです。畏れ多くもお尋ね  
くださいました。この15日は、警護の人々を派遣していただいて、月の都の人がやって  
参りましたならば、捕らえさせましょう」と申す。

使者が戻って、ジジの様子を帝に申し上げると、

帝「一目見ただけで、忘れられなくなる我が心なのに、長年、明けても暮れても、見慣れている  
カヤ姫を手放して、どのように思うことであろうか」と

その15日、帝は各役所に命じて、合わせて2000人の人を、ジジの館に派遣なさる。

土塀の上に1000人、屋根の上に1000人、屋敷の人々も、弓矢を手に開いている隙間もなく守らせる。家の中では、召使いらに番として守らせる。

ババはカヤ姫の部屋で姫を抱いている。ジジも部屋の戸を閉めて、戸口にいる。

ジジ「これほどに守る所で、天人にも負けるはずがない」と、更に屋根の上にいる人々に

ジジ「少しでも、何者かが空を飛んだならば、すぐに射殺してください」と。

守る人々「これほどまでして守るのです、こうも一匹でもいたら、まず射殺して、追い払って  
見せましょう」と。

ジジはこれを聞いて頼もしがっている。

カヤ姫「私を閉じ込めて、守り戦うとしても、あの国の人を敵として戦うことはできないのです。

弓矢で射ることはできないでしょう。このように閉じ込めていても、あの国の人が来たら、  
みな開いてしまうでしょう。合戦を挑もうとしても、あの国の人が来たならば、勇猛心を  
起こす人も、よもやありますまい」

ジジ「迎えに来る人を、長い爪で眼球を掴んで潰そう。そいつの髪を取って、引きずり落とそう。  
そいつの尻を引っかき出し、多くの役人に見せて、恥をかかせよう」と腹を立てている。

カヤ姫「大声でおっしゃいますな。屋根の上におる人々が聞くと、ひどくみっともないことです。

これまでかけていただいた多くの愛情をわきまえもしないで、お別れを申し上げることが、  
悔しく存じます。長い宿命的な縁とはならず、間もなくお別れしなければならないと思って、  
悲しく思います。ジジ様ババ様のお世話を少しも致さず、月氏へ帰る道中も心安らかで  
ないでしょうから、近頃、縁側に出ていて、今年限りの猶予を申し出たのですが、  
決して許されないために、このように思い嘆いているのでございます。

お心ばかりを困惑させて去ってしまうことが、悲しく耐え難く思います。

あの月氏の都の人は、大変美しく、年を取りません。思い悩むこともないのでございます。  
そのような所に帰りましても、望ましくございません。

老い衰えていらっしゃる様子を見て差し上げられないことこそ、恋しく思われるでしょう」

ジジ「胸が痛くなることをおっしゃらないでください。端正な姿をした使者にも、妨げられまい」と、  
いまいましく思っている。

こうしているうちに、宵も過ぎて、夜になり満月の月が出た。  
家のあたりが、満月の明るさを十倍したぐらいで、そこにいる人の毛穴さえ見えるほどである。  
※これは、チコが作った大量の青銅の鏡を使って、満月の光を反射させて、明るくさせたのです

大空から、大小さまざまな、たくさんの赤い光の玉が漂って来る。  
(これは徐福とブッキのアイデアで赤色の熱気球を漂わせているのです)



…ちょうど、この時に合わせるように月食が始まったのでした…

屋根の上に居た警護の人々は不安と恐怖のために、ことごとく屋根から下りてしまった。  
家の内外にいる人の心は、魔物に取りつかれたようで、一緒に戦おうとする気持ちもなかった。  
ようやく奮起して、弓矢を取ろうとするけれども、手に力もなくなって、ぐったりと物に寄りかかっている者の中で、気丈な者が、我慢して、矢を射ようとするけれども、他の方向へ行ったので、  
激しく戦わないで、気持がただぼんやりするばかりで、見つめ合っている。  
※これは、ダ～ヤのテレパシーによって人々を集団睡眠状態にして、ただぼんやりと佇んでいる

ひととき大きな熱気球が山影から館の上に現れ、降りてきて、館の上に漂っています。  
人々はその熱気球を、あぐりと上空に見とれているのでした。

山から数千頭もの野生馬の大群が館になだれ込んで押し寄せ、警護の人々を困惑させている。  
いつの間にか、人々が訳が分からないうちに庭先に馬車が止まっている。

その馬車の中から、天人と思われる者が、家に向かって、「ジジよ、出て来い」と言うと、  
あれほど強気であったジジも、何かに酔ったような気持がして、うつ伏せに伏せている。  
※天人は徐福が演じている。ダ～ヤのテレパシーの効果とクッチの熱気球に氣を取られ、  
野生馬の大群にまぎれて、馬車を密かに庭先に運び入れたのでした

天人「お前、未熟者。少しばかりの功德をお前が作ったことで、お前の助けにしようとして、  
ほんの僅かな間ということで、カヤ姫を下したが、長年の間、多くの黄金を得て、別人の  
ように富裕となった。カヤ姫は罪を犯しておられたので、このように身分の低いお前らの  
もとに、しばらくいらっしまったのだ。罪の期限が終わってしまったので、このように迎えに  
来たのに、お前は泣いて嘆く。これ以上、カヤ姫と共に暮らすのは不可能なことだ。  
早くお返し申せ」と。

ジジ「カヤ姫を養い申し上げること、20年余りになりました。それを、少しの間とおっしゃるので  
訳が分からなくなりました。また別の所に、カヤ姫と申す人がおいでになるのでしょうか」と。

ジジ「ここにいらっしゃるカヤ姫は、重い病気をなさっているのです、とても出ていらっしゃれないでしょう」

天人「さあ、カヤ姫。どうしてそんな隠れた所に、いらっしゃるのですか」と。

閉じ込めていた場所の戸が即座に、開いてしまった。格子戸も、人がいなくても開いてしまった。  
※これは、館に野生馬がなだれ込んだ時に、チコが細工してあった、戸の鍵を外したのでした

ババが必死で姫を抱いて隠していたが、閉じていた戸が開いてしまい、外に出てしまった。  
ジジは引き止めることが出来そうもないので、ただ仰ぎ見て泣いている。

カヤ姫はジジが泣き伏している所に近寄って、

カヤ姫「私も、心ならずも、こうしてお別れするのですから、せめて天に昇るところだけでも、見送ってくださいませ」

ジジ「どうして、悲しいのに、お見送り出来ましょう。私を捨てて天にお昇りになるのですか。一緒に連れて行って下さい」と泣いて伏せているので、

カヤ姫「手紙を残してお別れしましょう。恋しく思われる時々に、取り出してご覧ください」と。

カヤ姫は「この国に生まれたというのならば、お二人を嘆かせない時期まで、お側にいるべきですが、月の者である私は、本国へ帰るために、お別れしてしまうことは、返す返す不本意に思われます。脱いで置衣着物を形見としてご覧ください。月の出ているような夜は、こちらをご覧ください。お見捨てして去って行く空から落ちてしまいそうな気がします」と手紙に書いた。

天人「中に持たせてある箱がある。そこにはカヤ姫のための天の羽衣が入っている。

もう一つの箱には、不老不死の薬が入っている」と

天人「壺にあるお薬を召し上がれ。汚い場所の物を召し上がっていたので、ご気分が悪いはず」と言って、薬を飲まそうとする。

カヤ姫「しばらく待て」と言う。

カヤ姫「天の羽衣を着せられた人は、心が普通の人とは違ってしまうのだという。一言、言っておかねばならないことがあった」と。

天人「遅い」と、じれったく思っているらしい。

カヤ姫「訳の分からないことをどうかおっしゃらないで」と、

たいそう物静かに、帝に手紙を差し上げなされる。あわてていない様子である。



カヤ姫は「このように大勢の人をお遣わしくださって、引き留めなさいますけれど、それを許さない迎えがやって来て、連れて行ってしまいますので、残念で悲しいことでございます。宮仕え申し上げなくなってしまったのも、このように面倒な身でございますので、帝は納得いかないとお思いでしょうけれども、私が強情に承知申し上げますのでしたことを、帝が無礼な者と思い留めなさってしまわれるであろうことが、気がかりでございます」と手紙に書いて、

これまでと違って、警護の将を呼び寄せ、壺の薬を添えて帝に献上するように申しつける。天人が取り次いで手紙と壺を手渡す。  
さっと天の羽衣をお着せになると、馬車の中へ入られた。

すると、たくさんの熱気球が、また天に向かって空高く、昇って行く。人々は驚き、また、野生馬の群れがまたなだれ込んで来て、人々が熱気球の光と馬に困惑している間に、馬車も消え去ってしまったのでした。



…やがて、月食が終わり、元の満月が戻った…

カヤ姫とダ～ヤ、徐福、ブッキたちを乗せた野生馬が引く馬車は真夜中の道を夜眼の効くダ～ヤの指示によって無事にフックの待つ港に着いた。(現在の大和川の河口に船を停泊させていた)

おっと、チコとクッチは…熱気球を飛ばしていたので、後から野生馬に乗って、夜明け前になってしまったけれど、誰にも気付かれずに合流することが出来たのでした。  
フックが補強した船に乗って、理想郷を目指して、さあ出航だ。

船の舳先にチコが立ち、傍らには、ブッキとクッチたち、船尾で舵を取るのはフック  
方士の徐福様、それにカヤ姫とダ～ヤ…と、仲間たち、それと…みんなの笑顔…

紀伊水道を経て、太平洋の大海原へ…

それから、どの方向へ帆を進めたのかは定かではありません…

東に向かって…現在の北アメリカ大陸に到達したのか？

北に向かって…現在の北海道～シベリアへと渡ったのか？

西へ向かって…元の中国の地へと戻ったのか？

南へ向かって…現在のフィリピンからパプアニューギニアに渡ったのか？

これで、紀元前版のMission Impossible(ミッション・インポッシブル)はお終いです。

・・・残されたジジとババ・・・

その後、ジジとババは血の涙を流して思い悩んだが、どうしようもない。  
館に使える者が、あの書き残した手紙を読んで聞かせるけれども、  
「何んの慰めになろうか、命も要らぬ。誰の為にか。何事も無用だ」と言って、  
薬も飲まず、そのまま起き上がりもしないで、病気になって伏せている。

警護の将は人々を引き連れて宮中に戻り、カヤ姫を戦って引き止めることが出来なかった  
事態を、こと細かに帝に報告をし、壺の薬とお手紙を添えて献上した。

帝はご覧になって、ひどく感動なさって、食べ物も召し上がられず、管弦の御遊びなども  
行われなかった。

帝は大臣や近従をお呼びになって「どの山が天に近いか」と質問なさる。

ある人が答えて「駿河の国にあるという山が、この都も近く、天にも近うございます」と。

帝「カヤ姫に逢うこともなく、悲しみに涙に浮ぶ我が身には、不死の薬も何の役にも立たない」  
と言って、カヤ姫が献上した不老不死の薬に、壺を添えて、使者に渡された。

使者に駿河の国にあるという山の頂上に持って行くように、と命じられた。

そして、その山頂ですべき方法（「手紙と不老不死の薬の壺を並べて、火をつけて燃やせ」と）  
を、お教えになる。

その方法を承って、兵士どもを多数引き連れて山へ登ってから以降、その山を「フジの山」と  
名付けたのである。その煙は、いまだに雲の中に立ち昇ると言い伝えている。

この結末は、平安時代に描かれたストーリーなので、紀元前2世紀頃にこのような物語の「落ち」  
とは考えられないのですが・・・

徐福が探し求めていた不老不死の実が成る仙人の住む山・・・

「不老不死の実が成る山」→「不老不死の山」→「不死の山」→「フジの山」→「富士の山」？

かどうかは定かではありませんが、どうやら違っていたようですね。

#### (4):その後

●この逃避航のお話は秦始皇帝の死後、秦→前漢→新→後漢→三国志時代と政権争いが続き、徐福伝説のことは忘れ去られる。

…延々と続けられる権力争い…その正当性を書き記した、数々の書籍…

この地においても、時の政権による日本書紀・古事記も編纂されたが、徐福伝説については歴史上からは封印されてしまった。

#### ダーク・エネルギーの世界

…ダ～ヤの霊は目覚め…

…確かに見覚えのある場所…広～い空間の中に…実体の存在しない…霊が、ポツンと無重力の宇宙空間を漂う水滴(実際的には質量を持たないエネルギーのかたまり?)のように浮かんでいる。

阿弥陀如来と普賢菩薩がほほ笑みながら「ダ～ヤよ、如何でしたか？」

ダ～ヤ「私はカヤ姫にお仕えし、人々にお世話になり、また、人々を癒し、自身も癒されました」

「これで、私の修行はよろしかったのでしょうか？」

普賢菩薩「価値があったのか？無かったのか？それはダ～ヤが感じ慧得することなのです。

ダ～ヤの導きによって、悟りを得た人々を迎える用意をしておきましょう」

阿弥陀如来「次の修行に赴きますか？」

ダ～ヤ「はい」

阿弥陀如来「普賢菩薩よ、ダ～ヤを次の修行へと導いてください」

ダ～ヤ「普賢菩薩様、今度は何処へ赴くのでしょうか？」

普賢菩薩「ダ～ヤよ、次に赴くところは時代も異なるので、そなたの記憶と能力をクリアします」

「新たな修行に出るが良い」

ダ～ヤ「はい」

著者「次のダ～ヤの修行先は、読者のあなたのすぐ傍かもしれませんね」

「どんな物語が始まるのでしょうか…」

「近くに猫ちゃんが箱座りしていたら、あなたのテレパシーを使って、呼びかけてください」

「あなたの戒名は？」って

## (5):ダ～ヤから読者の皆さんへ、メッセージ

ダ～ヤの霊「戒名：賢苗院陀弥安仔」は阿弥陀如来様にお仕えし、ず～とあなたを見てきました。

21世紀の現代においても、同じ事がいえるのです。歴史は繰り返される。

宇宙進出に意欲を示すアメリカ・ロシア・EU・中国・インド・韓国そして日本など・・・

自分以外への命の存在を確認もせずに、富を求めて侵略して行く、人の欲というのは、何千年も昔から現代まで、進歩せずに、ず～っと変わっていないのです・・・。

また、現代から未来を見ると、永遠の生命を求めて、脳の冷凍保存や、脳科学の再生研究から、論理的に個人を再生することが可能となるまで、研究が進められている・・・

これらもまた、人間が永遠に生き続けることに対する願望・欲であり、自然の摂理に逆らってまで、宇宙への支配を進める人間の煩悩を表わしているではないでしょうか・・・

・・・「諸行無常」・・・「栄枯盛衰」・・・永遠の反映や永遠の命などは有り得ないですよ。

「温故知新」・・・古代イスラエル人の教訓、そして朝鮮民族と日本民族・・・

21世紀の現在、同じ民主主義国家となった日本と大韓民国ではあるが・・・  
隣国ながら、互いに異なる国民感情を持つ・・・

元を辿れば・・・紀元前2世紀に、  
同じ志しを持って平和を求め、それぞれの理想郷へ旅立った仲間たちの子孫でしょうに・・・

愚かな人間達によって、同じ過ちの歴史を繰り返されぬようにお祈り申し上げます・・・。

読者の傍らに寝そべっている猫ちゃんたち・・・、ひょっとしたらダ～ヤの生れ変わりかも・・・  
猫ちゃんたちは、テレパシーで読者の心から読みものを覗き見しているのでしょうか・・・

猫ちゃんのあなたを呼び掛ける声に気付いたら、猫ちゃんの心を受け止めてやってくださいね・・・  
もしも、初めて会った猫ちゃんに「ダ～ヤ」の名前があなたの脳裏に浮かんだのなら・・・  
それは、きっと「賢苗院陀弥安仔」かもしれませんね！

「おしまいです(ニャ～)」

## 参考資料

### ●①「古代イスラエルの歴史」と「失われた古代イスラエルの十支族」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A4%E3%82%B9%E3%83%A9%E3%82%A8%E3%83%AB%E3%81%AE%E5%A4%B1%E3%82%8F%E3%82%8C%E3%81%9F10%E6%94%AF%E6%97%8F%E5.8F.A4.E4.BB.A3.E3.82.A4.E3.82.B9.E3.83.A9.E3.82.A8.E3.83.AB.E3.81.AE.E6.AD.B4.E5.8F.B2>

## ※古代イスラエルの歴史

『聖書』によると、族長アブラハム（紀元前 17 世紀？）がメソポタミアのウルの地からカナンの地を目指して出発したことによりイスラエルの歴史がはじまる。孫のヤコブ（ヤアコブ）の時代にエジプトに移住するが、子孫はやがてエジプト人の奴隷となる。奴隷の時代が 400 年程続いた後にモーセ（モーゼ）が民族をエジプトから連れ出し（紀元前 13 世紀？）、シナイ半島を 40 年間放浪し定住を始めた。200 年程かけて一帯を征服して行く。

ダビデ王（紀元前 1004 年?-紀元前 965 年?）の時代に統一イスラエル王国として 12 部族がひとつにされる。次のソロモン王（紀元前 965 年?-紀元前 930 年?）は、安定した政治基盤を背景に強権的となり、『列王記』や『歴代誌』によると彼の代で厳しい苦役や重いくびきが強いられたとされる。ソロモンの死後、息子のレハバムが王位についたとき、民はそれらの軽減を訴えたところレハバムは断り、さらに厳しくすると答えたため北部の部族は離反し、エジプトに追放されていたソロモンの家来ヤロブアムを呼び戻して王とし、元の王国名を引き継いだ北王国（イスラエル）を立て、シェケムを再興して都とした。都は後にシェケムからティルツァ、サマリアと移り変わった。

これによってイスラエルは北王国と、王を輩出してきたユダ族ならびにダビデの王権樹立に協力したベニヤミン族の南王国（ユダ王国）に分裂した。ユダ王国の都は旧王国の都だったエルサレムにあった。北王国では南中部のベテルと最北部のダンに、金の子牛の像をおいて王国の祭祀の拠り所としていたとされる。これは子牛を崇拝したのではなくエロヒムの台座として置かれたものであるとされる。

当時のイスラエル民族は、現在のユダヤ人のような一神教的宗教を奉じていなかった。ソロモン王も特に晩年になるほど、『列王記上』11:4-8 にあるアスタルテ、ミルコム、ケモシュ、モロクなどへの信仰を顕わにしたとされている（ただし、列王記にはダビデは熱心な一神教崇拝だったとある）。学問的にはサマリアのエロヒム信仰のみならず、エルサレムのヤハウェ信仰も多神教の一種（拝一神教、単一神教）だったと考えられている。

北王国は紀元前 722 年に同じセム語系民族であるアッシリアにより滅ぼされ、10 部族のうち指導者層は虜囚としてアッシリアに連行された（アッシリア捕囚）。サルゴン王の碑文によると虜囚の数は 2 万 7290 人で、北王国滅亡直前の段階の北王国の全人口の約 20 分の 1 程度と推定されているが、

その行方が文書に残されていないため、南王国の2支族によって「失われた10支族」と呼ばれた。広義には捕囚とならなかった北王国の住民を含んでいう場合がある。

捕囚とならなかった旧北王国の住民は、統制を失って他の周辺諸民族の中に埋没し、次第に10部族としてのアイデンティティを失ったといわれ、周辺の異民族や、[アッシリア](#)によって他地域から旧北王国に強制移住させられてきた異民族と通婚し混血することもあった。[サマリア](#)には[ゲリジム山](#)を中心に、後世に独自に発達した[ユダヤ教](#)と一部を共有する古来の祭祀が残存し、[サマリア人](#)としてユダヤ人と異なる文化とアイデンティティを保ち続け、現在に至っている。

南王国の[ユダ](#)は、[紀元前 586 年](#)にセム語系民族の[新バビロニア](#)に滅ぼされた。指導者層は[バビロン](#)などへ連行され虜囚となったが([バビロン捕囚](#))、宗教的な繋がりを強め、失ったエルサレムの町と神殿の代わりに律法を心のよりどころとし、宗教的・文化的な[アイデンティティ](#)を確保するために異民族との通婚を嫌う声も強くなり、異民族と結婚したものをユダヤ人のコミュニティから排除する排他的な純血至上主義が信奉されるようになった。

彼らは[イラン語系民族](#)の[アケメネス朝ペルシア](#)によって解放され、[イスラエル](#)に帰還した。解放後、ユダヤ人と解放者である[ペルシア帝国](#)は良好な関係を継続し、[エルサレム神殿](#)も復興された。ペルシア人はその支配下にあるすべての民族の宗教を平等に扱ったため、同様の恩恵は[サマリア人](#)も受けていたと考えられるが、[ユダヤ人](#)はその純血主義によって[サマリア人](#)を異民族との混血と蔑み、北王国の末裔と認めず、祭祀を異にする点からも異教徒として扱う等、南北両王国時代の対立を民族的偏見として引き継ぐ形となった。

ペルシア帝国が[アレクサンダー大王](#)によって滅ぼされ、[ヘレニズム時代](#)が開幕すると、ユダヤ人はアレクサンダー大王やその後継者であるギリシア人政権と激しく対立していった様子が旧約聖書[外典](#)等にみえる。バビロン捕囚時代・ペルシア時代・ヘレニズム時代の3つの時代を通じて、ユダヤ民族としての独自性を保つための基礎が作られ、宗教としての[ユダヤ教](#)が確立した。

ハスモン朝の時代にかけてはローマと同盟を結んだこともあり、ユダ王国の領土は拡大し、エドム地方なども含まれるようになり、制圧地域のエドム人もユダヤ教の布教が行われてユダヤ人に同化され、後にそこからヘロデがユダヤの王の座に就くほどまでになったが、彼の死後王位の後継者が定まらず、一度は息子達によって分割統治するも、サマリア・ユダヤ・イドメア地区では領主のアルケオラスが統治を失敗し[ローマ帝国](#)の直轄支配による[ユダヤ属州](#)が置かれた。「ユダヤ」の名はユダ(綴りは英語などではJudaだがラテン語ではIuda)にラテン語の地名としての語尾変化「ea」がつき「ユダエア(Iudaea)」となったもの、同様に「エドム(Edom)→イドメア(Edomea)」となった。

研究者のなかには、2世紀初頭の[バル・コクバの乱](#)で[ローマ帝国](#)によってパレスチナからユダヤ色が一掃された後も、サマリア人の大部分とユダヤ人の一部はこの地に残り、のちに[イスラム教](#)に改宗し、現在の[パレスチナ人](#)の遠祖となったと指摘するものがある。一方、いわゆる[シオニズム](#)を支持する学者の一部は、こうした指摘を否定している。ユダヤ人はのちに商人的な性格を強くし、[商業](#)を営みつつ世界に広がっていくことになる。

## ※古代イスラエルの失われた 10 支族

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A4%E3%82%B9%E3%83%A9%E3%82%A8%E3%83%AB%E3%81%AE%E5%A4%B1%E3%82%8F%E3%82%8C%E3%81%9F10%E6%94%AF%E6%97%8F>

1. [ルベン族](#)
2. [シメオン族](#)
3. [ダン族](#)
4. [ナフタリ族](#)
5. [ガド族](#) ([日ユ同祖論](#))
6. [アシェル族](#)
7. [イッサカル族](#) ([日ユ同祖論](#))
8. [ゼブルン族](#)
9. [ヨセフ族](#)
  1. [エフライム族](#) ([日ユ同祖論](#))
  2. [マナセ族](#)

失われた 10 支族とは、上記のうち[ユダヤ民族](#)の直系の祖の[ユダ族](#)・[ベニヤミン族](#)・[レビ族](#)を除いたものをいう。南王国ユダの 2 支族とは[ユダ族](#)・[ベニヤミン族](#)で、これに[レビ族](#)を加えた 3 部族が[ユダヤ民族](#)の直系の祖となったとされる。実際には南王国には 2 部族でなく 3 部族が存在したわけだが、上記の通り[レビ族](#)は数えないのが慣例であるため「2 部族」と呼び習わしている。

ただし『歴代誌』によるとバビロン捕囚から帰還の時点で[エフライム](#)や[マナッセ](#)の各部族は残存しており、[エルサレム](#)に住み着いたという。彼らの系譜は書かれていないが、同書の下巻にユダが[アサ](#)王統治下の頃、「[ユダ](#)と[ベニヤミン](#)のすべて、および彼らとともに住んでいた[エフライム](#)と[マナセ](#)と[シメオン](#)の人々」というくだりがあるので、この頃にはすでに[ユダ](#)に上記の 2 部族と[シメオン族](#)もいたということになる。なお、バビロン捕囚から帰還後は、多数派の[ユダ族](#)と祭司としての役目を任された[レビ族](#)以外は各部族としてのアイデンティティを失い、[ユダ族](#)に同化されたらしく、これ以後は「[ユダヤ人](#)」、「[レビ人](#)」という言い方は残っているが他の部族の呼称が出てこなくなる。

なお、『列王記』では南北分裂のきっかけになったとされる預言者アヒヤの「あなた([ヤロブアム](#))に 10 部族を与えよう。彼は(中略)1 つの部族をもつであろう。」「その 10 部族をあなた([ヤロブアム](#))に与える。その子には 1 つの部族を与えて」という説明や、同書の第 12 章第 20 行でも「[ユダ](#)の部族のほかは[ダビデ](#)の家に従う者がなかった」という説明のくだりから、そもそも分裂は「10 と 2」ではなく「10 と 1」であったことが分かる。



## ※失われた 10 支族の行方

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A4%E3%82%B9%E3%83%A9%E3%82%A8%E3%83%AB%E3%81%AE%E5%A4%B1%E3%82%8F%E3%82%8C%E3%81%9F10%E6%94%AF%E6%97%8F#.E5.A4.B1.E3.82.8F.E3.82.8C.E3.81.9F10.E6.94.AF.E6.97.8F.E3.81.AE.E8.A1.8C.E6.96.B9>

以下に挙げる 4 説は伝承または仮説として立てられたもののうち、[イスラエル](#)政府によって比較的有望とされた説であるが必ずしも 10 支族だけを問題とした説ではない。また、いずれも通説には至っていない。

- 一部は[アフガニスタン](#)に。[パシュトゥーン人](#)には、[ヨセフ族](#) ([エフライム族](#) + [マナセ族](#)) の末裔という伝承をもつ部族がいる。10 支族は [メディア](#) (今のイラン) を経由して東に逃れたという説があり、その地は [スキタイ](#) 人と同系の [サカ](#) 族または [月氏族](#) が居住し、現在の [アフガニスタン](#) の一部を含むものであった。
- 一部は[エチオピア](#) に。[イエメン](#) を経由して、[ヨセフ族](#) ([マナセ族](#)、[エフライム族](#)) が [アフリカ](#) に入ったもの。[イスラエル](#) 建国後に [エチオピア](#) から相当数が移住したが、それ以前には多くの [ユダヤ](#) 人が居住していた。
- 一部は[中国](#) に。宋代まで [開封](#) には [ユダヤ人](#) の街が存在した。また中国の [回族](#) のうち、かなりの部分が古代 [ユダヤ人](#) の末裔が改宗したものではないかという説もある。
- 一部は[日本](#) に。詳しくは、[日ユ同祖論](#) を参照。大陸からの帰化氏族である [秦氏](#) が [古代イスラエル人](#) の失われた 10 支族ではないかという説。一時は国際的にも有名だった説である。一般によく認識されている [ユダヤ民族](#) の祖は、第 4 族 [ユダ族](#) と第 12 族 [ベニヤミン族](#) に第 3 族 [レビ族](#) を加えた、[古代イスラエル](#) の 12 支族のうちの 3 部族のみであり、失われた 10 支族から省かれる。失われた 10 支族のうち、第 9 族 [エフライム族](#)、第 5 族 [ガド族](#)、または第 7 族 [イッサカル族](#) の数人が日本に、移住したという説がある。



## ●②秦の始皇帝陵と万里の長城

同じ頃、秦の始皇帝(王政)が中国春秋戦国時代の覇者となり、広大な領土を手中にした。下図は彼の死後も中国の覇者であり続けることを願っての、彼を守る兵馬俑。

図7: 秦の始皇帝陵 兵馬俑 (<http://www.arachina.com/xian/attraction/shdl.htm>)



図8: 万里の長城 (<http://www.arachina.com/culture/greatwall/>)



政権争いに、翻弄され、戦のために苦役を強いられた民の逃避行もあったはず・・・  
(・・・どれほど多くの民が構築に携わり、苦役を強いられたのだろうか・・・)

### ●③月氏の国・楼蘭

楼蘭と呼ばれる都市、またその名を持つ国家がいつ、どのようにして成立したのかは定かではない。

文献史料に楼蘭の名が現れるのは『[史記](#)』匈奴列伝に収録された手紙の中で触れられているのが最初（[紀元前 2 世紀](#)）であり、その間の歴史は空白である。

その手紙は匈奴の君主である冒頓单于が前漢の文帝に宛てて送ったもので、この中で冒頓单于是月氏に対して勝利し、楼蘭、烏孫、呼揭及び近隣の 26 国を平定したと宣言している。この手紙は文帝の 4 年（[紀元前 176 年](#)）に送られたものであるため、楼蘭は少なくとも紀元前 176 年以前に形成され、月氏の勢力圏にあったこと。そして紀元前 176 年頃匈奴の支配下に入ったことが推定されています。

### ●④「タミル語」と「日本語」に共通する発音の特徴

ここで、ちょっと歴史から逸れますが、「タミル語」と「日本語」に共通する特徴について、インターネット検索で記事がありましたので、拾い集めて見ました。

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%BF%E3%83%9F%E3%83%AB%E8%AA%9E>

- ・母音字は五母音（日本語の「あいうえお」と同じ）の共通な要素を持っている。

| 母音字                                                    | அ   | ஆ    | இ   | ஈ    | உ        | ஊ    | எ   | ஏ    | ஐ    | ஓ   | ஔ    | ஒள   |
|--------------------------------------------------------|-----|------|-----|------|----------|------|-----|------|------|-----|------|------|
| 音価（ <a href="#">ISO 15919</a> （ <a href="#">英語版</a> ）） | a   | ā    | i   | ī    | u        | ū    | e   | ē    | ai   | o   | ō    | au   |
| <a href="#">IPA</a>                                    | [ʌ] | [a:] | [i] | [i:] | [u], [ɯ] | [u:] | [e] | [e:] | [ʌj] | [o] | [o:] | [ʌu] |

- ・子音字（上記の母音単独で用いる文字のほか、子音字に結合する母音記号があります）

| 子音字                 | க                             | ங   | ச                              | ஞ   | ட                      | ண    | த                      | ந    | ப                      | ம    |
|---------------------|-------------------------------|-----|--------------------------------|-----|------------------------|------|------------------------|------|------------------------|------|
| 音価（ISO 15919）       | k                             | ṅ   | c                              | ñ   | ṭ                      | ṇ    | t                      | n    | p                      | m    |
| <a href="#">IPA</a> | [k], [g],<br>[x], [ɣ],<br>[h] | [ŋ] | [tʃ̺], [dʒ̺],<br>[ʃ], [s], [ʒ] | [ɲ] | [t̪],<br>[d̪],<br>[r̪] | [ɳ]  | [t̪̺],<br>[d̪̺], [ɖ̪̺] | [n̪] | [p̪],<br>[b̪],<br>[β̪] | [m̪] |
| 子音字                 | ய                             | ர   | ல                              | வ   | ழ                      | ள    | ற                      | ன    |                        |      |
| 音価（ISO 15919）       | y                             | r   | l                              | v   | ɻ                      | ɭ    | ɾ                      | ɳ    |                        |      |
| IPA                 | [j]                           | [r] | [l]                            | [ʋ] | [ɻ̺]                   | [ɭ̺] | [r̺], [t̺],<br>[d̺]    | [ɳ̺] |                        |      |

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E9%87%8E%E6%99%8B#.E3.82.AF.E3.83.AC.E3.82.AA.E3.83.BC.E3.83.AB.E3.82.BF.E3.83.9F.E3.83.AB.E8.AA.9E.E8.AA.AC>

北インドの多くの言語が三母音（サンスクリット等で母音/半母音として扱われる r や l を除いて）を基礎としており、ヒンディー語等では e, o が常に長母音として扱われる。それに対してタミル語の基本は a, i, u, e, o の五母音であり、それに長短の別と二重母音（ai と au）が加わることで計 12 の母音を区別することになる。

子音は有気音と無気音を区別しない他、有声音（日本語で言う濁音）と無声音（同じく清音または半濁音）の間の対立もない。ただ単語の先頭や同子音が重なった場合に無声音、単語の中途、同系の鼻音の後などに有声音で発音される傾向がある（これらの点は日本語の連濁と相似である）。タミル語で特徴的なのは、日本語で「ラ行」にあたる音、英語を含む西洋語なら r や l の流音に相当する音に、五種の区別が存在することである。

日本語で「ン」にあたる音、鼻音にも 4 種の区別がある。

このうち、l は ɾ・ŋ と互換性があり、その ŋ も ɾ と互換性がある。

朝鮮語・韓国語で音節末の l と語中の r が違う音素であるのに、同一の形態素として扱っているのと対照的である。更に、反り舌の ɭ と l、ɽ と r (/j/ と同じ調音位置) が入れ替わっても意味の変わらない単語がある。ɽ は語中の位置によって /r, t, d/ と三様に発音される（アメリカ英語の t や d が、日本人にはラ行に聞こえるのに似ている）。

また日本語を母語とする者にとって習得が難しいとされるものに、反舌音（舌の先を硬口蓋まで反らせて発音する一連の子音）があるが、こちらは他のインド系言語にも共通する特徴であるとのこと。

※(起源について現代タミル語の発音と日本語の発音に多くの共通点があげられています)

●⑤ぶっちゃけ大乘仏教のイメージ

図9: 大乘仏教の曼荼羅イメージ

ダーク・エネルギーの世界?・・・霊の世界?

全宇宙の時空を超越した創造主「大日如来」・・・

キリスト教でいう「GOD」となりますが、しかし、

大乘仏教の教えの特徴は組織にあるので

(唯一の神ではなく、神にもランクあるという訳で)、

日本に元々あった八百万の神々の思想と一致したので、日本で受け入れられたのだでしょうね。

会社組織でいう「CEO(最高責任者)」が「大日如来」であれば・・・

「釈迦如来」が「この世部門の担当役員」で、「阿弥陀如来」が「あの世部門の担当役員」です。

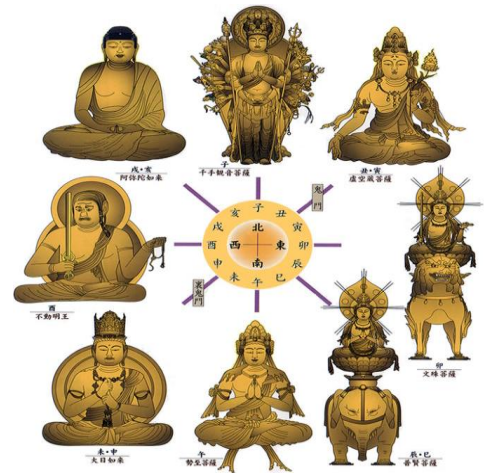
また、悟りの成就によって、過去・現在・未来の三世諸仏が配置されているのですねえ。

この組織図なるものが「曼荼羅」と呼ばれているものなのです。

「CEO」の秘書室長が「虚空蔵菩薩」、調査室長が「観音菩薩」と言ったところでしょうか。

「この世部門の修行アドバイザー」が「普賢菩薩」、あの世部門では「勢至菩薩」ですね。

「この世とあの世との人事部長」が「地蔵菩薩」(閻魔大王)という訳ですかねえ・・・



## ●⑥「エジプト第 19 王朝のラムセス 2 世、ヒッタイトとの戦争逸話」

「エジプト王朝」について・・・インターネット検索「Wikipedia」より紹介

ラムセス 2 世(前 1279 年 - 前 1212 年)には兄がいたが早くに死亡しており、幼い頃より後継者として育てられた。セティ 1 世の死後王位を継承したラムセス 2 世は、エジプト史上最大の建築活動を行った王であり、父が途中でやり残したいくつかの神殿の建設を引き継ぎ、また全国土に渡って大規模建築を残している。

ラムセス 2 世の治世初期は、父王時代と同じく対外遠征が熱心に行われていた。これまでと同様にシリア・パレスチナ方面は最も注意が向けられた地方であった。シリアで勢力を拡張するヒッタイトに対するために、かつてヒクソス(第 15 王朝)が拠点を置いた下エジプト東部の都市アヴァリスを元に、ペル・ラムセス(ラムセス市)を建設し、アジア方面への遠征のための軍事拠点とした。そして数次にわたるアジア遠征を行い、シリア地方に対する支配権回復を目指した。

取り分け有名なのが第 2 回のアジア遠征である。当時エジプトとヒッタイトの勢力争いの最前線となっていたのが北シリアのアムル王国であった。セティ 1 世の時代の一時的な征服の後、結局アムル王国は再びヒッタイトの支配下に入ってしまった。しかしアムル王ベンテシナはヒッタイトの支配を快くは思っておらず、ラムセス 2 世が海沿いにシリア地方へ 2 万あまりの軍を率いて進軍すると、公然とヒッタイトに反抗しはじめた<sup>[2]</sup>。ラムセス 2 世としてはベンテシナの反ヒッタイト活動を支援することで北シリアの支配権を回復することができると踏んでいた。

当時のヒッタイト王ムワタリは、反逆者ベンテシナを打倒しエジプトの北シリアに対する要求を跳ね除けるため、ヒッタイトの宗主権下にあった北シリアの諸王国、ハラブ(アレppo)、ウガリト、カデシュなどの兵力を動員してエジプト軍を迎撃すべくカデシュに展開した。ラムセス 2 世はヒッタイト側が行った情報操作の罠に陥り、進軍した先で敵軍に包囲されたものの彼自身の勇敢さとエジプト軍の奮戦のために敗北を免れた。(カデシュの戦い)

この戦いをエジプト側の記録は大勝利と記すが、実際には戦場においては痛み分けという程度の戦果であり、領土的には北シリアをヒッタイトに抑えられたままで、その奪回はならなかった。戦後間もなくエジプト側についたアムル王ベンテシナが廃されている。

この後もラムセス 2 世はアジア遠征を繰り返したが、大勢は変わらず北シリアに対する支配権回復は終に達成されることがなかった。最終的にラムセス 2 世の治世第 21 年にエジプトとヒッタイトの間には平和同盟条約が結ばれて、エジプトとヒッタイトの長きに渡る戦争に終止符が打たれた。



## ●⑦「英雄アキレウス、トロイア戦争の逸話」

「トロイア戦争」について・・・インターネット検索「Wikipedia」より紹介

紀元前 490 年～480 年頃、[トロイア戦争](#)にアキレウスは、友人[パトロクロス](#)と共に、ミュルミドーン人たちを率いてトロイア戦争に参加していた。ギリシャ勢がトロイア戦争を開始してから十年目、ある事情により、戦利品で愛妾の[ブリーセイス](#)を総大将[アガメムノン](#)に奪われた。理不尽な行為に腹をたてたアキレウスは、それ以降戦いに参加しなくなる。

アキレウス退陣とともに神々の加護を失ったギリシャ勢は、名だたる英雄たちも傷つき総崩れとなり、陣地の中にまで攻め込まれる。( [ゼウス](#) がギリシャ勢に味方する振りをして [イーリオス](#) 勢に味方したため) これを見たパトロクロスは、出陣してギリシャ勢を助けてくれるようアキレウスに頼んだが、アキレウスは首を縦に振らない。そこでパトロクロスはアキレウスの鎧を借り、ミュルミドーン人たちを率いて出陣する。アキレウスの鎧を着たパトロクロスの活躍により、ギリシャ勢はイーリオス勢を押し返す。しかし、パトロクロスはイーリオスの王 [プリアモス](#) の息子で、事実上の総大将である [ヘクトール](#) に討たれ、アキレウスの鎧も奪われてしまう。

パトロクロスの死をアキレウスは深く嘆き、ヘクトールへの復讐のために出陣することを決心する。テティスはアキレウスのために新しい鎧を用意し、アキレウスに授ける。出陣したアキレウスは、イーリオスの名だたる勇士たちを葬り去る。形勢不利と見てイーリオス勢が城内に逃げ去る中、門前に一人、ヘクトールが待ち構える。

ギリシャ勢とイーリオス勢が見守る中、アキレウスとヘクトールの一騎打ちが始まる。アキレウスはヘクトールを追いまわし、ヘクトールは逃げ回ってイーリオスの周りを三度回る。しかし、ついにヘクトールはアキレウスに冷酷な殺し文句と共に討たれる。アキレウスはヘクトールの鎧を剥ぎ、戦車の後ろにつなげて引きずりまわす。復讐を遂げて満足したアキレウスは、さまざまな賞品を賭けてパトロクロスの霊をなぐさめるための競技会を開く。

競技会が終わった後も、アキレウスはヘクトールの遺体を引きずりまわすことをやめない。ヘクトールの父プリアモスはこれを悲しみ、深夜アキレウスのもとを訪れ、息子の遺体を返してくれるように頼む。アキレウスはプリアモスをいたわり、ヘクトールの遺体を返した。

図 10：アキレス像と盾



## ●⑧「ペルシャ帝国建国から衰退の逸話」

「ペルシャ帝国」について・・・インターネット検索「Wikipedia」より紹介

図 11: ペルセポリスのレリーフとペルシャ帝国領域



紀元前 7 世紀後半、ペルシャ人の長でハカーマニシュの息子テイスペス(チャイシュピ)は、アッシリアに圧倒され衰退しつつあったエラム王国の都市アンシャンを征服した。テイスペスの子孫はアンシャンを支配した一族とペルシャに残った一族の二つの系統に分岐した。アッシリアの衰退と共にメディア王アステュアゲス(アルシュティ・ワイガ?)は、バビロニアを除くアッシリア北部の領土をすべて征服した。この時代のペルシャはメディアに服属していた。

紀元前 550 年、アステュアゲスの孫(アステュアゲスの娘マンダネの子)で、メディア人とペルシア人の混血であるアンシャン王キュロス 2 世(クル)は反乱を起こし、メディアの將軍ハルパゴスの助けを得てメディアを滅ぼした。イラン高原を掌握したキュロスは、さらに小アジアのリュディア王国、エラム、メソポタミアの新バビロニア王国を滅ぼした。

紀元前 525 年にキュロスの息子カンビュセス 2 世(カンブジャ)はエジプト(エジプト第 26 王朝)を併合して古代オリエント世界を統一したものの、エチオピアへの侵略には失敗した。カンビュセスは弟のメルディスを殺した。カンビュセスの死後の 2 年間はメディア人のマゴス、ガウマータが実権を握ったが、ダレイオスをはじめとするペルシャ人貴族たちの謀議によって打倒された。

ダレイオス 1 世とその子クセルクセス 1 世(クシャヤールシャン)はギリシャ征服を計画してペルシャ戦争(前 492 年-前 449 年)を起こしたが、失敗した。紀元前 490 年にダレイオスが派遣した軍はマラトンの戦いでアテナイ・プラタイア連合軍に敗れ、紀元前 480 年のクセルクセス自らが乗り出した遠征はサラミスの海戦、プラタイアの戦いなどでの敗北を受け、失敗した。

## ●⑨「アレキサンダー大王とペルシャ帝国崩壊の状況」

「アレキサンダー大王」について・・・インターネット検索「Wikipedia」より紹介

### アレキサンダー大王の若年期

図 12: 哲学者アリストテレスの講義を受けるアレクサンドロス

アレクサンドロス 3 世 (Aleksandros III, BC356-BC323)



アレクサンドロス 3 世はピリッポス 2 世とエペイロス王女オリオンピ阿斯の間に生まれた。ピリッポス 2 世はヘラクレスを祖とする家系で、オリオンピ阿斯はアキレスを祖とする家系であったから、ギリシャ世界で最大の栄光を持つ両英雄の血筋を引くと考えられ、家系的栄誉はギリシャ随一であった。紀元前 342 年、ピリッポスはアテナイからマケドニア人の学者アリストテレスを「家庭教師」として招く。アリストテレスは都ペラから離れた「ミエザの学園」で、紀元前 340 年までアレクサンドロスとその学友を教えた。アレクサンドロスは「ピリッポス 2 世から生を受けたが、高貴に生きることはアリストテレスから学んだ」という言葉を残すほどに、アリストテレスを最高の師として尊敬するようになる。また、彼と共にギリシャの基礎的な教養を身につけた「学友」たちは、後に大王を支える将軍となった。

東征中、アレクサンドロスの要請でアリストテレスは『王道論』と『植民論』を書き送ったといわれる。アレクサンドロスも、各国から動物や植物を送り、アリストテレスはそれらを観察し、研究を続けた。アリストテレスとの交流はこうして、アレクサンドロスの死まで続いた。

### ギリシア南部出兵・即位

紀元前 338 年、アレクサンドロスは 18 歳のときに一軍の将として父に従ってギリシアの南部に出兵しカイロネイアの戦いでアテナイ・テーバイ連合軍を破る。これが彼の初陣であったが、このときアレクサンドロスは精鋭の騎兵を率いてアテナイ・テーバイ軍を壊乱させ、マケドニアの勝利に大きく貢献した。

父ピリッポス 2 世はこれによってギリシア諸ポリスにコリントス同盟(ヘラス同盟)を締結し全ギリシアの覇権を握ると、続いてペルシャへの東征を計画したが、紀元前 336 年に護衛のパウサニ阿斯に暗殺された。

### ペルシャ東征に出発する(BC334)

20 歳の若さでマケドニア王を継承したアレクサンドロスは、敵対者を排除してマケドニアを掌握すると、トラキア人と戦うためにイストロス川方面に遠征して成功をおさめ、その隙に反旗を翻したテーバイを破壊し、父王暗殺後に混乱に陥っていた全ギリシアに再び覇を唱えた。ギリシアの諸ポリスを制圧したアレクサンドロスは、マケドニア本国の押さえを重臣アンティパトロスに任せた。

紀元前 334 年にギリシア軍を率いてペルシャ東征に出発した。





図13: 東方遠征とイッソスの戦い



左がアレクサンドロス、右がダレイオス 3 世



紀元前 334 年、父の遺志を継いでマケドニア軍を率いてペルシャ東征に出発し、小アジアに渡ったマケドニア軍 38,000 はグラニコス川の戦いで小アジア太守の連合軍 4 万と対峙した。この時、派手な甲冑を身に纏ったアレクサンドロスは騎兵の先頭に立ち、自ら馬を駆って突進すると敵将ミトリダテスを投げ槍でしとめた。この印象的で鮮やかな勝利によって、アレクサンドロスは味方将兵の信頼を得ると共に敵に対しては計り知れない恐怖心を与えることになった。カリスマ性を帯びたアレクサンドロスに率いられるマケドニア軍は、小アジアに駐屯するペルシャ軍を蹴散らしながら東進を続けて行く。

紀元前 333 年、ついにアレクサンドロスはアンティオキアの北西イッソス(英語版)において ダレイオス 3 世 自らが率いるペルシャ軍 10 万と遭遇する(イッソスの戦い)。アレクサンドロスは騎兵と近衛兵、徴募兵を縦横無尽に指揮してペルシャ軍を敗走させ、ダレイオスの母・妻・娘を捕虜にした。このときペルシャから和睦の申し出を受けるが、これを拒否しさらに進軍を続ける。

## 図14: エジプトの征服

前 332 年 - 前 331 年

アレクサンドロスは、シリアにおいては反ペルシャの都市が比較的多かったため歓迎されたが、唯一頑強に抵抗したフェニキアのティール(Tyre、現ティルス)を屈服させると、さらに南下してエジプトに侵入した。



エジプトは 11 年前の紀元前 343 年にアルタクセルクセス 3 世によって征服されたばかりであり、ペルシャの統治が根付いていなかったために占領は容易であった。紀元前 332 年、エジプト人に解放者として迎え入れられたアレクサンドロスはファラオとして認められ、「メリアムン・セテプエンラー」というファラオ名を得て、アメン神殿にその像を祭られた。彼は少数の部隊を率いて西部砂漠のシワ・オアシスにあるアメンの聖地に行き、ここで自らをアメンの子とする神託を得た。アメンはギリシャ神話のゼウスと同一視されており、これはアレクサンドロス大王はゼウスの子であるという神託に等しかった。また、その後ナイルデルタの西端に都市を建設したが、これが現在のアレキサンドリアの起源である

エジプトの地で将兵に十分な休養と補給を施したアレクサンドロスはペルシャ王国への遠征を再開。

### ペルシア王国の滅亡

紀元前 331 年、アレクサンドロス軍 47,000 は、チグリス川上流のガウガメラで 20 万とも 30 万ともいわれたダレイオス 3 世指揮下のペルシャ軍を破った(ガウガメラの戦い)。ダレイオスがカスピ海東岸に逃れると、ペルシャ王国はもはや風前の灯火となった。ペルシャ王国の中枢に乱入したマケドニア軍は、バビロンやスーサの主要都市を略奪、ペルセポリスでは一般民衆に対しても凄惨な虐殺と強姦が繰り広げられたうえ徹底的に破壊して焼き払った。ペルセポリスの徹底した破壊は、ペルシャ戦争時にペルシャがアテナイのアクロポリスを焼き払ったことへの復讐の意味もあった。ペルシャの中枢を占領した後も、アレクサンドロス軍はダレイオスを追って進軍を続けた。

翌年、ダレイオス 3 世が王族で側近であったベッソスによって暗殺されると、アレクサンドロスはダレイオスの遺骸を丁重に葬った。ダレイオスの死後も、ベッソスはペルシャ国王アルタクセルクセスを自称して抗戦を続けたため、アレクサンドロスはベッソスの不義不忠を糾弾してこれを攻め、スピタメネスとオクシュアルテスにベッソスは捕えられた後、アレクサンドロスに引き渡されエクバタナで公開処刑された。

図15:ソグディアナ方面の占領

前 331 年 - 前 323 年



中央アジア方面へ侵攻したアレクサンドロスは、再び反乱を起こしたスピタメネスを中心とするソグド人による激しい抵抗に直面した。マケドニア軍は紀元前 329 年から紀元前 327 年までソグディアナとバクトリアにおける過酷なゲリラ戦を強いられ、将兵の士気の低下を招いた。好戦的な遊牧民であるスキタイ人も攻撃を仕掛けてきたが、アレクサンドロス大王やその部下であるクラテロスは遊牧民の騎兵にも勝利を収め、遊牧民の王が「アレクサンドロス大王の命令は何でも受け入れるので、どうかお許しください」と懇願するほどであった。また、クレイトス殺害事件や近習による陰謀事件など、アレクサンドロスと部下たちの間に隙間が生じ始めるのもこの頃である。なおアレクサンドロスは紀元前 328 年に帰順したこの地方の有力者、オクシュアルテスの娘ロクサネを妃とした。

図16: インド遠征とスーサ帰還

アレクサンドロスのインド行軍路(赤線)



ペルシャ王国を征服したアレクサンドロスは

次にインドへの遠征を開始した。

スワート渓谷でコフェン戦争(紀元前 327 年 - 紀元前 326 年)。

紀元前 326 年にインダス川を越えてパンジャブ地方に侵入し、5 月にヒュダスペス河畔の戦いでパウラヴァ族の王ポロスを破った。その後も周辺の諸部族を平定しながら進軍し、インドにおいて最も勇猛なカタイオイ人も制圧した。更にインド中央部に向かおうとしたが、部下が疲労を理由にこれ以上の進軍を拒否したため、やむなく兵を返すことにした。

11 月からアレクサンドロスは Hydraotes 川(現ラーヴィー川)を南下し、全軍を 3 つに分割してクラテロスと共に残存する敵対勢力を駆逐し、さらにインダス川を南下して Patala(現タッター)に出た。

ゲドロシア砂漠(現パキスタンバローチスタン州)を通過してカルマニア(現イランケルマーン州)に向かい、紀元前 324 年にスーサに帰還した。

この際、部下のネアルコスに命じてインダスからペルシャ湾を通過してユーフラテス川の河口までの航海を命じた。この探検航海によりこの地方の地理が明らかになると同時に、ネアルコスの残した資料は後世散逸したもののストラボンなどに引用され、貴重な記録となっている。紀元前 324 年にはスーサの合同結婚式が行なわれた。

## バビロン帰還と大王急逝

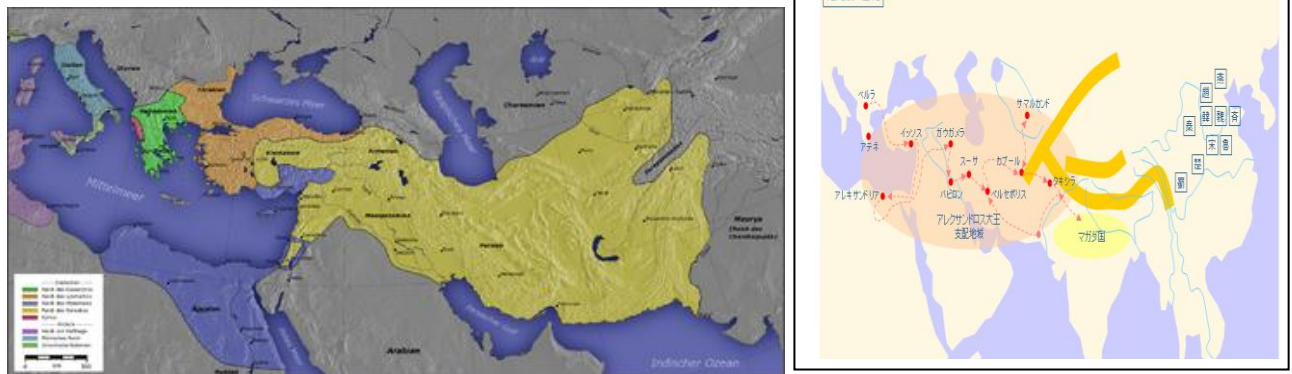
帰還したアレクサンドロスは、バビロンにおいて帝国をペルシャ、マケドニア、ギリシャ(コリントス同盟)の 3 地域に再編し、アレクサンドロスによる同君連合の形をとることにした。また、広大な帝国を円滑に治めるためペルシャ人を積極的に登用するなど、ペルシャ人とマケドニア人の融和を進めた。

この過程においてアレクサンドロスはペルシャ帝国の後継者を宣し、ペルシャ王の王衣を身にまといペルシャ風の平伏礼などの儀礼や統治を導入していったため、自身の専制君主化とマケドニア人の反発を招いた。

バビロンに戻ったアレクサンドロスはアラビア遠征を計画していたが、蜂に刺され、ある夜の祝宴中に倒れた。10 日間高熱に浮かされ「最強の者が帝国を継承せよ」と遺言し、紀元前 323 年 6 月 10 日に死去した。



図17:死後のマケドニア帝国の行方



残された大帝国では、彼の遺将たちが**バビロン会議**、**トリパラディソスの軍会**という2度の協定によって安定化を目指したものの、大王の遺言に忠実に「**最強の者が帝国を継承**」しようとして覇を争うことになり、**アンティゴノス**、**セレウコス**、**プトレマイオス**他の諸将による**ディアドコイ戦争**を経て分裂した。

アレクサンドロス大王の一族はディアドコイ戦争中に殺害され、大王の血統は断絶した。**紀元前3世紀**に**アンティゴノス朝**マケドニア、**セレウコス朝**シリア、**プトレマイオス朝**エジプトの**ヘレニズム三王国**が出現し、それらは互いに相争っていたもののひとまずはこの三国鼎立の形に落ち着いた。その後、**紀元前168年**にアンティゴノス朝が滅ぼされたのを皮切りに西方は順次**ローマ**に併合され、ヘレニズム諸三国はいずれもローマに滅ぼされた。東方は**パルティア**が勃興してセレウコス朝の領土の大部分を奪い、東方領はマケドニア人の手を離れた。以後東地中海から中央アジアに至る地域は**イスラーム帝国**の出現までふたたび大統一を見なかった。アレクサンドロスの遺体は**ペルディッカス**がバビロンから王都ペラへ移送途中にプトレマイオスに強奪され、**ミイラ**としてエジプトに埋葬されたとされる墓は未だに発見されていない。

東西4500kmにおよぶアレクサンドロスの帝国は短命に終わったが、ギリシャ、ペルシャ、インドという東西文明の融合によりヘレニズム文化が花咲くとともに、ヨーロッパと西アジアでは新しい世界観が生まれた。影響で中国北部の遊牧民族である匈奴の勢力が増し、シルクロードへの侵略が頻繁となった。

## ●⑩「竹取物語」

皆さんは「竹取物語」のお話はご存じのことと思います・・・なに、ご存じでない！

<http://www.manabu-oshieru.com/daigakujuken/kobun/taketori.html>

以下は(ウィキペディア)での概要解説の一部。( <https://ja.wikipedia.org/wiki/竹取物語> で検索)

成立年は明らかになっていない。原本の漢文は現存せず、写本は室町時代初期の後光厳天皇の筆と伝えられる「竹取物語断簡」が最古といわれ、完本では安土桃山時代の天正 20 年（1592 年）の奥付を有する「武藤本」が最古といわれる。しかし、10 世紀の『大和物語』、『うつほ物語』や 11 世紀の『栄花物語』、『狭衣物語』などに『竹取物語』への言及が見られ、また『源氏物語』「絵合」巻に「物語の出で来はじめの祖なる竹取の翁」とあることから、遅くとも 10 世紀半ばまでに成立したと考えられている。通説は、平安時代前期の貞観年間 - 延喜年間、特に 890 年代後半に書かれたとする。元々、口承説話として伝えられたものが『後漢書』や『白氏文集』など漢籍の影響を受けて一旦は漢文の形で完成されたが、後に平仮名の崩し字に書き改められたと考えられている。

図18: 竹取物語



『竹取物語』は、日本最古の物語と伝えられ、「物語の祖」とも言われる。遅くとも平安時代初期の10 世紀半ばまでには成立したとされ、かな（元は漢文）によって書かれた最初期の物語です。

内容は、「竹取の翁（おきな）」によって光り輝く竹の中から見出され、翁夫婦に育てられた少女かぐや姫を巡る奇譚。かぐや姫は五人の貴公子から求婚を受けるもこれを退け、帝から召し出されても応じず、八月の満月の夜に「月の都」へ帰る。『万葉集』巻十六の第三七九一歌には、「竹取の翁」が天女を詠んだという長歌があり、この物語との関連が指摘されています。

作者についても不詳。作者像として、当時の推定識字率から庶民は考えづらく、上流階級に属しており、貴族の情報が入手できる平安京近隣に居住し、物語に反体制的要素が認められることから、当時権力を握っていた藤原氏の係累ではなく、漢学・仏教・民間伝承に精通し、仮名文字を操ることができ、和歌の才能もあり、貴重であった紙の入手も可能な人物で、性別は男性だったのではないかと推定されています。

## 著者のプロフィール

ペンネーム：**日根乃主 もったり**

大阪泉佐野市日根野に在住

関西国際空港を眺め見て、穏やかな大阪湾の海岸の風景が……

(与謝野蕪村の句「春の海、日ねもす・のたり、のたりかな」の情景と重なります、句をもじって)

日ねのす ・ もたり

日根乃主 ・ もったり

古来この地「日根神社」縁起から「この地は日(太陽)神の国と根(地下)神の国との間にあって、豊かな野原の地」の意で、この地(日根野)に在住の主「もったり」と称することとしました。

1949 年生まれ

大阪市立菅南中学校 16 期生

大阪府立東淀川高校 11 期生

大学を出て、33 年間のサラリーマン生活を定年退職し、日根野の地で余生を送っております。

この小説を著わそうと思い立った動機は、祖父が残した一冊のメモノートからが始まりでした。「文章が世代をつないで行く」…著者が6歳の頃、祖父は亡くなりましたので、祖父の志や思いがどのようなものであったのか？…

祖父のノートの存在は青年の頃から知っては居たのですが、走り書きの文語調で、何が書かれているのか、ずう〜と、理解出来ていませんでした。

私も爺さんと呼ばれる年になり、ノートを読み解いて行くにつれて、彼が20歳の頃(西暦1900年)に現在の一橋大学の前身である「東京商業高等学校」で「倫理学」について聴講した内容であると知りました。

彼は意図して後世に何かを伝えようとした訳ではありませんが…彼自身が…書き留めたノートによって、青春を中国満州各地を見聞し、その後の生き方の指針となった。

「次の世代に、何かを残したいと思い立っても…、世代をつないで伝える事の重要さと難しさ」を痛感します。…私は歴史に何かを刻むほどの事は成し得なかった…

読者の皆さんは如何でしょうか？

皆さんの子や孫たちに皆さんの DNA の他に智慧は伝わったのでしょうか？

後世の人々が読んで「他愛のない、無意味な文」と笑ってやってください…しかし、何らかのメッセージを後世に発信するということは大きな意味が有ると思うのですよ。